

矢を射る流れに引傾きつゝ、底高く浮く渡船に、朝風颯と吹添ふ時……

「足は鈍いが、……船は早い。」

あの、熊澤の手の働きを見よ。見事に高波を切つて出た。中流に立つたお澤の姿は、八戒悟淨に守護さるゝ、渡天竺の順禮の風情があつた。

「然やうなら。」

「御機嫌よう。……」

船が棹にかはると見れば、向うの霧に早や吸はるゝ、身延の空にありあけの月、明星が唄つたやうに、鶯の聲が響いたのである。

龍膽と撫子



旅客。振分髪 おつかひ姫 毛利織夫。緋桃の雪洞 紅梅の苔  
 女神の佛—小鼓 祭の獅子 油車 菖蒲 十一二騎 郊外の  
 寮 うつくしい犠牲 その黒髪 彫工 屏風の繪 青絹  
 鑿 執着の粧 山寺 刺青 酒場 研屋 客僧 海道裏  
 行燈部屋 青い眉 板橋より 水引雛 紅のついた證書  
 大桑八兵衛 錦木 眇の神

旅客 振分髪

一

龍膽と撫子  
 國境の山々峰聳え、残んの雪の大空に、雲はや、暗く懸つたが、それは鎮守の森に隔てられて、  
 黒い影は此處には翳さない。  
 一方は、其の宮の境内を斜に控へた、片側村の、小家の藁葺が三ツ四ツ。樹立の枝に桃も李も、  
 ない頃ながら、朝煙のまだ消果てない霞に浮いて、薄日をほんのりと浴びた状は長閑だけれど、  
 土の濕りに青苔の皺を疊んで、渚のやうに背戸廂合まで直寄に寄せて居るのが、忽ち山間の里に  
 も、世の波の汐を想はせる。  
 路傍に里の小川がちよろくと、何處もおなじ憊うした村里の趣を平假名で書いたやうに流れ  
 て居る。此の家數で使ふのであらう……大な榎の根を左右に分けて、小さな土の橋を渡したのが、  
 半ば崩れて、縁に房々と藻を掛けた、其の藻に咲く、小さい白い花を、さらりと揺つて、水は



橋の裏をたゝいて、ひたくと流れて行く……葉ばかり、すらくと伸びた菖蒲が彼方、此方……此が燦と開いたら、村も、村人も目が覚めるであらう。  
時はまさしく五月中旬、朝もやがて十時で、雲の切目の空は青く晴れながら、あたりはものの寂寞して居る。

恰も常盤木の落葉もなし、掃かねど清らかな白木造の宮の、境内の青葉の中の鳥居も白く、それも寂しい。

時に……流のへりに、土橋の際に、菖蒲の葉も其の妹葉の丈ぐらゐる、いたいけな春恰好で、背後向にちよんと小さく踞んで、可愛らしい手に朱塗の櫓を持つて、蜻蛉が舞ふやうに一寸々々水をつけて、頬に掛るおくれ毛を搔いて居る女の兒がある。

おくれ毛と言つても、お河童の些と伸びたのを、鬢へ引詰めて、項へかけて、青いリボンで、リボンの方が大いくらゐるのであるが、開いた菖蒲に見紛ふにつけても、耳朶を掛けて頸許の美しく白い幼兒であつた。

處へ……飯坂——岩代國、信夫郡の温泉である。日もたしかに十五日、舊曆の四月八日の灌佛會と、もの日の重なつた日であつた——其の温泉の町の方から、俣が一臺、頬骨の張つた、頤の四角な、胡麻鹽髻で、眉毛のもぢやくとした親仁だが、色の赤黒い、巖乗なのが、向顔卷で、

がつくりと曳いて、石塊路だから、ぐらくと旅客を載せて來た。

客は寒い國を旅する用意をしたのだらう。薄手ではあるが、黒の冬外套を引締めて着て、同じ色の中折帽を、恚う頂きの立つのも構はず、無雑作に被つた、品のある細面で、皮膚の清い、白いまで色の澄んだ、鼻筋の通つた、尋常に唇がしまつて、而して半ば眠つたやうに目が細い。然も眦が凜と切れて、長い眉は、もの柔だが、深く瞼にせまつて居る。……此が二十代、三十の内外だと、悪く嬌氣々々するのだけれど、年紀は最う四十路を大分越したらう。短く撮揃へた餘り濃くない髻に、ちらりと霜が見え、鼠、また茶のやがて白く成らうとするのがばらりと交つた、蕭殺たるむら尾花の、神氣の颯爽さを象徴す、と言つても可い。且つ其の睡れるが如き目が、夜の淵の深さを想はせて、唯覗いたほどでは、底の知られない人物である。

鎮守の森の一方に、いま俣が前途斜に、其の女の兒の背後を通ると、額が明るく、しかし連山の雲に對して、瞑想に耽りつゝあるやうな面色した旅客が、急に目を伏せて、首垂る、ばかり、額髪を撫つける女の兒の水に映る影をさへ見詰めるやうに熟と視た。

が其のまゝ、行過ぎる俣の上から、

「おい、おい。」と沈んだ静な聲を掛けた。



「へいッ。」

と言つた、俣夫の親仁の返事が氣立たましい。唐突に五位驚でも鳴いた様である。大抵、風采を見ても知れるが、此の濫に口を利さうもない旅客は、思ふに乗つてから此處へ来るまで、一言も、ものを言はなかつたであらう、其の沈黙の故に、靜な聲も力があつて、貫くばかり親仁の耳に響いたのである。

砂利も石も搔淫ました荷車の轍の跡を、ぐら／＼と曳きながら、吃驚したやうに、向顔卷を振つて捻向くと、丁ど呼留めつ、旅客が、うしろを振り返る處を視た。

雪を刻んだ山が碧い。

「旦那様、ありや吾妻嶽でござりますよ。」と言つた。親仁は旅客の横を向いた顔に目當を讀んで、國境なる高山の名を呼ばはつたのである。

「あれを越えると、會津でがす、若松へ出るでござりますわい。山麓の温泉が五個處が處ござりましてな。はあ、五色温泉と申しますだ。やあ、見さつせえまし、三つ、四つ、薄い奴と黒い奴と、雲も五處、山の土手腹さ飛んどりますだ。」

此の親仁、相應に話好事と見えて、口をむぐ／＼して居たのが、名所自慢を一時に噴出した、但し雲の五處は聊か形容に過ぎたと見えて、一朵雲は笑消した。

「へ、へ、へ。」

旅客は一寸點首いて、

「然う。」と唯軽く言ひながら、且つ曳く路悪に揺られながらも一息伸上るばかりに顧つた、瞳の行く處は、吾妻ヶ嶽の巔の雪ではなかつた……向直ると、

「待て。」

「はッ。」

「一寸下してくれ。」

「え、え、お忘れもんで、やあ。」

と梶を絞つて巖乗に構へた腰は、年は取つたが、しやんと來いで、一氣に飯坂まで驅戻りさうな意氣込があつた。

「いや。」

「あ、お帽子……洋杖が落ちましたか。」

「いや、杖は持たん。」



とももの静に——年寄の癖に氣疾に慌てるのを苦笑もせず——もの静に、

「とに角一寸下しておくれ……手間は取らせない。」

「何の、何の旦那様、御緩となさりまし。」

ときよとりとした時は、旅客は既に、スツと下立つと齊しく、あとへ清らかに歩を返した時で、見た目は違はぬ。すらりとした、丈立の整つたのが、行くとともに、田畑を左右へ吹さらしの風を受けて、外套の袖と裾と片煽りに颯と靡く。

吾妻ヶ嶽の雲一叢黒く翼を捌いた時である。

蒲公英のほうけが、フツと飛び、小草に交つて角ぐむ蘆の、雲にさらりと蔭つて伏す路沿ひに、ト吹撓つた旅客の姿は、野末を一人行く旅僧の寂しき狀に似て、非ず、俗なるがために却つて高軒の四邊を拂ふ趣を添へた。

小刻みの歩軽く、然も飄々として見える。風は宮の森を通さない。

が尙ほ後から庇ふやうに、くるまつた外套の下に、左右の手さきを見せて、旅客は徐に女の兒の背後に寄つたのである。

とも知らぬ狀で、女の兒は、丁ど朱塗の櫛を、片手へ休めて、片手で二三度鬢を撫でた。でも尙ほおくれ毛をはらりと振つて振仰ぐやうにした時、項が縮むやうに襟へ着いた、風情が、いた

いけさ過ぎて可哀に見えた。

此を視ると、密と立つて忘れたやうに垂れた手を、旅客は高く打拱くと同時に、衝と額を伏せて、目をしばた、くやうに見えた。

「今日は。」

と言ふと、房りした柔な髪に手を當てた。

其の兒の振向いた、大きなおとなしい瞳と、濃い睫と、長い眉を凝と視て、莞爾して、

「い、髪だね、い、髪だね。」

と密と撫でて、

「御免よ。」

と又莞爾して、

「い、髪だね、い、姉ちゃんだね。」

と云ふうちに、少しこゝみ掛つて、女の兒の額に接吻しさうに見えたが、衝と胸を引くと其のま、俥の方へ引返した。

女の兒は菖蒲の葉の中へ、眞白な大輪がパツと咲いたやうに顔を上げて立つた。而して一層大きく清い目を睜つて、恍惚と併し驚いた様に見送りながら、女性の天稟の優しさは、いま讚稱へ



られた額髪に、両手で朱の櫛をのせたのが雪の峰の横雲に、紅玉を挿す、日の曙光の如くに見えたのである。

三

「旦那様、それが發電所の大瀧でござります。摺上川の流の奥へ三里ばかり参りました谷間で、また格別な景色でござりますよ。」

伊達の停車場へ着くと、件の旅客は構内へ入つたが、時間も丁ど、何となく間の宿らしい、乗客も疎らな、其の僻隅の方に男女とも一團に成つて居る。待合の其方此方を見廻したあとで、其の大瀧の寫眞を引伸ばした額面の前へ立留まつたので、革靴をさげて、あとに附いた親仁が、腰に附添つて、鼻の穴をむすくとさせて仰向いて、説明をしたのである。勿論賃錢は未だ受取つて居なかつた。

「……此のあとは一時三十分——」

先刻の吾妻嶽ではないが、また違つた、返事のかはりに時間を呟いて、一寸時計を出して、構内の大時計と合せて、年紀の様には節の立たない男にしては細いほどに見える、しなやかな指の尖で、其のセコンドの上を、二つばかりコトコトと敲いた、旅客は大瀧の額と並んだ、實は上りの

の時間を見たのであつた。

時計を袖の下へ突込むと、例の柔和な目で、顔を細く親仁を見た。

「お爺さん、一寸其處まで来てくれないか。」

「へいへい。」

「あ、其の革靴は可なり重からう。」

と早や構内を出掛りながら、

「何處か、其邊等の椅子へ置いといて可い。」

「え、減相な。」

親仁は勞られた旅客の情に酬いる氣か、提げて居た革靴を今度は肩へ乗せた、お剩に片手で梶を上げて、空俵を曳きながら、構外の廣場を前へ立つ旅客に續く。

あれは、連なつた山々と、畠沿の長い街道を見て、右に行くのが飯坂の道である。旅客はいま其處を通つて來た。

旅客は今度は……左斜めに西側に些とばかり家並の揃つた方へ志して、町らしい中へ入りかけると、すぐ二三軒目に御休憩所の暖簾が見える。其處へ入つた。おなじ店は角にもあるが、それは停車場から直接あけに見通してあるから、氣忙しいので避けたらしい。



「お二階がございます、何うぞお上りなさいまして。」  
「お世話に成らうかね。」

と言つたが、親仁が草鞋穿で居るのを見ると、土間の椅子へ掛けた。

「いや此處で宜しい。」

卓子には白い切を掛けて、灰皿が置いてある。一寸バア紛ひの、近頃はどんな場所にも、此の風が見られる。が、遠い山里の場所によると、雑壇の行平の配所のやうでもの佳しい。

「おビール」

と仕入ものなる松風の聲。

「些と寒い、火鉢が貰ひたい——酒はあるね。日本の——ある。……其を貰ひたい。燗をよくして、お爺さん、其處へ掛けておくれ、遠慮をしないで、實はお前さんに少し話したい事がある。」

「へい、俺がに、へい。」

「それから姐さん、お銚子を。車夫さんの分は別にするんだよ、銘々酌の方が氣が置けなくつて可からうから。」

親仁は、大きな口を開けたまゝ、黙然で顔中の皺が一つ、莞爾々々して居る。

「召しあがりますものは、お肴は。」

「然うさな。」

と欲しくはなささうで、

「何が出来る。」

「ぬたに、お鱈、焼豆腐、芋、人参、西洋料理、何でも出来ます。オムレッツ、カツレッツ、フライ、パン、天麩羅ア。」

と一息に早口に饒舌つた。

「あ、天麩羅が出来るかね。」

「や、旦那様。」

親仁は、卓子にさしむかひで、堅く成つた掌を擡くやうに慌てて開いて、

「お口には合ひましねえ、鯨の種だぞ。」

「いや、其奴は不可ん。私は何にも欲くない、鰯が見えたね。あれを焼いて細く拵へて貰はうか。お爺さんには見計ひで、旨さうなものを出しておくれ。」

「旦那様、俺がのなら御無用だ。腹は満いで。」

「まあ可い。女中さん、あとで竹の皮つつみに成るものなんぞが可いだらう。」  
と行届く。親仁は、かなぐつた顛巻とともに、顔にしまりがなくなつて、



「如才もあるまいかな、女中、旦那様の鯛は水でこしくとよく洗つて、すつぱりと布巾で拭いた處へ鹽をばら／＼と掛けるんだ。不精をしまいぜ。東京の方だ。」

「知つてるよ、鯨親仁。」

「天麩羅の仇をするな、此の通草女。」

四

「時間は構はん、一汽車おくらせる積りだから、悠暢で可い——話と言ふはね、お爺さん。——先刻、宮の前のちよろ／＼川で、髪を撫つけて居た女の子だ。」

「え、あの兒。」

と、古半纏の襟を卓子に押出したが、さて張合がなかつた。股引の膝に置いた手拭の、だらけた様子、乗込んで話に應じられさうに見えぬのである。

「あれは、何處兒か知らないかね……何處子と聞くのも可笑いが。」

「へい、旦那様のおつしやつた通り、滅法いゝ兒でござりますが。」

此の親仁が知つて居れば、最う疾くに、饒舌らずには置かない。山を見れば雲を語り、額を揚げば瀧を説くほどのものが、故と俵を下り、行向いて、つむりを撫で、髪を愛したほどである。

「旦那様あの兒は、」とすぐにも遣出しさうな處を、何にも言はずに曳出した。旅客も又その時車上で一言も出さなかつた。

「はあ、何と云うて、何處の兒でござりますかな、俺がは、この土地の生れでござりましねえが、最う、苔が生えて巖ぼこに成りますほどに、此の停車場界限に巢を食つて居りまして、外に仕事はござりません、お客様を飯坂まで送迎をするでござりまして、朝に晩に、あの鎮守様の前を往還しますが、今までに、あの兒は、と眼に着けた事はねえでござります。尤も、はい、小兒たちは、びよん／＼と飛跳ねて、遊び廻つて居りますで、其の中に何時かは居たでもござりませうかの。どだい、此の節穴だで（と目をさして）石塊と玉との見分けはござりましねえだ。それに、宿場こぼれの、彼處は村でも一部落離れた處でござりますので。」

旅客が軽く口を入れた。

「……—何か……とでも言ふやうな處かね。」

「何、滅相な。」

と言譯をするやうに手を振つて拂消した。

「決して、はい、そんな事はねえでござりますが、船頭馬士で、此方人等が味噌で居酒でも遣りますか、鹽辛え鮭の切身を買つて戻らうと言ふ場所ねえで、すたく／＼通抜けます所だ。——」



え、上りのお客様であの鎮守様まで参りますと、街道で退屈をさつせえたのが、温泉宿は最う近いと勇まつしやる、處で一息勢をつけて駆けますが、氣のもので、御祝儀に成りますだ。：下郎の口だ。——旦那様の前でござりますが。

と鯨を横嚙りに食て遣りながら、

「下りの時は、那の邊まで、すつと下りの勾配で迂りますで、どつちにも足溜りのねえ處でござりますでの、其でに、はい餘計氣が着かなんだでござりませう。え、折角お尋ねに成りますだに、はての。」

「いや、知れずとも構はんのだよ。」

「でござりますが、はての。」

と猪口を片手に、挾つた口の鯨を、舌でこなして、掌で頬邊を敲いたが、

「馬力の連中が、お、思ひつきました、よく、あの境内で休んで居ますで。いや、生憎と丁ど切めで、此處等の等が居りましたねえ。」

停車場の構外なる草場の端に、空依の落掛つた大八車が一臺、曳棄ててある計り。其の日向の影がさして、雀がばらばらと飛んで居る。

「思ひ掛けましねえ、えらい御馳走で、魂さぶつくり返つて、はたと打忘れて居りました。帳場

の夥間に知つとるものがござりませうも知れましねえ、一寸と聞合せて見ますべし。早くすれば可い事に、親仁め、酒で、はい、魂を打つくら返しましただよ。」

可い、構はんと留めるのに、慌てたやうに、最うのこゝ出て行く。閑寂なる停車場前を、其の荷車の傍から一人突切る状は、案山子に後光が射すやうである。

空は晴れた。椅子の傍から卓上に浴せる日影に、旅客は外套を脱ぐと、細い大島の着ものに、くすんだ紺の無地の羽織で、一層着痩せが見えた。が、懷中をゆつくりと、眞田打の細紐をきちんと結んで居た。

トン／＼と卓子を打つて、二つ三つ、ぼた／＼と溢れた蠅を追ひつ、埃及らしい金口を吸着けると、沈着に冷静なる態度に似ず、可愛らしいまで唇を尖らして、強く吸ふと、髻のやうな煙が一齊に立つたので、眉をしかめた、鼻筋の通つた容は、學者らしくも、思はれる。

旅客は、スツと深く吸つて、さて落着いて、此の巻苺ほどの煙突も見えず、絲の如き煙も立たない。日向へペンキのこぼれたやうな、停車場の前に、四五臺俵にはさまつて、親仁と一所に、車夫たちの寄るのを見て居たが、チュツ／＼、轉る雀の聲を近く聞くと、貰持てる手を忘れたやうに膝に投げて、目を伏せて卓子に額を壓へた。



こゝで瞑想したらしい景象と圖面が、やがて、引返して來た親仁に對する旅客の言語の中に顯れたやうである。——勿論親仁は念のために、此の休憩所の店でも聞合せた様子に見えたけれど、女の兒に對する何の發見した事もなかつた。

「いや、私の思ふ事に就いて、何處の兒だか知れなくても些とも差支へはないのだよ。——唯、話の取かゝりに尋ねて見たばかりだから。」

と例の俯向くと、唇の兩傍へ柔な線がすつきりと潔く刻まれる。心は深いが、低い聲で、靜に言ひながら、唯懷中を覗いた顔が、何となく無邪氣に見えたが、古代更紗の大型の紙入から、紙幣を五枚抽いて、半紙にくるくると巻いた。

親仁の面は、吾妻嶽の雲ではないが、色々に映つた。猪口の酒の黄色を覗く、赭ら顔の、目が白い。

旅客は、しなふ指でスツと押して、

「此處に少いが、若干金がある。……此をね、お爺さんが託つて、あの女の兒に進げておくれ。」

「へ、い？ あの兒に。」

「甚だ立入つた事だが、衣服の襟は、觸ると垢で冷たかつた。……餘り裕福な家の兒ではないらしい。……尤も大百姓の嬢ちゃんでも都會と違つて、三日だと言つて、着換もせまいし、不斷質素で儉約をするから、一向服装に構はないのかも知れない。しかし、執方にしろ、これは博愛だとか、慈善だとか言つて、施捨をすると言ふ意味は些ともないのだ。——たゞあの、九つにはまだ成るまい、六歳か七歳の兒が髪を撫つて居るのが最惜い、可憐しく、可愛らしく、そして不便だつた。……いまの、あの、年紀で、何の外見があらう、虚飾があらう。うまれて姓を婦にうけた、優しさと、美しさと、たしなみだ。其のたしなみは、何のためにするかと言へば、習ひも教へもしない先から、盡く男に對する厚意だよ。深切だよ。其の情は、われ／＼男の身に取つて、花に對する、露の慈みも、目の恵も同じなのだ。何の欲も、汚れもない兒の、唯一人、菖蒲の流れで化粧した姿は、天人、神女と言つても可い。又其の慈悲も、人間の男に取つて、神佛の慈悲と少しも變りはないのだ。

あゝ、あの最惜さ、可愛さを思ふと、妙齡に成つた時、徒に口の花片を窺つたり、毛一筋でも汚すものは、神を犯し、佛を亡ぼすと同じ罪だ。

また譬ひ、あの兒が悪魔でも、毒婦でも、其は構はん。たゞ美しかれ、と男のため、結髪化粧する其の心だけに、われ／＼は禮拜をして可いと思ふ。草が露を吸ふやうに、しみ／＼と嬉しく



なつて嬉涙が出兼ねない。」

と熟と目を閉ぢた。

親仁は据眼で聞いて居る。

「こんな話がある。——話だが……同じ此の奥羽地方の深山の大沼の汀に、朝霞の晴間に、うつむけに成つて髪を梳いて居た、膚の眞白な婦がある。此を獵師が見たのだね。此方の岸から遠く見てさへ、其の髪は六尺に餘つて、端が水面に沈んで居たと云ふのだ。確に化ものに相違ないと強薬で鼻膏を引いた奴が十分に狙つた。——二ツ彈丸は見事に其の女の乳の眞中を射抜いて、眞赤な血が絲のやうに走ると、婦は倒に沼に沈んだ。瞬く間に山も谷も暗夜に成つて、沼の水は湯のやうに湧いたと言ふのだが、土地柄のことだ、私よりお爺さんの方が聞いて知つて居ようも知れん、何う思ふかね……人間何に迷つても其の獵師の心には成りたくない。妖ものが何うしたんだ、悪鬼魔神にもしろ、色の白い女が髪を梳して居たら、山の端に残る有明の月が其の姿見に成れよと思ふのが人情ではあるまいかね。

私は自讃をするのぢやないよ。馬鹿でも白癡でも構はん、あの兒の、あゝした姿を見た時は、正直に拜みたかつた。清らかな鎮守の杜に姿見さへ透いて見えた。雲も、森も、山も、巔の雪も、皆あの兒の姿見の縁を飾る彫刻のやうにさへ見えたんだ。

其處で、心ばかりだけれども、此は今も言つた通り、恵や施では決してない。あの兒の化粧代、白粉の料として進呈する。……お爺さん、憚りだが、取次いで貰ひたい。」

「ひやあ。」

と奇な聲を、しかし沈めて、

「旦那様——はい、よく分りましたやうでござりますが、此の……霧、靄が掛つたやうで、白い婦も、髪の毛もちら／＼として分りましたねえだ。酔つたではござりませぬかの……」

と撫廻すやうに顔と手を振りながら、

「旦那様のお顔までがちら／＼としましてな、ふはツと成つて、取着處がござりましたねえ。名處も氏素性も知れまじない小ぼけな女つ兒に、大枚でござりますで、何分大枚でござりますでな。」

「尤だ、氏素性は私の方が第一に怪しいのだから。」

旅客は品よく微笑した。

六

皿に差置いた葎から、細い煙が眞直に立つ。——旅客は袴のやゝ長いほどな袖を悠然と捌いて手酌を含んだ。



「唐突に、化粧料を進呈する——まさか私の風采を視て、盗賊だとは、思ふまいがね、……あの  
兒がもし生年巳の年月でも揃つて居ると、人買の武士が生肝を狙ふ手附だなどと、氣味を悪から  
れまいものでもない。いや串戯だがね……では最う些と他の方面から安心の成るやうに。……」

——と言つて又話した——

維新前だが、上總國土崎村と言ふのに——名も分つて居る——源左衛門と言ふのが居て、五十  
餘歳で江戸へ出て、肥前の國主、松浦の邸に奉公をした。此の男は、天狗に攫はれた事が二度ま  
であつて、幽に狗賓界の消息を洩らしたのを、其の國主が記録に認めて置いた事なのである。

七歳の時、氏神の宮に遊びに行つた、村はづれで、馴染の栗柿を賣る小母さんの顔を見ながら、  
大な山伏に手を曳かれて誘はれたま、行方が知れなく成つた。——山伏と一所に山道を行つた事  
は、其の小母さんが見たのである。小兒は其時、内に何か祝事があつたので、淺葱地に馬を大き  
く赤で染めた漁師の大漁祝に着るやうな布子を着て居た。

二年三年を経ても歸らない。何の手掛りもないから、親たちは最う斷念めて、佛供養をして居  
たが、八年目の秋になつて、相模の大山の在から宿送りになつて歸つて來た。

山の中の祠の縁に、村芝居の石童丸と云つた形で寝て居た處を、草刈が日向で見つけたのであ  
るが、其の時おなじ其の馬を染めた布子を着て居た。不思議に裂も汚れもしない、帯はなかつた。

腰紐の迷子札に、在所の、名のあるのをたよりにして送つたのだと言ふ。

七つ八つ九つ八年めで十四に成つて歸つて來て、いま生れたやうな顔をして、「お山伏が歸れと  
言つた。」迷兒の源左衛門は其の外には何も知らない。

三年無事に過ぎて、其の年の春のくれ頃に、フィと又消えるやうに居なくなつた。勿論、内の  
ものはもう斷念めて居ると、翌々年三年目の同じ頃、今度は、栗柿が煎餅、ふかし芋に成つた、  
村はづれの小母さんの店の前へ陽炎の中へ夢のやうに出て來た。手織木綿の上だが、金襴の袈裟  
を掛けて、脇指を一本さして居る。そして澄して村へ入つた。

村中は天から鳶に乗つて降つて來たやうな大騒ぎ。——此の二度目に誘はれてからの事を、源  
左衛門が記憶を辿つて洩らしたのである。

其の二度目には、嚮の山伏が、廐の前——馬は野へ出て居なかつた——に小山の如く立つて居  
て、「迎へに來たぞ、目を瞑れい。」で、頬白を留らせるやうに肩に掛けて、金剛杖を脇に挟んで飛  
んだと思ふと、暖かい風が大波のやうに兩足を攫つて馳つた。

上州の其の村から——で、落着いた處は、越中立山の峰だと言ふ。大巖の洞穴があつて、其が  
加賀なる白山に續く。穴の中に青白い滑な石が三十疊ばかり、山伏が先んじて十一人居た。其の  
御坊たちが、源左衛門を誘つた先達を、權現々と稱へて上座に置く。折敷に乾菓子が運ばれる。



そして酒を飲んだ、やがて笙箏を唳々として吹くと、五人が颯と立つて舞ふ。月の光が、流るるばかり巖窟の床にさしたと言ふ。

其處で、かの權現の氣容と言ふと、白髮、白髯、髯は膝まで垂れて居る。慈悲、溫和。……魔ではない。神とはしかし申されまい、仙人と言ふものかと——其の後、毎日のやうに、源左衛門は山伏權現に具して諸國を經歷つたが、鞍馬の山、貴船の里は都にも世にも近い。この千疊敷には、僧たち山伏たちにあつて、下髪紅袴の上臈も居た。人には見えまい。參詣のものが、向うで、口の内に念ずる事は、一つく聲に成つて、よく此方の、團樂の座に聞取られる。個々に、あの願ひは、其の念は、と相議して、彼は協遣はすべし。此は聞濟むまじ、あの、馬鹿は何うだと大笑ひをする事なども見聞した。

時にかしい事は、俗に木の葉天狗と言ふのがある。源左衛門の話では、はくらうと此を稱へるさうである。此のもの等は、皆甲羅經し古犬……經立つた狼の毛の白く成つたのが變化をしたので。たとへば先の其の乾菓子にせよ、酒にせよ(袈裟、脇指も同斷であらう)人間界のものを買ひ調へる要脚は、其等のハクラウが薪を採つて町に賣り、重い車の後押をし、荷を擔ぎなどして稼ぐ。——木の實、草の實を摘んで賣りに出る事もある。……並木の蔭、逢魔時、薄暮の市、村祭の眞日中の群集には、村落、山間、至る處に、其の白狼が隠現し出沒して、天狗、山伏の入用

を、調へもし、稼ぎもする。……

「いや、鬼神に横道なしたよ。……何しろ酒は飲むさうだ。」

と言つて、旅容は一杯を乾した。續いて又手酌をした。

其の土崎村の源左衛門は、殆ど天狗の件をして、六十餘州日本中を經めぐつたさうである。が就中奥州に至る處の山嶽に、此の山伏の夥間が一番多い。遠野郡の山々、南部筋の峰々にはむらむら居る。湯殿山、羽黒山は言ふにも及ぶまい。第一此の吾妻嶽では、凄く美しいものを見た。「今も見えるね。」

と言つて、裏田圃の空を透したのである。

何處かで鶏の聲が遙に、もの靜に聞えた。

或時、あの山奥の深い崖の大巖に沿つて、山伏權現が杖をついてゐんだ。……勿論眞夜中だが、秋の玲瓏たる月である。木の葉が銀の呼吸をする、兎の毛がそよぎつ、碧い。渠等がゐんだ目の下に、輝く水のやうな、むら薄の蔭に、とや待をする獵師が一人居た。頭から猿の毛皮を被つたが、野袴を穿いて、兩刀を帶したから武士に違ひない、した、かな勇士と見える。人跡の絶えた處であるから。

羅の下へ列星を包んだ虚空を隔てた、眞向うの山の端へ、小指を立てたほどな眞白な影が立つ



と、それが花が一片舞ふやうに、峰添ひの空をちら／＼と下り狀に、此方へ近づく。  
 小鼓の音が、全山の月の寂寞を破つて、微に響いたが、音とともに次第に近づく、中空に段段薄霧の立つやうな姿に成つて、顯れて、色の濃く成るのを見ると、藤色の振袖に、金欄の帯をきら／＼と結んだ姫君であつた。  
 其の姫君が、浮いたやうに、鼓を肩に宙を通る。……  
 獵師の體は、肩背が腕つて、犬が武者振をしたやうである。大山伏の形は、其の背に先刻から近いても、こゝに聳えた巖に、蔓が掛つたやうな白い髭である、源左衛門は其の裾に踞つて居たから、それは獵師の目に着かなかつた。  
 最初は立つて、鐵砲で空を狙つた。姫の近づくとともに、折敷いて、銃口をびしりと向けた。が、左右にふれて照準が定まらないらしい。  
 唯見るうちに、姫の姿は、すら／＼と、丁ど獵師の目の前の二間ばかりの空を通る。しなやかな袂捌きも見えた、其紅の牡丹が霜に咲いたやうなのを見ると、鐵砲を落して、刀の夾に手を掛けた。が慌しく留めて、又鐵砲を取つたかと思ふと、再び地に棄てて、ハタと膝を折つて兩手を支く。  
 恰も其の頭の上を、ふつと浮いて通りながら、露のこぼれるやうな聲して、「よい分別、よい分別。」と言つて姫が莞爾した。其の美しさ、氣高さ、尊さに、天狗の中に交つた源左衛門も、我知らず俯伏して頭を下げた。  
 得ならず馥郁たる蘭奢の薫の裡に……「畏る。」と云ふ大山伏の聲がきこえたと思ふと、ハタと背中を敲かれた、此を合圖に、法衣の袖に重つて、源左衛門の小さな身體は虚空を刈田嶽の方へ飛んだ事があると言ふのである。  
 「明治に成つてからも……」  
 旅客は尙ほ續けた。  
 「私の友人に美しい奥さんがある。東京で育つたが、生は磐城平の人だ。奥さんが五つ六つぐらゐるの時、同じくらゐる遊びなまの男の兒で、天狗に親類があると言ふのが居た——戸外で遊んで居る、晩方、蛙が鳴くから歸ると云ふ黄昏に成ると今まで其處に居た顔が一つフイと見えなく成る。……月でもい、と、其の夜の中か、翌朝に成つて、町はづれの、小川の岸へ其の顔が、向うの山道からふら／＼と歸つて来る。こんな事が時々で、はじめは麓の町中が親たちと一所に騒いだ。中頃は馴れて、それでも親たちは、夜中なり、朝なり、川岸まで迎に出た居たものだけだ、それも馴れると、打棄つて置く。ひとりで歸つて来る。木の實、茸、其の時々で、いろいろな土産を貰つて来るが、大抵は一把づ、綺麗な花を摘んで来た。半道や一里近い山ではつひに

と、それが花が一片舞ふやうに、峰添ひの空をちら／＼と下り狀に、此方へ近づく。  
 小鼓の音が、全山の月の寂寞を破つて、微に響いたが、音とともに次第に近づく、中空に段段薄霧の立つやうな姿に成つて、顯れて、色の濃く成るのを見ると、藤色の振袖に、金欄の帯をきら／＼と結んだ姫君であつた。  
 其の姫君が、浮いたやうに、鼓を肩に宙を通る。……  
 獵師の體は、肩背が腕つて、犬が武者振をしたやうである。大山伏の形は、其の背に先刻から近いても、こゝに聳えた巖に、蔓が掛つたやうな白い髭である、源左衛門は其の裾に踞つて居たから、それは獵師の目に着かなかつた。  
 最初は立つて、鐵砲で空を狙つた。姫の近づくとともに、折敷いて、銃口をびしりと向けた。が、左右にふれて照準が定まらないらしい。  
 唯見るうちに、姫の姿は、すら／＼と、丁ど獵師の目の前の二間ばかりの空を通る。しなやかな袂捌きも見えた、其紅の牡丹が霜に咲いたやうなのを見ると、鐵砲を落して、刀の夾に手を掛けた。が慌しく留めて、又鐵砲を取つたかと思ふと、再び地に棄てて、ハタと膝を折つて兩手を支く。  
 恰も其の頭の上を、ふつと浮いて通りながら、露のこぼれるやうな聲して、「よい分別、よい分別。」と言つて姫が莞爾した。其の美しさ、氣高さ、尊さに、天狗の中に交つた源左衛門も、我知らず俯伏して頭を下げた。  
 得ならず馥郁たる蘭奢の薫の裡に……「畏る。」と云ふ大山伏の聲がきこえたと思ふと、ハタと背中を敲かれた、此を合圖に、法衣の袖に重つて、源左衛門の小さな身體は虚空を刈田嶽の方へ飛んだ事があると言ふのである。  
 「明治に成つてからも……」  
 旅客は尙ほ續けた。  
 「私の友人に美しい奥さんがある。東京で育つたが、生は磐城平の人だ。奥さんが五つ六つぐらゐるの時、同じくらゐる遊びなまの男の兒で、天狗に親類があると言ふのが居た——戸外で遊んで居る、晩方、蛙が鳴くから歸ると云ふ黄昏に成ると今まで其處に居た顔が一つフイと見えなく成る。……月でもい、と、其の夜の中か、翌朝に成つて、町はづれの、小川の岸へ其の顔が、向うの山道からふら／＼と歸つて来る。こんな事が時々で、はじめは麓の町中が親たちと一所に騒いだ。中頃は馴れて、それでも親たちは、夜中なり、朝なり、川岸まで迎に出た居たものだけだ、それも馴れると、打棄つて置く。ひとりで歸つて来る。木の實、茸、其の時々で、いろいろな土産を貰つて来るが、大抵は一把づ、綺麗な花を摘んで来た。半道や一里近い山ではつひに



見掛けた事のない花が多かつたと言ふ。が、其の奥さんが小兒心に覺えてゐるのでは、枝も撓な  
南天の實を抱いて來たので——不思議な事には、其の兒の袖にあるうちは、山から鶴がついて來  
て、其の眞紅な實を啄んださうだ。——又かと思つても、風に吸はれるやうに其の兒の顔の消え  
る時は、キヤツと云つて皆家へ散つたさうで。……若衆の中には、確に、ちよんぼりと背向きに  
成つて山の方へ、町筋を恚う上へ上るやうに行くのを、霧にも霞にも見透かして、行先を見届け  
ようと、あとを跟けたものもあつたけれど、水の流の音が聞えて、土橋を半ば渡つたと思ふと、  
搔消すやうに見えなかつた。どんな人が居るか聞くと（澤山、神主さんだの、お坊ちゃんだの、  
小母ちゃんだの、綺麗な姉ちゃんも居る……皆、お社のない神様なんだよ。）と言つたさうだ。——  
其處でだね。」

七

「昨日の朝だ、一昨日の晩、飯坂へ來たのだから。」  
旅客は言をあらためたのである。

「十時過ぎだつたらう。散歩をしようと思つて、あの旅館を町へ出た。一方は遊廓だ。反対の方  
の、一寸櫻並木と言つた中を二三町行くと、最う家はあるが、人に逢はない。折から車夫が一人、

車を洗ひかけて、銜煙草をして居たのが、前の晩、停車場から送つた男だ。」

「正六でござりますだ。……今日はまだ停車場へ参りませぬがの。」

「いや、別に今用はない。……其時、此の道を眞直ぐに行くと何處へ行くかね、と訊くと、山形、  
天童へ通ふ故道で、十五里あると言ふのだつた。十五里だけれども、聞いても遠い、見ても寂し  
い。……山又山だから、鐵道が通つてからは、殆ど人通りはないさうだ。其方へ些とばかり進ん  
で見たが、町を離れて兩方が畠になると、最う一里ぐらゐは人里を離れた氣がする。右へ折れる、  
日のぼつと當つた細い道があつて、桑畑で取巻いた、葉の中から、釣橋が向うに見えて、河鹿一  
つ、ころ／＼と高音で鳴くんだ。」

桑の實は、白い日影に青かつた。何うしてこぼれたか、此が今朝透明な湯槽の中に浮いて居た  
つけ……摘んでも見たが青かつた。

鐵骨だが、細い假橋だね、覗くと凄いほど深い、非常な巖の絶崖で、底の方に藤の花が暗く見  
える。

渡りかけるとギイ／＼と鳴つた。

其處で逡巡した——馬鹿な話だが、人つ子一人通らないのだから。

すると、桑畑の中を潛つて、ちよ／＼と出て來た七つばかりの女の兒がある。私の袖の傍を、



ちよろりと橋を渡つて行くから、(姉ちゃん此の橋は危くないかい。)と言ふと、人見知りもせず、色の白いのが、ぱつちりした目で振向いて、(危いわ。)と言つて莞爾した。どうも悪戯ものだ、悪い奴だ、おどかさやうだ、で可愛い口で、酸模草をちゆッ〜……と吸つて食べて居る。私は一寸妙に思つた。——西洋のお化に、酸模草を好んで食ふのがあるのを、書で讀んだ事がある。……此は細長い足にひづめがあつて、身體中が毛だらけで、顔が人間で、角の生えた山中の妖怪だ。

私は其の場合に、酸模草を噛る女の兒を見て妙に思つた。で嬉しかつた。

顔を視て此方も笑つて、(ぐら〜揺れはしないかね。)と言ふと、(揺れるわ。)とひよいと後歩行をする。愈々おどかさなコイツと言ふ氣で、つか〜渡り掛けて中途に成ると、何うだい。其の女の兒が、小さな腰で發奮を呉れて、橋板を踏んで揺つた。ぐら〜ゆら〜と其の揺れる事——アツと欄干に噛りついた、眞個だ。(悪戯をするな、危い、悪戯をするな。)眞個だ、尻つぴり腰でをかさも可笑し、危なさも危なし、眞面目に言ふと、うけ口を一寸掬つて、(臆病小父ちやん入らつちやい。)可いもの遣ろかで、酸模草を、日にきら〜と翳しながら、ついと渡り越して、蜿の道を桑畑で見えなくなつた。

——揺られたので、目がまひさうで、欄干につかまり、つかまり、太く體裁が悪かつたよ。そ

れでも渡つて、一本道が蜿るのだが、すぐに、其の兒は影も見えない。

——先刻からの話の續きを考へておくれ、魔とも天狗とも言ふまい。——私は山神、山姫のおつかひ姫に逢つた氣がした。勿論、我身勝手の面白さ半分だがね。しかし、

と、ふと口をつぐんで軽く又額を壓へた。

親仁は俯向いて聞いて居る。睡つたのではない。

「何だか、もう一度見たい氣がした。……お爺さん。」

「あ。」

「宮の前の小流れで、髪を撫でつけて居た女の兒は、……うしろ姿を一目見た時、あ、よく肖て居ると思つたんだ。——解つたかね……」

其處で、私の心では、此の若干金は、神のおつかひ姫に對するお賽錢だ。

賽錢を奉納する。其を取次いで貰ひたい。……此ならば不思議はなからう。」

と言つた。

「はあ、……最う此の上は、何だとして旦那様の仰有る事だ。で背く事はござりましねえ。が、其の様子では、あの兒も、はい、姿を消しはしねえだかの。」

「大丈夫、そんな事は決してない。」



「それで何でござりますか、昨日のおつかひ姫は、それなり消えたでござりますか。」

「消えたんぢやあないが、見えなかつた。細い道は、大分行つたがね。」

「其の先には、陸軍の衛戍病院が大きな地面に一つ建つとるでござりますが。」

「其處までは行かなかつたよ。然うかね。しかし、向返ると尙ほ寂しかつた。あたりも、たよりなく廣いやうでね。日の加減か、ぽつと白んで……何だか、大な野原にでも立つたやうだつたが、茫然とみまはすうちに、一人明い影のやうに、桑の根にうつむいて、箆を抱へて、草を摘んでる婆さんを見掛けたよ。撮んでゐるのは、よめ菜とも違ふ。白い其の目を吸つて粉を吹いたやうな柔かな草だ。うしろへ立つたが、人が来たとも思はない。(何をお摘なさいますな。)&quot;と訊くと、(エポオンバコでござりますわ。ほれ、もやくと産毛の様に柔かい。)&quot;と、覗く目に差上げて見せてくれて、(お浸しにしますか、宿屋で喰べましたよ。)&quot;と言ふと、みなりは粗末で、いかついもんべ袴を穿いたが、柔かな婆さんで、(ほれは違ひますがの、ほれはうこん木の葉だ、これは餅を搗くでござります。)&quot;と言つた。(御馳走様ですね。)(孫どもがの、はいはい。)&quot;で別れたが、成程おひたしは、うこん木と言ふのだつた。一寸、ほろ苦いのお膳で訊くと、女中が話した。其の時の話だが、漆の芽も、よごしなどにするさうだね。旨いと言ふが、此奴は東京では女小兒が少しばかり驚くだらう。また、漬物に、へら菜と言ふのがあつたつけ。」

「え、へら菜は常不斷、夏冬ともにござりますで。ほれ、あ、あの草原に、一株こぼれて生えとりますた。」

空車の根に生えた、其の菜の下から、俥の輪へ、チュツと鳴いて、雀が遊ぶ羽が光つた。旅客は衣紋を直した。

「お爺さんは、名は？……いや、ものを頼むからと言つて、身もとを訊くのではないのだ、少し考へる事がある。何と言ふね。」

さて、とろりとした赭い顔で、

「へ、俺がは、土崎村、源左衛門。」

「うむ。」

「天狗様に攫はれました。まるで、夢を見たやうでござりますで。」

旅客は禁ぜず苦笑をもらして、

「まるつた、此奴は。」

と言つて頭を壓へた。

トタンに、羽音がして、ぱつと雀が散つた。沈黙した停車場は、煙を呼んで影を吐く。……ぞろぞろと乗客が出て來た。



親仁は、のん気に、

「えへ、伊達驛前で分りますだ。平九郎と言ふでござりますが、こんな奴でござりますで。平八の方が通ります。平八、平八と呼びをるで。」

「汽車は、すれ違ひだな。」

と衝と立つた。

「平八さん、此で勘定——残りは少いが、お爺さんの手間賃だ。」

八

「はて、天狗様だかな。」

「平八爺——何うした。」

「何を、俺は土崎村——源左衛門だ。」

と酔つて居る。

夥間に、聲を掛けられても、上の空の平八爺は、旅客を送つて、停車場を外へ出て、其處へは足を留めなかつた。

實際、此の爺の身に成つたら、汽車の扉がトンとなると、旅客を吸込んで、凄い鐵の車輪の脚を廻して、鼻から黒煙を吐く怪物體が、すつと旅客を吸込んで、其のま、西北の空へ舞出したと思つたかも知れない。

茶店の土間へ、黴面を引傾けて返つて來ると、あとを綺麗に掃いたやうに立つた客の居た椅子へ、

「へ、」と笑ひながら叩頭をして、どつしりこと——元のおのれの椅子に掛けた。

まくり手に、銚子を取つて捻くる處を、例のエプロンを掛けた女中が、

「お爺い、其處は？……」

「黙つてろ。」

と勢よく睨んだ。が、中山高に、めりやすの股引、尻端折と言ふ扮装の新客が、洋傘を片手に入つて來たのを視て、慌てて膳をかさねて、ふりこぼした、鯛を引探つて頬張りながら、客の銚子を忙しげに振つて見て、一所にお膳に載せて、南瓜の帯をボンと敲く如く尻を擡立てると、ひよいと退いて、土間の隅の、縁側の、日當の悪い處へ引込んだ。

「はてな、何様だあ。」

と獨言で手酌を極める。

「まさかに、はい、狗賓殿ではあんめえ？」



時々小首を捻りながら、追掛けに銚子をかへて、やがて、とつちりものに成つて出て行くのであつた。

「練親爺い。」

と、エプロンが喚く。

「何を通草女。」

「置放しにしくさつて——俾を何うするだあえ？」

「煮て啖へ！」

胸も襟もすり抜けたが、お賽銭を預かつた、井の上へ、手拭を緊乎と結んだ、上三尺の意氣込みで、親仁の勢當るべからず。

「平八やい、何處へうせるだ。」

停車場から大呼びに呼ぶと、振も向かず、なぞへなる此の廣場を波に乗るが如く踏んで、

「雲に乗るだ、飛ぶだ、土崎村の源左衛門。」

其の癖、足もとは蹠跟と——飯坂道を大伸しに伸して行く。言ふまでもなく、湯原村へ取着の、鎮守を志して行くのである。

「あゝ、おつかひ姫様。なむ、なむ。」

と、雲を拜むうちは可かつたが、やがて、其の手をハタと搏つて——

「鹽釜街道に白菊植ゑて、

何を聞く聞きたより聞く。」

「やあ、平八。」

喉が狭いから、すれ〜に迂り抜ける、軽便鐵道の車掌が笑ひながら、

「乗つて行けよ、酔拂。」

「何を、屋根へなら打乗るべい、土崎村の源左衛門だ。」

九

けれども——其の列車が、隧道を潛るやうに、西日の蔭の森へ入つて、同時にパツと燈が點いた。鎮守の樹立をむかうへ望むと、急に大川に出逢つた如く、堅く成つて歩行出した。

道も通れば、境内の立樹の其處にも村の若い衆の形が見える。いづれ布子だけれど、皆浴衣を着たやうに派手であるお三日のやすみと、今日は灌佛會の遊びに、行つて歸つたのもあれば、此から出掛けるのもある、皆廓を志すのであらう。

「雀、雀、今日もまた、



暗い暗い、山道を、

可愛く透る聲がして、其の雀色時を、小鳥のやうに向うから、ちよこくと徳利を袖に提げて、草履穿で……顔の明るい女の兒。

「や、おつかひ姫。」

と窪んだ目を大きくし、……平八は、土橋の前に、天狗の部役に出ると云ふ、彼のハクラウの趣で、とぼんと立坊で、まだ灯を置かない、彼の藁屋を差覗いて居たつげが、通り越してつかつかと出迎へた。

「寂しいお家へ歸るのか。」――

「嬢ちやま。」

面の緒い、黒親仁が、半纏の袖で大事に抱据ゑるやうにして呼んだ。

「お嬢ちやま。」

「私？」

「お、お嬢ちやまや。」

「私……お嬢ちやんぢやないの。」

「ほう。」

「のちようよう。」

「居！ 居候……ほう、此は。」

と、其の徳利を見るにつけ、夢がさめたやうな目に、早やポロリと遣つた。

「お酒かなう。」

「いゝえ、お酢を五厘。」

と、言ふと、いたいけな手を開けた、お手玉の紅いのと浅葱の中に、一所に大事に、五厘の釣銭を握つたのを思ひ出したか涼しい目で視た。

鼻を啜りながら、にたくと笑ひかけて、

「御馳走、御馳走。」

と中腰に屈みかゝつて、

「はて、御馳走は何ぢやるか、爺も欲しいな、お腹が空いた。」

「私も。」

「ほう！」

「袂に何も上げるものないことよ。」



「堪らんぞ。」

と目を見据ゑて、

「滅相な。爺が何が要るもので、嬢ちやまは澤山まるらつせえ。何の御料理が出来ますな、酔、酔う買うて。」

「私んぢやないのよ、祖父ちゃんの。」

「お、嬢ちやまの祖父ちゃんの、そこで、お嬢ちやまの御馳走は？」

「お澤庵。」

「……お澤庵……可いもの可いもの。晩のお茶がお澤庵。それで……罪な事だぞ！……（と獨言して、）お晝はの。」

「お澤庵。」

「朝は？」

「お澤庵。」

親仁は聲が掠れたが、しやがれつぽく又言つた。

「可いもの可いもの、嬢ちやまは大お好き。」

「いゝえ。」

「それでは、何がお好きなの。」

「私、お魚。」

平八は、ぐたくと腰を折つて、流に踞んで四邊を視た。

「嬢ちやま、爺がおじぎをするで教へてくなんせ。嬢ちやまの、お母ちやまは。」

「遠いとこ。」

と、森の梢の星をさした。

「なむく／＼なむ、お父ちやまはの。」

黙つて又空を指した。

平八は今度は目がくらんで何も見えぬ。

土橋へ出た——十二三の男の兒が、

「おーい。」

「はアい。」

碌に此方を見もしないで、白い兵兒帯に兩手を高慢に突きすと、少年は身を横にして、へつと唾を吐いて、

「使がおそいで——」



「はい。」

すたくと駈けて行く。親仁は少時立てなかつた。

「いゝ皆さん彼處には、

父ちゃん母ちゃん待つて居る。」

平八はのめるやうに首を垂れたが、のそりと立つた。

「おつかひ姫が、お澤庵、あつかひ姫が、お澤庵。」

泣きしやべりに眩きながら、十綱橋の方へ——大跨に、

### おつかひ姫

一

「お兼や、お兼ぢやないか。」

飯坂温泉の旅館、松藤家、銀山閣の主人が、廊下を通掛る女中を呼んで、居室から言つた。

此の主人は、名は謙造と言つて、年紀は、もう五十左右である。年配と言ひ、身上と言ひ、も  
の理解の可い、心懐の大きい情のある、土地第一の名望家であるから、平八親仁は、此の人物を見

込んで、鎮守わきの、おつかひ姫の事に就いて膝を抱きに出て来た次第で。平八の心では、あの  
愛々しい女の兒が、五厘が處酢の使ひをさせられる様子と言ひ、朝がお澤庵で、晝がお澤庵で、  
晩が又おなじくで、それで「お魚が一番好き。」だと聞いたのでは、其上探らないでも、大抵身の  
上が察しられる。……どんな境遇だか知らないけれども、両親のない事は既によく分つた。——  
とに角然うした處へ、右の懐中の大枚を突出したのでは、女の兒のために、乾もの一枚、煎豆一  
袋にも成るまい、さて何う處置をしよう、と考へるまでもなく、すぐに思ひついたのは、此の松  
藤屋の主人であつた。

「大事なものだ。お預り下せえまし。や、もし、眞個に大事なものだ。」

と念を押したのは、番頭をはじめ、若いもの、料理人も、晩飯のあとの手すきに、ごちやく／＼  
帳場に寄合をつけて、五目ならべだ、將棋だと夢中に成つて、木の根をくり抜の大火鉢のまはり  
で、黒く成つて押合つて居たからで——「旦那は。」と、はじめ聞くと、關係のある此町の銀行へ、  
それも臨時の用で出向いて居て、留守だつた——其處で、件の金子一封也を、帳場の中へ預ける  
と、「可し、可し。」と番頭が手輕に取つて膝へ置くから、「眞個だよ、命から二番目のものだ、大  
金だ。」と言ふのに、勝負に夢中だから、此の親仁が唐突に妙な事を言ふのを不思議がりもしない  
かはりには、別段氣にも留めないで、うしろに背負つた用筆笥の抽斗に、氣なしにボンと入れな



がら、「あ、欲しい。金……一枚でも可い。」と言ふ、番頭の手には、桂馬ばかり三つ持つて、あせつて居るのだから餘程をかしい。——相手の洗方は火箸をまなばしに構へて——澄して居る。

時節柄で、浴客の數も少い。

平八は、いつも勝手に頂戴が出来る事に成つて居るので、奉公人たちの入る別湯へ入つて、とつぷりと浸つて、すつぱり草臥を抜いて、好い心持に成つて上つて来る、と謙造旦那は入違ひにお歸んなすつたと言ふ。「奥で御飯だ。」と聞いて、緩りと胡坐に成つて、負込んだ番頭の方へ助言を二つばかりして、飛車の命を漸く助けて、大な功德をした處へ、若い女中が通掛つて、「傳屋の親仁さん、御内證へ。」と聲を掛けた。

はて、直な旦那だから「何うだ平八」と、いまに出て来て、大時計の背後から顔を出しなさるだらうと思つた處へ、奥へ呼ばれたのは一層御懇篤で、忝い、相談に腰が入る、力搦の餅だ、と平八莞爾々々もので膝を立てた。

実際には用ゐるが、謙造は内で傾けるほどの酒客ではないから、晩飯も早く済んで、御新造と茶を入れて、行儀はい、が寛いで居た處。——

時に謙造の女房——此の御新造は、お芳と云つて、二度添である。容色もよし、年紀も少い……と言ふと、慙うした家にはありがちの、色白の女中でも直つたのか、藝妓上りでもありさうに

聞えるが、必ずしも然うした巫山戯たのでも、洒落たのでもない。小藩ながら、福島の家老の家に育つて、素性が正しい。教育も一通り、姿たをやかに、心優しく、上品で、まことに大旅館の御新造には備つて居るのだが、但し客商賣には向が悪い。

どんな客でも、つひぞ此の人の座敷へなぞ顔を出したのを見たものはあるまい。思上つたのも、權式ぶるのでも更にない。もの恥の強い、眞の内氣なので、若いと言つても三十路に近いが、餘所の男に對すると、ぼうつと、きめ細な色を染めると言つた質で……尤、註するには及ばないが、こゝで平八を見た處で、此の親仁に對して臉に血の上るやうな事は決してない。

で、内證に引込んで、針仕事ばかりして居る。貸浴衣の綻び寝衣の繕まで、皆御新造が針を持つのださうである。

此の座に、いま其の姿は見えないが、薫と云つて、今年九歳に成る女の兒がある。しかし實の娘ではない。後妻の中に兒のないため、これは御新造の姪に當るのを養女としたので、勿論、葉の上から引取つて育てた。

それから、前妻に男兒が一人、いまは最う二十を越した、一人息子の嫡々なのであるが、此は父親とも、繼母とも肌合も氣質もまるで違つて、軍人に成つて遠國に勤めて居る。雪松謙吉が其の名で、雪松は蓋し松藤屋の姓であるが、此の男の名は、後に少からぬ關係があるから、讀者に



御記憶が願ひたい。

二

座に茶が煮えて居る。

次手にお聞きに入れて置きたい事がある。茶話のつもりで一才御辛抱を願はうと思ふ。

聊か隠微な事ゆゑ、本名は少時預かるが、むかし、——天正の頃、九州の大諸侯に、隣國から娶つた後妻があつて、此の夫人が、類まれなる艶女で、姿たをやかに、情深く、優しかつた。

十九に成る若殿があつたが、名も知れない病にかゝつて日に日に衰へ果てて、どつと床に就いたまゝ、最早や枕も上らない。

醫藥、鍼灸、言ふまでもなく、其の頃の事であるから、神佛の加持、祈禱、聊かも懈怠はなかつたが、更に其の驗がない。一粒だねの世子である。

國中鳴を潜めた折から、城下を離れた片田舎ではあるが、世に背いて名聞に係はらない、一人の名醫のある事を聞出した。

すべて恚うした處で、偶然に顯れる名醫は、むかしから大抵功を顯して人の命を扶ける。要するに眞心を以て精進潔齋した、眞の信仰の奇特が顯れるので、此が神佛應驗の利益であらう。

城内では、其の薄汚い名醫を、神の如く謹んで迎へた——直な先生で、一向方角が分りませぬ、

何とぞよしなに御案内を、で若殿の病室へ伺候すると、一目で氣鬱の症と分つた——晝も短檠の要りさうな金殿の裡に、然も柩の如く垂籠めて、玉の如き若殿は、風が當ると消えさうである。

診脈の上……名醫は歎息した。

藥も、鍼も、些の效あるべき病症ではないので、この鬱症たるや、其の閉詰めた胸にひらきをつけて、心の結ばれを解かなければ成らない。

恐れながら、と此處は、佛も方便で、名醫が、町内の棟梁、出入の職人、些と勝手が違ふが、お育て申した乳母の格に成つて、さて祕に、密に、いろ／＼と御意を得たが、若殿はたゞ頭を掉つて一言も物を言はない。

翻つて懇に、孝道の大義を説いて、徐ろに問詰めると、若殿が枕刀を取つて引そばめた。退れと、憤つたのではない。恥ぢて自殺をしようとしたのである。

尤も、もの騒がしさを嫌つて、不斷人を近づけなかつた。

其處へ、床しい、衣の音が、はらく／＼として、馥郁たる名香の薫とともに、天女の如く立出でられたのは夫人である。

像て若殿のために、夜中、曉をかけて、御經を讀誦さるゝ、志であるから、待兼ねて容子を聞



きに參られた。

「若君、……お心地は？」

と座につかれたと思ふと、冷く、寒く、蒼かつた、氷のやうな若殿の面に、桃を溶いたやうな色がさつと浮いて、額に垂々とあぶら汗が流れた。

名醫が大殿の御前へ出た。

席處に額を近づけ、容體を問はれた時、

「相分りました、——お生命に別條はありますまい。」

と、申上げる。

「お、過分な。して、病症は？」

「恐れながら、戀の病に入らせられます。然るに依つて、其の戀を叶へ參らせずば、またお生命はありますまい。」と言つて、名醫は喟然として歎息した。

「やあ、安堵したぞ。予が身にかへても叶へて取らさう。對手と申すは。」

「我が君。」

と面を上げて、名醫は再び歎息した。

「はたと當惑いたしました。我が君、若殿様、戀の對手と申すは。」

「お、。」

「もはや、恁やうな場合にあひなり、何をお隠し申し上げませう……私の宿の妻でござる。」

「なんと？」

「先達て、お鷹野の折から、殖生の宿の垣間見より、お見染めなされましたに相違ないとの御意。申戯を言ふべき場所柄ではない。」

「さて……苟も夫たる、私に向つてお打あけの上は、との仰せにて、あはや御自害と見えましたを、折よくも夫人様お入り遊ばされ、しづかにお留め申されました。」

智略、俠勇、九州に鳴轟いた大殿が、若殿の戀する人妻の、其の夫に手を下げた。

「貴老、予は今、若とも、世子とも申すまい。唯一人の可愛い悴の一命を助けて給はれ。恁やうに致し、頭を下げます。」

「や、。」

と、少からず驚いて、

「御意遊ばさるゝ趣は？」

「悴のために、貴老の内室を申しうけたい、恩賞は請に任せる。」

名醫が屹と成つた。



「此は異な事を承ります。我が君、蟲虻たりとも、夫の身として、恩賞によつて、妻を賣ると思召すか。」

「まことに至極の次第、さりながら、外に手段につき果てた。領地残らずとは得申さん、半國を分けて貴老に進ずる、——平に忤をお助あれ。」

「相成りませぬ。」

と判然言つた。國手、此處が偉かつたのである。

「たとひ九州一圓を賜りませうと、誓つて女房は賣りませぬ。」

「予が一命にかへてもか。」

と殿の顔の色が颯と變つた。

「しかと、御辭退。」

言はせも果てず。

「坊主、退くな。」

と、反打つた角鏢の大刀にツと手が掛る。

「汝を斬つて妻を奪ひ、忤を扶くる。覺悟せよ。予は鬼畜では決してない。人間の道は存じて居る。同じ枕に腹搔割くぞ。」

「殿……しばらく。さては御生命にかへられても、屹と若殿をお扶けに相成りまするな。」

「言ふにや及ぶ。」

爾時、名醫が從容として、

「御心靜にきかされたまへ、今こそ眞を申上げる。若殿様、戀のお對手は、殿の令夫人に入らせられます。」

大殿も、名醫も、面を合せて、しばらくして、雙方はらくと落涙した。

——と言ふ話なのである。

三

「お、お兼……、禪なぞ取らんでも可い。」

主人は、敷居越に一寸膝を支いた、今日は下働きらしいお兼と云ふ女中に、

「帳場へ行つての、宿帳を持つて来るやうに然う言つてくれないか。——誰か、手のすいて居るもので可い。」

といひつけて——更めて氣を入れて、膝に手を置いた。

「さて……平八さん、相談は後にして、……些と妙だな、お前さんが、故々相談に見えたものを、



其の相談を後廻しと言ふのは妙だが、委細は飲込んで置いて、いまお前さんの話を聞きながら、私わたしが自分で、恚いかうと思つた、……すつぱりとした腹を言はう。

何も彼かもない。——私の内うちへ引取つて、其そのの女の兒こを育てようと思ふが——何どうだ。

親仁おやぢは堅かたくなつて目を睜みつた。

「へ、い、此方様こなたさまへお引取り、……旦那様だんなさまが。」

「此これも。」

と、御新造ごしんぞうを、主人しゆじんが願つて、

「無論、其そのの氣きに違ちがひない。此このの通り無口むくちだから、此處等こゝなどは婦人をんなが口を出して差支さしつかへない處を、何も言はない。けれど、其そのの（おつかひ姫ひめが、お澤庵たくあん）か。」

親仁おやぢさんが、兩親りやうしんを聞いた時とき、其そのの兒こが暮方くれがたの空そらのお星様ほしさまを指したと言ふのを聞いた時とき、涙なみだんで私わたしを見たので、よく其そのの心持こころもちが分つて居る。

御新造ごしんぞうは、頸脚えりあしの白しろい背向うしろむきに成つて、半紙はんしに蒸菓子むしごを装つて居た。——此このの土地とちは思おもひのほか、好いい菓子くわしのある處ところだから、優やさしい箸はしに、紅白こうはくが見事みごとである。

「親仁おとつさんにはお宗旨違しゆしちがひだが、左ひだりの方は後あとで緩ゆるり又一杯振舞まふとして、湯上ゆあがりに苦にがい茶ちやもさつぱりとして好いい物ものだ。」

と、此方こつちが手順てじゆんだから、主人しゆじんが其そのの菓子くわしを取次とりつぎながら、

「不ふ断だんから、此これとも話はなす事ことだ。うちうちの薫かをは元氣げんきよく、小鳥ことりか何なんぞのやうに跳廻はねまつて遊あそんで居るが、此これが花はなでも人形にんぎやうでも、それがさ、綺麗きれいにした處ところで、蝶々てつてつを見ても然さうだ。私わたしは商人あきんどだから俗ぞくな考かんがへかも知れないが、唯一たひひとつと言ふものは何なんだか寂さびしい。對つが欲ほしい。もう一人居ひとりたらどんなだらうと言暮いひくして居た處ところだから、聞いたばかりでもすぐに抱だいて持つて來きて、此この座敷ざしきを、すぐに、花はな畑はたけなり、紅あかい、青あおい、黄色きいろい木の實みの林はやしにして、遊あそばせて遣やりたい氣きがする。」

「しかし、平八へいはちさん。」

と御新造ごしんぞうに湯呑ゆのみを出したは、一杯一杯かわかした後あとであつた。

「五厘ごりんが酢すを買かひに遣やられる。……」

「お手玉てたまを握にぎつて居たんですつてね。」

と言ふ、御新造ごしんぞうの聲こゑがうるんで居る。

「然さうだと——いや酢すを買かひに遣やられる兒こだからと言つて、内うちの兒この對手あひてに、體ていよく子飼こがひから抱かへるなどと言ふ怪けしからん所存しよぜんは素もとよりない。——養女やうぢよにとも言ふのぢやあない——此このの方は、先方せんぱうがくれると言ふなら、願ねがつてもない幸さいはひだ。一いちも二にもない貫もらひ受けるが、それまでには及およばない。——小ちひさなお客様きやくさまを預あづかるとするんだ。むかうは、七歳ななつか、八歳やっつに成なるか、其そのの女をんなの兒こを一人



で湯治に寄越すと思へば可からう。それを承合つて私たち夫婦が預る。ものは程度だから、そんならと言つて、一座敷別に仕つて、友染の蒲團に据ゑて、女中を一人着きりにして、お給仕をさして置くわけではないよ。」

「はい、はい、はい。いえ、もう、飛んでもない事をおつしやります。」

「そのかはり空いた座敷は、家中わがものにして、威勢よく危くない限り飛廻つて遊んで貰はう。尤も中氣のお媼さんを寝かして置くわけぢやあない。此から暮に成らうと言ふ、大事な臺を預るんだ。女一代の首途と言つても可いから、そんな事もあるまいが、目に餘る悪あがきでもすれば、嫉めも意見もしようが、まゝ、それまでも及びはしまいと思ふ。不束な私たちだから、お姫様には仕立てられまいけれども、随分、丈夫に、腕白には育てて見せう。女中たちも、がさつものだが。皆氣のいゝものばかりだ。安心をなすつて——」

……平八さん、此は此の話の掛合ひに行つた時、むかうへ言ふ口上だ。……尤も此の口上と、私が心と微塵たりとも相違はない。いづれ、誰か人を遣るが、どつち道お前さんが、眞正面に直らうと言ふ、先づ全權大使と言つた形に成るのだから、附添ひに含めては遣るが、言葉の足らぬ處は、私の胸からお前さんの胸へ傳はつただけで可い、口は何うかはつても、お前さんが私から受取つてくれた眞心だけを傳へて、事の調ふやうに骨を折つて貰ひたい。

しかしだ……三度々々お澤庵か、お葉漬か、それは知らないが、すきなお魚の食べられないものは、親も兒も然う言つては言過ぎるが、最う目の前にいくらもある。一々それをお客分に引取つて居た日には、此の家中を幼稚園に明渡しても、まだ摺上川、赤川へ溢れるだらう。

別ぢやあない、他ではないのだ。

「美しい、可愛らしい、お使姫のお化粧料、お賽錢だ、と言つて、氏、素性も、名處も分らない、路傍の女の兒に——此の一封を——」

包は膝に乗つて居た。

四

「すつぱりと……然も道中の俸夫のお前さんにお託けなすつた、其の一昨日、昨日の朝までのお客様の思召に、何だか慪う、水に映る月影の深い處へ、するくと、私の氣を引込まれた……引込まれたと言つては悪いか。」

と煙草を置いて、傾いて、

「さあ……霞のか、つた花の梢へ、ふはくと引上げられたやうな心地に成つたからだ。」

「私は、何でございますか、まをし兒を授かりますやうな氣がしますんでございますよ。ぞつと



いたしますやうでございます。」

と御新造は、袴の、なよやかな襟を引合せる。

「あゝ、まをし兒か、八幡宮か、女の兒だから辨財天かな。」

「へい、旦那。」

「谷内君か。」

「宿帳を持つて参りました。——お待遠様でございました。——一寸鷹の三番一のお客様が、馴染だものですから、一杯お對手を仰せつかりまして。」

と番頭の谷内が、ぼつと酒の色が面に居る。

「何、誰でも可かつた。故々君には及ばない。」

「いえ、私がお預り申します大切な、お客様——それに何かお間違ひでもあつたのではないかと存じまして、(旦那様が宿帳を見たいとおつしやる。) お兼どんが眼を圓くいたして、帳場へ飛んで参りましたさうで、……何事か。」

「はう、相かはらず慌てた女だ。……間違どころか、内々些と嬉しい事だね。……一寸宿帳を……」

……時に、霞の一番ださうだが、今朝お立ちなすつたお客様の名が見たいのだよ。」

「えゝ、御一人様の、さあ、大山、大川、大何とかおつしやいましたか。」

と渡した宿帳を、覗きたさうに、片手づきで乗出す處を、

「お待ち〜。」

と微笑みながら、軽く留めた、——主人は、膝の上に宿帳を扱つて、

「開けないうちが一寸此で楽みだ。昨日の朝だつたか、私があつた庭の築山、瀧がかりの巖組の處の、丈の高い自慢の牡丹の處に立つて居ると、廊下を、さあ、もう廣袖でなしに、丁とお支度で通掛りなすつたのと、思掛なく顔を合せた。よせば可いに、ぬつと長閑さうに居たもんだから、客人同士と思ひなすつたと見えて、「失禮。」と先様から聲を掛けて、すつとお渡んなすつたのには恐縮した。慌てて懷中から手を出して、うしろ姿へお辭儀をしたが、まことに人品の可い、奥ゆきのある御人だつた。——いづれ東京でも名のある方に相違ないが、學者でおいでなさるか、それとも、藝術とか云ふ方にお携りなさるか。……宿帳を開けないうちに、座敷においでなすつた時の事を伺つて、心で當てて見るのも、何となく、胸へ御容子が浮ぶやうで修行に成る。——受持の女中は——あゝ、お信か、手は透いて居ないかね。」

「丁度只今、お帳場に、例の巻苘を一寸吹かして。」

「あの、取澄した顔をして、はゝゝ、巻苘結構——吹かしながらで可い。一寸こゝへ來るやうに言つておくれ、いや、平八さん退屈だらう……。」



「滅相な、え、何でござりますか、無暗と胸が嬉しくつて、酔を引出したやうでござりますよ。」  
番頭の谷内が、女中にことづけをした切かと思ふと、何だか、頻に楽しさうな主人たちの氣に引かれて、お信と言ふのと又一所に出て来た。

此處で、其のお信が言ふ處で、少し見當が附かなく成つた事がある。主人の心では、浴後の座敷で、緩り摺上川の景色を眺めたあとで、分厚な西洋の書物でも読んで居たらうと思つたが、  
「其うでない。」

其の客は、女中が通をする毎に、——着くとすぐ——どつさり汽車で買込んで来たらしい新聞ばかり読んで居た。滅多に口を利かないで、此方から訊く用が氣に入れば頷くし、意を得ないと頭を掉る、可恐く變屈な人だと窮屈がつて居ると、可笑な事は、まだ晩飯の前——行合せた此のお信に、「折入つて些と頼みたい。」と、言葉すくなの人が思込んだ顔をした。其の様子、慌てものお兼だと眞赤に成つて逃げさうな意氣込だつて、何、聞いて見ると、三つめの座敷に逗留客らしい、對向ひで將棋をさして居る人たちがあつた。「何と、お前の口添で拜見は出来まいか、頼んでくれる。」と言ふのである。それが温泉へ来て、まだ湯にも入らない先だつた。——處が、其の客は會津の塗物屋で、内では久しい得客だし、氣の置けない捌けた人たちだから、大喜びで迎へると、すぐに對手に成つて、此方の一人客がさしはじめた。對手かはれど、主かはらず、塗物屋

は入かはるが、一人客の方は續けざまに幾番も立續き駒を戦はせる。……晩飯は一所に、と其方へ取寄せて、雙方、膳へ銚子をつけながら、孰も古今のすきと見えて、手酌で、盞を含みつ、も駒を離さない。……で、強いかと言ふと、お銚子の時、しばらくお信がついて居たが、其の見様子では、一人客の方が、のべつに負ける、忙かす、迫らず、泰然自若として連りに負ける。餘程お弱さうで、出来るものなら、加勢がしてあげたいくらると、お信が笑ひ、又其の弱いに勝つたと言つて、塗物屋さんは二人とも、額を敲いたり膝をつねつたりして喜んだ。

此で夜を更かして、一人客は、寝しなに一度だけ湯に入つたらしい。——其切、塗物屋二人は、朝早く立つた——勿論、賭などをした様子は氣もない、と言ふのである。

「いや、負けつ振の面白い御仁だ。——何にしても床しいお方だ。が、其を聞いて薩張見當が着かなく成つた。——どれ、一つ拜見をしませう。」

と軽く表紙をひらいて居た宿帳に、見當をつけて、颯と明けると、今更ながら、何となく、其の人となりの知りたさに、平八をはじめ、女中まで額を突出す。

主人は、煙草を横銜へ、

「東京町番地……と職業は、學校教師、となすつた。が、……博士ぐらゐの處だらう。新聞などで、私たちがよく知つて居る方かも知れない、……此處が樂だ。」



と熟と視るのに、引入れられて、皆が息組んで待つと、少時して、主人が、しきりに妙な顔をしたが、

「此は。」

と言つて、額に手を當て、クスと笑つた。

「平八さん、——お芳、谷内君も、こりや分らない、將棋に負けてばかり居る弱い人が、見なさい、此の宿帳には(大橋宗吉)としてある。……一字だけは違ふが、此は匿名だ。知つての通り、昔(大橋宗桂)と言ふ、大先生が……あつたんだて。」

五

しかし、おつかひ姫の女の身の上は、日も措かないですぐに分つた。——勿論、世事馴れた番頭と、添つて平八が、事に預つたのは言ふまでもない。

お三いさん、三ちゃん——綾井何某の三番目の女の女の兒は、三葉(ワと訓む)子である。姉が二人、兄が一人あつて、長女の姉がまだ漸と十九に成る。……聞くも、あはれなのは父も母も、もう世を去つた。

其の父と言ふのは、秋田あたりの出身で、東京でたしか煙草の専賣局へ勤めた人で、尤もさし

たる高官ではないが、女親が經濟を上手に世帯の繰廻しが好かつたから、裕ではなけれど、相應に玄關を構へて、番町邊に住んで居た。上の姉は或高等女學校も卒業するし、兄は中學へ通つて居た。處が、一昨々年の三月盡、陽氣が青葉に變らうとする頃から、女親のかげ心地で假初に床についたのが、一旦いゝめは見せたけれども、ぶら／＼病に成つて、日に増し衰弱が著しい。つとめて一日床を離れると、あとを三日、どつと寝ると言ふ容體になつたので、父さんの暑中休暇に、一家擧つて伊豆の伊東へ療養に轉地した。——引湯のある別荘を一軒借りたのださうである。行途には俣で、靈岸島から汽船だったが、伊東の海岸へ上陸をすると、父さんが一度、前以て出向いて調べて置いた借別荘まで十町足らず、と言ふのに、もう其處まで、歩行くのは固より、俣でも動けない容體に成つて、はじめての土地へ釣臺も憚られるから、海岸の旅館へ漸と手を取つて連込んだほどである。やがて別荘へは納つた。

何にも知らない幼兒の、海水着の身輕なのを喜んで、前の流でお魚追つて遊ぶうちも、母さんは晝も二つ三つ幽に尾を曳く螢の影を見るばかり、枕の夢は暗かつた。

暑中休暇の追請願をして、父と姉とが、介抱に心を盡した效もなく、秋の彼岸前に母親は果敢なく成つた。

希望を半島に輝かした往の浪路とは趣かはつて、流人の魂を守るが如き、骨壺を抱いた、寂し



い秋の甲板で、三葉が「母ちゃんは……母ちゃんは」と、いま別荘へ一人だけ残して忘れて来たやうに訊いた時、もの凄いな夜の浪である。然も其の底へ沈めるやうで、父も姉も地へは指を指せなかつた。

揺らる、船の傾いて、横に近く成つた蒼空の一端を指して「彼處に」と言つて、皆泣いたのである。

それよりして、誰教へねど……誰がまた教へよう、續いて世を去つた父親をも、人が問へば、三葉ちゃん星を指す。

父は其の年、……母の七々日の供養をすると間もなく、同じやうな容體に成つて、此の時は、少しでも空氣の佳い處をと、住居を郊外に移したが、荒寥たる冬の野に、霜に鳴く蟲の聲も骨を刺して、枯る草よりも尙ほ瘦せ細る。

稚兒は日向を傳つて、雛鳩の迷へる如く、樹立をくゞつて餘所の牧場を覗きながら、友なきものの豚を視て喜んだ。が、鳴聲を眞似て、せめてもの父を、寂しく笑はせたうちに、何を思つたか、ぼろ／＼と、圓い頬に涙をこぼして、

「父ちゃん、豚には母さんがあるんだね。母しやん母しやんと鳴いて、乳を飲むんだよ。三葉は草を取つて、母しやんに食べさせるの。……三葉の方でお乳が欲しいわ。」

と言つた。

聞いた心はどんなであらう。

凜冽たる春の寒さに、枕を擱んで、氷に絶りつゝも、兒のために活きんとした父も、氣候が急にゆるんで、時ならぬ暖かさの狂へる日、雨のいまだ來らざる、雲の黒き中にむなしく成つた。

危篤のため、學校の寄宿舎から家に歸つて、父の枕頭に侍して居た三葉の兄が、位牌を持つ日にぶる／＼と震へて居たが、七日、十日、三十日、それなり寄宿へ歸らないで、日向の縁に、ぼんやりと膝を抱いて踞る。……まだ十七で顔の暗さ、額の皺——此も病にかつたのであつた。

是より先、残る四人の孤のために、局の同僚、親しき知己親類をはじめ、評議も相談も目を重ねた後、一時賜金の慰勞金と、諸道具一式、と言つても、最う其の三ノ一もなかつたが、取片づけて賣つた料と、人々の同情に集つた若干金とを持つて、東京を引拂つて、姉をたよりに、孤兒たちの身を寄せたのが、こゝに飯坂道、湯原村の村はづれの、あの、農家なのであつた。

此は三葉の母の兩親、即ち母方の祖父母の家で、父の實家は、親たちはもう亡く成つて、兄弟の二人三人は、朝鮮大連などへ離散して、たよる便宜がなかつたのである。



三葉子のすぐの上の女の兒、綾井の二女の方は、最う、母が亡く成つた混雜の折から、既に此の祖父母の家に預けられて、飯坂の町の小學校へ、第一年から通つて居た。

然う言へば、同じ級か、組が違つて居て小兒だからよくは分らないけれども、銀山閣の薫が、何でも、綾井さんと言ふおなじくするな兒が學校に居たと居たと言ふ。

居たと言ふ……で近頃多目見かけないと言ふ。——と今は學校へ來て居ないのも道理で恰も此の話のあつた、半月ばかり前から、此も親兄たちと同じやうな病氣に成つた。——處が、湯原の村の祖父母の家は、さいはひ隠居所と當主の住居と二棟に分れて居る——綾井の兒たちは皆隠居所の方へ引取られて居るのであるが、僅に二間位な處へ、其の人数で大病では到底手の届かないために、此へは姊がつき添つて、目下福島病院へ入院中。——

と此が——解つた。……

處で、彌ヶ上に悲惨な事は、三葉の兄である。——此は病みながら、祖父母の小家まで倒れ込むだけの果報……いや／＼それだけの氣力もなかつた。

汽車で宇都宮から容體が變つて、奥州白河まで着いた時は最う九死一生であつた。下車するの

に、驛員の手を煩はしたが、停車場前の寂しい旅館で、姊の膝に縋つて、小さな妹のいたいけな手で胸をさすられながら、三日めに亡く成つた。

まだ此の方が僥倖かも知れない。

母の看病、父の介抱、弟の死みづ、其の前後の、悲哀、辛勞、月花を見つゝ、思ふだけでも涙が降る。炬燵に當つて居て思ふだけでも魂は消ゆるものを、十八十九の妙齡の娘が身一つで、醫師よ、藥よ、氷嚢よ、洗濯よ——煮炊の業は言ふまでもない。見舞人の挨拶だけでも、大抵氣ほねの折れる上に、夜伽、通夜、葬式とかぞへては不思議によく生命が續いた。

その上に、祖父母とは云へ、かゝりう人。

決して、年取つた人たちの冷淡を數へるのが此の編の目的ではない。のみならず、祖父母とても親身の孫のことである、無慈悲でも残忍でもないのだが、唯、節約なので……また其でないと、滅入の多い三人の孤兒を抱へて生活の立つ道はなかつたであらうから、三葉の境遇は、あの、平八の視た星の夕暮を續けて居た。

繰返して言ふが、姊は中の妹に附添つて、福島病院に居るのである。

さて近所の噂では、平八が鎮守の前で見た時の如きは言ふに足りない。雨の降る日も、マントなしで、あの兒は、竹子笠を被つて使に出される。夜は燈の下で、祖父と一所に、あの小さな手



で草鞋を縛ふ。それを可厭な顔もせず綾取でもして遊ぶやうで、大な目を開いて、眠さうにもない。艶々涼いのが、何と、綺麗なお星様の迷兒が、田圃へ落ちて、田螺の責苦をうけて居るやうだ、とお百姓だけに妙なたとへを言つた人がある。

また、それよりも……姉が病院へ行かないさきに、手が利いて針仕事が出来から、くらしの足に洗張ものや裁縫をした。都會と違つて、農家では、よそへ仕事を出すやうな事は澤山ないで、随分、飯坂の賣女、藝妓のなどを引受けて、とゞけものや註文とりに、姉が三葉子の手を引いて、此の廓あたりへ来た事もあつたさうだが——其の裁縫をする姉の傍に小さく坐つて、三葉子が、それも、糸で五色の南京玉を通すやうな、可愛らしい顔をして、ほどもものをして居るのだつた。五つや六つで、くらしのたしの内職の手つだひをするとは思ふまい。大事な、優しい姉ちゃん、お針ごとをして遊ぶ氣で居るのだらう、と言つて、此を話したものは、すゝり上げて泣いた。

七

其の、然うした三葉ちゃんである。

相談人——番頭の谷内が、湯原村の祖父父母の許へ出向いた時、老人たちの承諾に、一も二もな

かつた事は云ふまでもなからう。

銀山閣の主人の考へでは、とにかく番頭に下話をさせて置いて、更めて自分が、然るべき親類をと言ふ下心であつたが其には及ばぬ。

——續いて平八がついて、番頭が今度は、御新造が涙と情を一所に籠めた、心入の見舞の品を以て、——此時は平八が屋根とは言はず、隅の方へ小さく乗つて——輕便鐵道と言ふので、福島

の病院へ出向いたのである。  
親仁は、綾井一家の様子を聞いて、こゝで其の姉を視るのは、日中幽靈にでも逢ふやうに思つて額に冷たい汗を流して居た。——二十ばかりのうら若い幽靈である——可恐くはないが、其の苦勞のほどを思ふ、あはれさに身を震はして居たのであつた。

が、思つたほど寔れては居ない。色の白いのが、ぼつと頬に薄色をさして居た、尤も日當の障子を閉切つて、其の上に火鉢に湯氣を立てた藥罐を置いて、病人の枕許に、緋の羽織で慎まじやかに坐つて、矢張り裁縫をして居たのである。のぼせもあらう——、しかし、寝て居る妹の方は、たゞ目を落した小鳥の頭に、赤いリボンと簪を結んだやうで、湯氣のまとふのが、陽炎のやうに見えた。

姉は、もの靜に、すべてを、よく聞いた。……が、旅客の金一封は小さな妹のために、しばらく



く平八の手に預るやうにと言つて、何うしても受取らない。そして、唯此だけ言つた。

「あの兒は、まだねえくの癖に、活動寫眞を見ましても、あはれな處はすぐぼろくと泣きま  
す子ですから、……氣をつけて遣つて下さいまし。」

それから、晴やかだつたのが、急に俯向に、眼をしばたいて、

「お連れ下さいます時に——小鼓が一挺、私のおもちやですけれども、三葉に預けますから、お  
持たせ下さいまし。」

と言つて手巾を眼に當てた。

あゝ、此が遺言のやうに成つて、如何に、此の姉、此の娘も、やがて父母のあとを追つたが。

さて、三葉子を迎へる時は、殆ど縁附いてから、戸外へ出たのは、數へるほどもないと言はれ  
た、雪松銀山閣の御新造が自分で出掛けた。ほんの一枚着換へただけであるが、水際立つた姿を  
珍しがつて、女中たちが残らず、料理方、風呂番までが、ぞろぞろと玄關へ送つて出た。

番頭の谷内がついて行く——平八が一挺、曳いて、外に俥がもう一臺——

「へい、御新造様。」

番頭が、自分も乗らうとして、平八の俥へ、御新造を叩頭で勧めた。

「一寸……其處まで……歩きますから。」

門を出て、温泉の町を。——むかし米澤街道の方へ一町餘り行くと、家並の中を石段で奥へ入  
る、妙燈寺と言ふ古寺があつて、辨財天女おはします。

其處へ參詣した。

御新造は、石段を下りてから、平八の俥に乗る。番頭が續いた。

此の時分には、御新造を見ようと、町の兩側に人立がした。

もう一度、銀山閣の前を通つて、旭の廓——若葉町を抜ける頃は、賣女たちが、皆二階に立つ  
た。

俥は、十綱の橋にかつて、摺上川の藍を走らす流の上を、一方遙に吾妻ヶ嶽連山の雪を視つ  
つ、裾の地につかない柳ぞよき帯をしめたやうな姿で橋を渡つた。御新造は、鎮守の森に、其の  
姿を忍ばして控へて待つたのである。

此は、小家の住しただの、祖父母たちを避けたのではない、もの恥をしたのであつた。

番頭のうしろつきが、一跨の土橋を渡る時、其の小家の中から、不思議に音の冴えた小鼓の音  
が、トンと響いた。

酢徳利——澤庵には似べくもない。



「あ、おつかひ姫。」

御新造は、再び鎮守の宮を片手をがみした。

が、續いて、ぎやつと言ふ何處かで豚の聲がしたので、又ほろりとしたのである。

榎霞に、ほんのりと、浮いて、牡丹の花一つ。紅い櫛は其のまゝで、藍の勝つた、紅入友染の袖を長く、細いが緋の紋縮緬の扱帯をはらくくと、三葉子は片手に小鼓を持つて出た。

誰も送つて出ない。——又素より、行く處は、つい橋を、越えた温泉である。番頭が、小さな風呂敷包を提げてついて、あとから平八が頭を掉りながら出て来た。

するりと出て、柳腰、一寸御新造が白い手で、小手招くと、三葉子が仰向いて視ながら、つかつかと寄つた、袂に縫れて調の緒が美しい。

此の鼓は、あとで聞くと——幼い三葉子の言ふのであるから、判明と取留めた事はわからないが、「彼方……」——遠く山の方からだと言ふ——お坊さんだか、山伏だか、順禮だか、とに角修行者らしいと思はれるものが……黄昏である——姉がああ、あやめの土橋の處に立つて、いつも、そんな顔を見せた事のないのが、一人悄乎と山を遙に涙ぐんで立つた。三葉子も傍に居て悲しかった。其處へ修行者體のものが通りかゝつて、

「進ぜよう。」

姉さんが不思議に辭退をしなかつた。

身を震はして、禮を言ふと、

「何、山から拾つて来た。」と杖をついてすたく行つた。……此の意味を、——三葉子の話したのは後の事だ。

時に、——三葉子は幸福である。

「あの……此方へ。」誰も番頭の乗つて来た俣の方へ、三葉子をのせるのだと思つたのに、御新造は自分の俣を譲つて平八に預けて、番頭のと入替つた。

番頭は、後からてくく歩行いた。

八

此の俣が、飯坂へ引返した時は、往路の風説が、波に擴がつて、すうと、舊街道の町屋、家續の方からも、御新造を観る見物が十綱橋のあたりまで押出した。

ために、三葉子の乗込は、花やかなものだつた。——御新造は途中爪先上りに、俣の遅々とした時は、さゝずに持つた涼傘をば片側町へ傾けて、ぽつと人いきれに上氣して、片頬を谿河に涼ましたくらるである。



銀山閣では、主人をはじめ、揃つて玄關に出迎へた。薫は學校のまだ時間で、此は其中にはなかつたが。――

以後、主人が平八に向つて、意中を言うて口上になぞらへた言葉の一切は、其が直ちに三葉子のために眞心から實行するあらゆる待遇の獻立書であるのである。形あると、形なきと、見ると、聞くと、菓子と果ものと、次第に順を追つた日々の御馳走と成つてあらはれたのである。

薫と三葉は、人形の袖を連ねて舞ひ、蝶鳥の翼を交して遊んだ。

一月ばかりのうちに、病院で小さい病人は、影も消えた。――姉の心づけで故と三葉子は呼ばなかつたが、雪松からは萬事の心づけかた／＼番頭を出向はせた。其の前後の託けにも、看病づかれの保養をかねて、三葉子を視ながら湯治をするやう、主人たちの意を傳へたが、姉は志を享けるばかりで、一月、二月、三月と經つ。

秋のはじめに、平八が、乗せて來た客を、投込むやうに擲出して、

「番、番、番頭さん。」と眼の色をかへて――いま湯原の鎮守様を通ると、あの藁葺から街道へ出合頭の男が、平八を見知つて居て、呼留めて「此から、銀山閣へ行くだ。姉さんが大病で、もうむづかしい。」と言ふぞ。「おつかひ姫をすぐに。」と言つて親仁が太息を吐いた。

平八が眼の色をかへて飛込んだのは此までも二三度あつた、それは三葉子の引取られた翌月で、

其の時は……わざ／＼停車場前から駈つけて來たのであるが、――(伊達停車場前俵帳場御中、平八様。――)と上書して、(大橋宗吉)と言ふ、番地もいつかの宿帳とおなじ記名で、何もかゝず、別封に「お賽錢」と認めた金五十圓の爲替が届いた時であつた。

一月措いて、又届いた、――其の時もである。

金子の始末は――後で言はう。

此の剽輕な、しかし純朴な親仁は、俵を曳いて、三葉子の祖父の藁葺の前を通る、日毎の往還には、姉さんを訪ふつもりで、「今日は――御達しやで。」と喚いたり、「おつかひ姫は御氣嫌だ。」と大聲で呼んだりして、乗つて居る客を驚かしたものであつたが、こゝにゆくりなく、悪き礫の如きしらせに傷けられて來たのであつた。ペイジを折かへして、尙ほ、あはれな消息を傳へなければならぬ。

生憎、外出の、主人の意を聞いた上、今日は「私がすぐあとから」と御新造が、此の親仁だから安心で、三葉子だけ取りあへず其の俵にのせた。誰も言はぬに、三葉子は鼓を持つて出た。

廊を出る時、野良態の頬被をした男が、のそ／＼と此方へ來る。――此が親仁を呼留めたと言ふ……

「小父ちゃん。」祖父の總領の忤なので、



「やあ——姉坊がごねさうだで。」

がらん／＼と思ひ切、ベルを鳴して、平八が駈出した。

姉は、隠居所の隅にしをれた桔梗のやうに成つて倒れて居た。三葉を視ると、起直つて、何も言はず、手を取つて、つれ／＼と顔を見守つたが、うしろを向かせて、髪を撫でて、

「よその知らない小父ちゃんか、讚めて下すつた髪ですよ。——大事におしよ。」

それから向直らせると、鼓持つた兒を鼓ながら、あゝ、あの絲は血ではないか、胸の撓ふばかり、確と抱いた。

たゞ二とせばかりのうちに、両親と三人のきやうだいに死別れた、三葉子は、矢張り弱かつたが、こぼれては結ぶ露に育つて、撫子の色増り行く。

誰あつて、孤兒、かゝりうどなど沙汰するものもない。薫と二人、對に學校へ通ふ姿を視て、町の人々、二階から、賣女まで、「おつかひ姫。」と呼傳へた。

單に、あはれに、いとしい、いぢらしい、とばかりの兒に、此の神祕的の威を備へさせたのは、まだ名の知れない、あの旅客に、果して遠き慮があつたのであらうか。

### 毛利織夫。緋桃の雪洞

一

筆者はいま丁ど、あの瀟洒にして、肅然たる人物の、然も宿帳に(大橋宗吉)などと戯れた、旅客の本姓を語るべき機會に到達した事と思ふ。

しかし、編中にこれまで顯れた人たちが、就中、因縁の淺からぬ三葉子さへ、それが年齢に成つて、美しさを都にも鄙にも唱はるゝ時に到るまで、幾年かの間月々おなじほどの化粧料の届くほか、旅客の誰? 如何なる人であるかは解らないまゝに此の物語は進むのである。

渠は毛利織夫と言ふ……此だけで人は頷くであらう。廊下を通つた風采を一目見て、學者か、或は藝術家か、前者だと博士とも稱ふべきよし言つた、銀山閣の主は、さすがに客商賣だけの目はあつた……のみならず、こゝに言つた名は、略世間に通じた主人だから、其と聞いては手を搏つかも知れない。

織夫は、東京なるなにかし美術學校教授で技藝員で、且つ公私幾種の展覽會の審査員たる彫刻の名匠である。

其の人格と、技藝の一端を傳記するのに、幸ひわが拙さを許さるれば、思つたまゝを言ひたい——筆者は、たとへば昔武者修行の名譽の劍士が、山の中で山賊退治するのに、三池の傳太をキ



ラリと引抜いて、青眼とか中段とかに構へて、エイと言つて、對手が切つてかゝる毎に、ひらりと體を轉ずるか、お極りでパツと身を躲すかして……どうなと勝手にするが可いが、右と左に何十人隣り間に斬倒すと云ふのを聞く時、更に其の秀でたる手腕を認めない。それよりも寧ろ驚の巢も山賊の巖窟もある、もの凄いつ時に掛らんとする日暮方の山の麓に、侘しい一軒家の茶店に憩つて、爺婆を對手に澁茶を飲みつゝ、前途に鬼あり、狼ありと聞きながら、悠然として、峰を視め、雲を望み、霧に對する眉の間に、手練の劍法を窺ふのである。

で、少く、此の藝術家の面影を偲ぶのに、仁王の拳、獅子の瞳、美人の振袖については、小刀の手の輝きも、岩繪具の彩の冴えも取立てて言はないで置かう。

たゞ先生を繞る學生たち親しい友人たちの間に、此の名匠と言へば身に添ふ影のやうに傳へらるゝ話がある。

それは雑と次のやうな事柄である。

織夫が年紀少く、まだ名を成さなかつた學生の頃の事で、修業、見學とは言ふものの、殆ど漂泊に近い、貧い侘しい旅行をした。しかし、世間は春の閑なる時であつた。——東海道の或る繁華な町に、大川が流れて、川に長橋が掛つて、橋も、水もともに目も遙々と打霞んだ場所がある。此の長橋を渡ると、次の宿へ越すのであるが、橋袂に、それはく見事な柳の大樹があつて、

繁れる枝葉は、宛然たる緑の碧、群青の城を構へたやうに見えて、大なる流も、長い橋も枝にかかつて陽炎とともに靜に揺れつゝ、靜な夢のやうな景色であつた。

陽の陰は翳さないが、中空にほんのりと、桃の薄桃色の影の漂つた、眞晝、所謂春晝の寂然とした時であつた。

——伊達驛前の小料理屋で、エプロンの白い女が、立續けに頬張らせたフライ、ピフテキ、カツレツには、唯苦笑した先生も、其の時は橋詰の茶店の端に、草鞋ばきで、腰を掛けて、晝飯かせぎに、あんころ餅を食べて居た——旅の姿も窺れつゝ、そして、柳を視て居ると、いつ浮上つたとも覺えなければ、はじめから有つたとも思はれない。……偶と葉のしだるゝ柳の根に、莫塵の上に古毛氈の赤いのを敷いた露店がある。

店と言へば先づ店だらう。がらくた道具に、古雛などが交つて、數ふるほどもなく、ばらばらと、何やら、小さな面のやうなものもあれば、根づけの類のものもある。が、鸚鵡を轉がした體で、弘法様の芋らしくも見えれば、賣人に口上をきくと、ものを言ふ石かも知れないと思ふものが、ごろ／＼と並んだが、何となく桃の空、柳の影を受けて、幽に陽炎に彩が動いて居た。

處で、賣手は、居合さない。

折から橋を越す人も、川を行く船も見えなかつた。



茶店を出て、向う斜に其の前を通つて、これから次の宿へ志す織夫である。

先生はあんころの口を、手巾で——餘り清潔なのではあるまいが——拭つて、脚絆で出掛けて、行きがかりに件の古毛氈の前に踏み込んで、並べたものを、それこれと手に取つて熟と視るうちに、

「欲しいなあ。」

と呻くやうに言つた。第一に先づ歎賞すべきに、先立つてわがものにしたがひたい本能的欲聲を洩したのである。

恰も其處が、巨利の築地でもありさうな、柳の根から長く町の角を折廻した嚴めしい土塀であつた。緑青の雲が錆びて、龍の形を蝕ました龜甲たたみの銅の木戸が、半ば、陽炎を吸つて開いて居る。

其の陰から、

「お持ち遊ばせな。」

と言ふ朗かに美しい聲がした。聞いた覺はないのだが天人の聲かと疑ふ。

爾時織夫が顔を上げて偶と見た美人の姿容も、また其に劣るまい。たゞ瓔珞の光もなければ、羽衣も着て居ない。羽織もなしに、着流しの片袖を、深く細りと胸に合せて、姿を隠すやうに、

すらりと立つた、圓鬚の品よく媚かしい、世にも艶なる令夫人であつた。

春の麗かさにほんのりとした、雪なす顔の、睫の敷へらるゝばかりに見えるのが、月の朧に霞んだよりも一層奥床しく且つ高く尊く見えて、いまの其の一言は、宛然蒼空より我に賜はるが如く聞取られたのである。

「頂戴します。」

たとへば、然うした人の口から、此の場合「生命を遣らう。」と言はれても、誰も斷むまい。と同時に「生命をくれる。」と言はれても、否はあるまいと思はれる。

禮も陳べずに、織夫は其の一品を手にして毛氈の店を立つた。立つたが、其のまゝ、渠は前途に渡るべき長橋を見たばかりで引返して、舊來た峠を越えて雲に連る山、霞を掛けた松並木を、一條に、東京に引返したさうである。

何故と言ふに、其の當時、あとを何處へ行かないでも、最う旅行の目的を達したのであるから、悉く言へば、渠が製作の類なき手本を、其の一品に得たのである。

何の品か、其は誰にも分らない。

しかし成績は目覺しい。織夫は其の秋の展覽會の出品から立派に一流の作家に列して、續いて今日に至つたのである。



ものは解しやうに因る……我が欲しいと思つたものを、殆ど紫の雲に乗つたやうな美女の口から、與へようと言はれたまゝ、前後の分別もなかつたが、あとへ戻つた峠路の山口で、遠く柳を振向いて翠の中に陽に輝ける銅木戸を月光の如く望んだ時、織夫は或は其の人が祕藏の玩弄品の塵を拂つて居たのだらうと思ひ、或は木戸の前を借りた市商人が顔知己などである處から、其の立違へた間を旅の人の望を叶ふるため、適宜の計らひをしたのであらうとも思つた、——そのいづれにしろ、與へらるゝにあらすしては、購ふべき價の懐中になかつたことは言ふまでもなかつたさうである。

二

美しい婦がイんで、傍に大川の水の横に廣く流るゝ風情は凄さをさへ加へて何となく神祕な影が附添ふではないか。

爾時の姿は、たとへば半輪の月であつた——あとで漏れきいたものは誰でも頷く。彼處に繞らした堀の内なる大富豪の館の令夫人は東海道一枚繪に、緑濃き柳とともに、世に聞えた美女なのである。

……以上は、しかし誰一人として、毛利先生、自分口づから語つたのを直接に聞いたと言つて

は保證するものはないのである。花には形なき香のある如く、或は、鑿に、小刀に咲いた、名匠の薫がおのづから顯れた一種の人格の餘韻たる傳説のやうなものかも知れない。

何にしろ、此の續きが最う少しある。……

先生が、今は世に知られ、人に稱へらるゝ五年の後、冬であつた。同伴があつたか、なかつたかは傳ふる處では確でない。附近の温泉の往か還かに、おなじ町へ一泊した事がある。

無論あの時を忘れない。

旅館へ着くと、浴して垢を洗つて、まだ晩飯の前だつた。

が、一人で出た。……俵を雇つて急いで見物して歸れば可いわ、と言つた事情ではないから、五年の前を可懐みつゝ、漂泊の旅の面影を身にしめて靜に歩いた。

場所がずつと町端れであるから目貫の町からは間隔が大分ある。然も東海道でも屈指の大な町である。——途中で日が暮れた、此は思の外だつたさうである。長橋を視る時分が、人顔の仄な黄昏時と言ふのを、心づもりにしたのに。——

例のあんころ餅の店は閉つて居た。燈はさしたが、いつか茶をくれた婆さんも戸を敲くほどの馴染ではない。

柳は巨な象の骸骨のやうに散つて居た。



川浪の音のみ凄まじい。橋も流も見えないで、また不思議なほどの宵暗であつた。汽車が廊下ほどに通る土地の故道の片端であるから、然せる豪家でも、裏堀の長い間に、瓦斯一つ點じてはない。

此の稀代の名匠が、暗中に蹴躓いて、水のない空を両手で泳いだ態は餘程可笑しい。心覚えの柳の根に、あの時なかつたのに、木の柵が打つてある。

それにさへ、一層間を隔てられた氣がしたであらう。

天堂か地獄か知らない、氷のやうな銅の木戸に、打震へながら清らかな指の觸れた時であつた。ツツと飛んで堀越に、何の影か燦然と光つて、カチリと石に落ちたものがある。

「お代を上げます。」

と、寝た間も忘れない、あの時の美女の聲がした。

唯、續いて、はたくと入亂れた人の聲音がしてやがて遠くの方へ靜まつた。

幽霊のやうな先生は、もう消えさうに成つて居たのである。

が、輝いて、響いて、幽に鳴つたものは確に手にした。

穴を潛るやうに町に出て、それでも憚られる……もの蔭の燈に、指を一つ一つ離すやうにして、掌を密と視ると、請取つたものは、黄金の細い波の、波頭で含んだ、大粒の眞珠の指環であつ

た。

——人を避けた一室に、土地でも顔の利く年配の旅館の亭主に對して、先生が聞いた處によると、大川べりなる柳の土堀の其の館の美しい令夫人は、ものの怪に襲はれて病中であると言ふ。

もうやがて數へて五年に成る……麗かな春の日に、令夫人は一人築山の池を繞りつゝ、裏庭の桃の影に誘はれて、酔つたやうに成つて、遠く縁側を離れると、不斷あけた事のあまりない銅の木戸が半ば開いて居た。

不思議な場所から、浮世を覗く心地で、密と見ると、丁ど目の前に柳の下に雑市の紅の店があつた……

(夫人の目には雑市に見えた。)

小さな雪洞もあつたさうである。散掛る花片が、陽炎にひらりと動いて、恰も中へ灯したやうに、色も浸んで明い。視て居る處へ、旅の若人が來たが、品を選んで思入つたる體で、……

「欲しいな。」

と言つた。

令夫人が持たせて歸した。

心では、晝飯の支度か何ぞに立違つて、賣ぬしが居ないのである。買手は旅の若人である。待



つのは嘸ぞたよりなからう。我家の廂の店である。値は自分が償はうと思つた。

心得のものを取りに歸つた。それも中庭までもない。遠くから白い手を軽く敲くと、緋鯉よりさきへ、小間使が駆けて來た。其の僅少の間に、木戸の前の店は最う影も形もなくなつて、奥方がはじめて出逢つたほど、めづらしく賑かな舊街道の砂埃が立つたのである。

あとで向うの茶店をはじめ、雑市の持ぬしを聞かせたが誰も知つてゐるものはなかつた。

「お代を上げます。」  
聲の聞ゆる時も、音のしない時もあるが、あの柳の下へは、夜は思ひがけず星が落ちる、金銀の星である。

令夫人は日頃、非常に、もの思の深い、氣の弱い、心優しき人であつた。

「お代を上げます。」

館の掟、家の戸じまり。

雪の珊瑚の簪が飛び、花に籠甲の櫛が落ちる。

拾つたものが、表玄關へ廻ると、取次の男が心得て居て、決してそれは受取らない。黙つて所得にするものもある、心あつて他に施し、慈悲に散すものもある。不埒なのは、落ちた金銀貨が無數に其處に埋まつて居ると騒いで、夜陰に柳の根を掘崩す、ために柵を結つたのである。

當時、奥方は懐妊して居た。

その男の兒が、年二歳の時、雑の節句に、乳母、小間使もろともに、橋際の柳へ出ると、あんな餅の婆さんが、をがむやうにして視めたが、雑市のぬしを知らなかつた其の媪が此の嬰兒を視て、玉にたとへてほめた、へた次手に、あゝ、さても誰かに、容色の好きが似てそつくりだと言つて、然ればよ、私が店で、あんなころを食つた旅の若人である。あのくらゐな容色は男に珍しいと言つた。

令夫人は、五年越、それから今ももの狂はしい。……近頃では、醫師にも人にも逢はない、——と言つて、——其の時の旅館の亭主が、先生に話したのださうである。

空事かも知れない。

雖然、此の彫刻の名家には、いまに於て夫人がない。事實である。

其のかはり、先生には癖のやうに、人前では右の手を、それとなく隠すか、かはすか、然も力なく忘れたもののやうにする習慣がある。もし、それ、一たび閃めかばの意氣を藏する、名刀に鞘あるが如きものか。

知らず、其の小指には、河畔の柳樹の令夫人が、指を飾つたまゝの、かこみの細い指環があるのだ、と人々は言傳へる。



慥うした先生が、あの串戯をする……しかし其は飯坂のみではなかつた——旅館でも出さきでも、好きな将棋に夥しく敗軍する時に限つて、癖のやうに（大橋宗吉）と宿帳でも何でも名乗るのである。

### 紅梅の答

一

飯坂の遊廓では、女郎が芝居で人寄せをする、各自に太鼓をどゞんがどゞんと敲く。やがて晝前から、青樓の其處此處で賑かにはじめる。——大門から大門まで——此の門を出た處がすぐに温泉場だが——道が一寸何に擬らへたと云ふでもなく凸に成つて居るので、表二階の障子を開けて、女郎が部屋着の態で、勢よく向顔巻などしたのが仰向けに反つて、赤い顔して、はずんで撥を入れるのが、通りがかりに縁越に覗かれる。一方は、もの凄く摺上川の激流の音で……行つて御覽なさいと、お勧めはしないけれども、一の奇觀である。

却説一秋の末の方、砦に碁が交るやうに、件の太鼓に觸太鼓の音が交つて寂しい廓を中心に町から山の根までどん、どろろと響いて、廓外の末廣座と言ふのに、旅まはりの舊派が掛つた事がある。

三葉子が十一、薫が十三の時であつた。

何處の兒もかはりない。二人とも活動寫眞も然うした興行も大好だから、早速初日から出掛けたが、内は近し、銀山閣の一人娘と、評判のお使ひ姫で町で知らないものはないのであるから、何處で何事があつても、すぐそれ／＼へ手が届く。で、別に女中の供もなしに、廓の中を、對の友染で、手を曳合つて——女の兒は妙に兩方へ手と手で引張りつこをする癖がある、可愛らしい。

仲がよい。

浅葱、茜の暖簾の前を、ちら／＼と、萩に桔梗に家稱の行燈の灯頃、おなじおさげで小走りに駈けて通る。

丈は三葉子は小さいが、髪は薫より、目にも丈にも餘るまで、すら／＼と靡いて長かつた。

其の年ごろの事である。何等の何の席と言ふ氣取もなしに早くから舞臺に近い處の札を買つて、偏に見惚れて居たつげが——ほかの曲目は何だつたか、こゝに其の關係はないのである。……二番目か大切か、大方二番目であつたらうと思ふ。地方では節句は月だけけれども、芝居の演出ものは春を繰上げて一向差支へない。夕霧阿波鳴戸吉田屋の段が演じられた。

／＼にやらしやんと、座敷へこそは出しけれ。冬編笠も垢ばりて、紙子の火打膝のさら、



風吹きしのぐ忍ぶ草。忍ぶとすれど昔の、花は嵐の願に、今日の寒さをくひしぼる、はみ  
出し鏝もかみさびて、こじりつまりし師走の果。胡散らしく吉田屋の門を覗いて……  
「喜左衛門。宿にか、一寸逢はう、喜左衛門、喜左衛門。」  
歸ると、すぐに、薫の方が眞似をはじめた。  
いま十三の此の娘は、後に大都の劇壇に、一寸……名ある女優と成るのである。

二

一體、薫は不斷から、もの眞似をするのが好きで、表町の藝妓家の雛妓が立つて踊るのなど直  
ぐ覚える。三葉の方は、音曲が巧み、姉の記念の小鼓を手すさびに、タン／＼と打つ裏皮へ抜け  
る音の冴を、下方に心得のある年増が、世辭でなく感に堪へた。三味線なども宿にたゞたしなみ  
の安直いのおもちやに搔鳴らすに過ぎないのだけれど、ぴたりと藝妓家の稽古の間に嵌る……  
分けて押のきく古今の美音で、學校の唱歌口すさみの童謡鞠歌を唱ふ聲には、酔つ拂つた浴客も  
耳を澄すほどであった。

主人謙造は、慰樂かた／＼、一人には踊を、一人には三味線と言つた事もあるが、それはお  
芳が留めた——第一、三葉は大切な預り娘である。土地がらではあるし、遠慮がいゝ。従つて、

一人に遊藝の稽古をさせて、一人に見せてだけ置くのは、ひがみを教へるやうなものだと言つて、  
薫の方へ仕込むのは不賛成ではないのだけれど、それも見合せた。尤も娘たちがどちらでも、自  
分の口から、進んで習ひたいと言へば、兩時は誰をも拒むまいと言ふのであつた。が鳥が唱ひ、  
蝶が舞ふとおなじに、遊び戯るゝに過ぎないで、師匠を取らうとまでは二人とも言出さない——  
學校のお温習一通りのあとは、思ふまゝに遊んで居た。

——處で吉田屋の芝居である。

二日め、三日めで二の替りまで續いて觀に行つた。

さて、お久しや、お懐しや。京大佛の馬町に、御逼塞と承はる。霧様よりは數通の御狀、飛  
脚も二三度、京大津まで尋ねさせ、たつた今もお噂。先づお馴染の小座敷で、二年積るおも  
の語、いざお通り、と袖ひけば……

「あゝ、紙子觸りが荒い／＼これ引けば破れる、掴めば跡に、しはす坊主、師走浪人。」  
と薫が續いてあとを覺えた。

眞似も段々巧者に成ると、御新造が着せたまゝの娘の態では納らない。女の兒だから如才ない。  
男帯をちよきんと結んで、編笠のかはりに押ししやいで帽子を被つた。……までは仔細ないが、  
田舎廻りの俳諧師や、頼まれもしないのに客がかきのめした、梅が枝の頬さがりさうな短冊、色



紙などが、戸袋の奥にいくらかもあるのを引出して、色紙を背中へ帯で留め、短冊を衣紋の左右、腰へ手拭のやうに挟んだのをやがて一寸糸で留めるやうに成つてから、しぐさにも身が入る。

山國の事である。座敷によつては、やがて炬燵も出来る時分だが、娘の遊ぶ處に、そんなものはないから、炬燵は脇息に友染の小搔卷。どうかすると、帳場の将棋盤の分捕られた事もある。

横になる戸の阿波大盡、夕霧が襦袢に、兩足ぐつと入れれば、扱もなめたり、此の夕霧に足もたすは、こりや些と慮外さうな、それほど足が苦にならば、打折つて捨てたがよいと、言ひ捨てて、つゝと立ち、次へ出れば伊左衛門、ちやつと寝轉ぶ肱枕、空寝入りして高軒：

唯其處へ、すいと襖を開いて、附合に出る合方の三葉子は薫の註文の扮装で、花簪を左右へ、對に前髪に挿んだ上へ緋鹿子の背負揚を細く疊んだのをふうはりとのせたのがはら／＼と垂れ掛る、頬が白く、脛がほんのりと大な目が濡々と美しい。絞の紅の扱帯を、羽織なしで銘仙の大きりの胸へ結んだうちは、まだ然までもなかつたが、其の風情で、緋の紋縮緬の長襦袢で、帯を解いて、薫が七歳の祝に着た、藤の紋の裾模様様の裾を敷居越に二三尺、身のたけばかりにすらりと長く曳いた處を、出會頭に謙造が、視ると、アツと讚めた。

「俺が若いと、こりや藏の屋根が漏るだらう、身上を潰すぞ。」

と笑つて、銀行がへりの紙入を投出して、どつかと坐つて、

「煙草盆を寄越しなよ、お芳、お前も来て見な。……こりや一番ゆつくり見物しよう。」

三葉子は極を悪がつて、

「可厭。」

と遁げると、白脛に裾が揃んで、轉ぶと、小さいから振袖ばかりが倒れた、が、薫は舞臺度胸があるから、色紙短冊の紙子で寝たまゝ高軒をかきながら莞爾々と笑つた。

女中たちは隙見をする。

遠棚に蒔繪の硯箱、傍に三葉の姉の鼓があつた。

三

銀山閣の主人はおもしろがつて、此の娘たちの遊戯の代に——蓄音器は内にあるから——東京へ夕霧の音譜を逃へてやがて取寄せた。

をかした事がある。ぐう／＼チ、チンと、音譜を掛けると肝心の伊左衛門俳優が聞いて納らない、見事にだめを出した。

もん句は似て居るが、まるで節が違つて居ると言ふのである。



然うだらう——竹本の方が一寸賣店に切れて居たかして、届いたのは清元であつた。番頭が、葉書で、正に相違いたし居り候が、如何の次第に候や、と堅い字で掛合ふと、音譜屋の方が偉い學者で、夕霧の淨瑠璃と言ふ御註文だから淨瑠璃を送つたのに間違ひはない。そもそもうたひものは、新内でも清元でも、竹本はもとより、小唄端唄に至るまで、すべて淨瑠璃であると言ふのであつた。

それに相違はないのだから、番頭は成角を歩で取られた顔をした。あらたに、竹本太夫を買ふまで、と奥役に成つて、主人が薫を納めた。其處で、名題も清元の方は、春夜障子梅である。

……胡散らしく吉田屋の門を覗いて、

「喜左衛門、宿にか、一寸逢はう、喜左衛門。」

と薫が(鼻に扇の横柄)を行る。

お父さんの謙造が、少い時分の苦勞人だから、一寸、すけに出て、(誰方でござる)と笠を覗いて、

「や喜左衛門様か。」

「何と喜左。」

「扱お久しや、懐しや。たつた今もお噂、先づお馴染の小座敷で、二年積るおもの語……」

(いざお通りと袖ひけば、)

「あ、紙子觸りが荒い。」

(昔は槍が迎ひに出る、今はやうく長刀の、草履を脱いで編笠の中の座敷へ通りしが……)

「あ、お寒からう。」

とお父さんは乗が来て、着て居た鐵無地の羽織を取つてふはりと、着せた。

「こりや、縮緬に紅絹裏の小袖と言ふのが欲く成つた。」

と笑出す。

——御新造も、莞爾して靜に視て居た——

襖の外には、三葉が其の装で居るのである。

夫の音じめ身にこたへ、飛立心おくの間の、首尾がくちせぬ縁と縁、胸と心のおひの山、あひの襖のぐあひよく、あけくれ戀しいつまの顔、見るに嬉しく走寄りで、十一に成る三葉の夕霧小鼓を枕にして、ちやつと寝轉ぶ伊左衛門……

(空寝入して高敷、はつとばかりに夕霧、我身とともに打掛に、引まとひ寄せ、とんと寝て抱きつき締よせ、泣きけるが、)

「なう伊左衛門様く、目をさまして下さんせ。」



と言は簡単だが、化粧の濡色——近松の文句では、(我身を横に投入れの、水仙きよき姿なり。)

と言ふのであるが、咲いた撫子に露がしたる、頬を重ねた鼓の胴に涙の映るばかりに見える。

(揺起し揺起し、抱き起せばむつくと起き、横様に取つて投げ、)

「これ夕霧のとやら、夕飯のとやら、節季師走、そなたのやうに隙ではない。七百貫目の借

銭おうて、夜晝稼ぐ伊左衛門、このやうな時寝ねばならぬ、邪魔なされな、惣嫁どの。」

「身に覚えはなけれども、うらみあれば聞きませう、寝させぬ寝せぬ。」

「これ何とする、此の體でも藤屋伊左衛門、今の如く奥座敷の侍に、踏まれたり、蹴られたりす

る女郎に近付は持たぬ。こゝな萬歳傾城、萬歳ならば春おじや、通りや、通りや。」

と薰が細腰を極めて、すつきり立つ。

「この夕霧を萬歳とはえ。」

「かう萬歳傾城の因縁知らずか、侍の足にかけて蹴らるゝを、萬歳傾城と言ふぞや、まことは目

出たうさふらひける。然も足駄はいて蹴るやら、年立ちかへる足駄にて、まことにめでたう侍蹴

る。町人も蹴る、伊左衛門も蹴る、蹴るゝける。」

と蹴散らすまゝに、立みあがりの薰の足が、投げつけた鼓の緒に行くかを見ると、ハツと肩を

入れて身を蔽ふ背を這つて振袖をみしと踏んだ。

御新造は、清元のうたばかりも、もう涙に目がくれて居たのである。

謙造は、「煙草引寄せ吹く煙管の。」其の時の藤屋伊左衛門のやうな顔で見とれて居た。

こんな事が度かさなる。

「喜左衛門く。」

「ヤア喜左衛門様か、さてお久しや。」

と立ちがかりに其處へ出るのが、いつか覺えた番頭や若いもの、女中たちのおつきあひの時

も、蹴散らす時の鼓の上は屹と十一の娘が振袖で身を蔽ふのであつた。

### 女神の傍——小鼓——

一

銀山閣のお芳が、はじめて湯原の在へ、三葉を迎へに行つた時、家を出て、行きがけに、其處  
まで俤にも乗らないで参詣した、辨財天を安置する寺は、眞言寺で、仙光院と言つて當時和尚の  
名が周山である。

門前は一方田圃で、田には水溜の池があつて、時節には、菖蒲が咲く。……がそれには些と時



節が早い。其のかはり和尚が丹誠の門内、また背戸の牡丹は、寒い年だから輪は小さいが、薫は高く咲きはじめた。

此の花を取つて供養した、牡丹の塔とも謂つべく、中に釋尊出誕の像を据ゑて、今日は形ばかりの灌佛會を修したのである。

甘茶は蠶豆ほどの青い柄杓で、思ひのまゝ小兒たちの手から灌がれて、牡丹は紅の雨を降らし、くみこぼす雫は本堂の床に八功德の池を湛へた。

と言ふが水だらけに成つたので、折から日曜だつたから、里の小娘、町の兒も入交りに、朝から思ふ狀、御堂の中を跳廻つた。

むかしは、振袖で揃つて手鞠を突き、袴が續いて時節の花を捧げたものだけけれど、今はそんな趣は見られない。

はずむのは護謨鞠で、跳ねるのは腕白ども、古疊の上でめんこも敲けば、壯に成ると相撲を取る。

小さな花御堂の柱を向うから覗いて、荒海の障子の繪のやうなお化面で、ベツかこをすると、可恐しがつて濡床を踏切る。きやつ／＼と言ふ騒ぎで、宗旨の開山の一代記にはない事だが、宛としてお猿畠の繪巻物を思はせる。

けれども山國の兒たちである。自から奇特で、供養の花は捲らない。たゞ立騒ぐものの動揺と、甘茶の雫に、柱に添へた金銀の蓮の花片は音もなく、開くやうにほろりと散る。……それも殊勝である、裏山の風が颯と吹添ふと、其の蓮華は、白い陽に、小さく半月の影を宿しながら、其の花片ばら／＼と石段の上に敷く。其處をぼつ／＼と、里の姫、町の女房などが甘茶の竹筒を提げて、一人二人づゝ、數はないが上下をするので、乾びた磴も、いつの間にか一筋の甘露に濡れる。

此の狀を想ひ浮べ見よ——時々小兒たちも寂寞して、摺上川の河鹿の聲が高く朗かに此處まで響く時は、たとへば御母君摩耶夫人の紅指の丈ほどなる、悉達太子の御像は、牡丹花の中に天上をさし給ふ手も動くが如く、石段の蓮華を傳うて、白晝、龍燈の上る趣がある。

——蓋し此は周山和尚の説なのである。——

唯すぐ其處の脇堂に、かの蒼空の銀河の波と、雪山の雪を合せて洋々として漲流るゝ、其の水は宇宙に遍く、摺上川にも灌ぐであらう、源なる、インジャス川の貴き姫君おはします。

樂器持たせ給ふ辨財天である。

齊しく慈眼にして衆生をみそなはずとは言ふものの、端正明麗なる面影に對しても、小兒たち、分けて山小僧の跳梁は、お煩くはないまでも埃つぼくつて恐れ多い。……

處で、平日は天蓋の影に、仄にも御眉のあたりまでは拜まるゝのであるが、當日は深く幕を垂



れた。

其が其のまゝに成つて黄昏たのである。

明白に言へば小地の貧院で、折につけ講中、檀那の手助けはあらうとも、然るべき寺男も居ないのであるから、小兒たちの遊び廻つて歸つたあとを、周山和尚が今日は自分で竹箒を掛けて掃除をした。が掃除をすると成つて見ると、水の溢れたのを八功德の池などと言つては居られない。どつちかと言へば疊も古ぼけず、天井も漏らない方が可いと、苦笑した事であらう。

おまけに散こぼれたのが、蓮の花片だけだと可いのだが、煎餅の屑も、麵麩の欠片もごつただから、庫裡から廻つて、下駄穿で出て、本堂正面階の下の土間を隅の方へ——翌朝は門前の花賣の媼さまが、御冥加として手傳ひに来る筈——掃寄せて、次手だから、廂傍の手水鉢で清めた時が最う、點燈頃に成つた。

山々は暮掛る……松の一樹の下に立つた、髯なき老僧は殊勝氣である。大智識だか何だか、それは分らないけれど、今時には珍しい恬淡な學僧の由を沙汰する。周山和尚はそれから御堂に歸り上つて、眞正面に据ゑた、花御堂の太子像を佛壇に納めて、牡丹花は其のまゝに。で、庫裡境の古屏風に、掃除の時外して掛けた輪袈裟を取つて背に掛けた。……

(おます小部屋に兒が泣くくと、何と泣くやら、立寄り聞けば、

牡丹、芍薬、小手鞠櫻、わしに一枝下さんせ——)

今し方まで此處に聞えた鞠唄の汐がさつと退いて、遙に町の方に聞えつゝ、手許が障子に暗い時、チャランと賽銭の音がした。

いたいけな手を合せて、階の下に踞つた、くつきりと、おさげの艶に、美しいリボンの色。

おゝ、あの娘がと和尚は知つた顔ながら、拜む心を亂すまいと、柱に小隠れて立留る。

やがて、臍たけた圓い顔を上げて、瞳をばつちりと、斜に脇堂の辨財天の祠を仰いだ。

稚いながら面影が、松の影に浮くのを見ると、帳の端をおなじやうな白さの御顔が、そつと透して、差覗いて、微笑みたまふ氣勢がした。

尊くこそあれ、此の女神は、玉暖き乳房を以て、遍く人類をはぐくみ給ふ。況して女の稚兒に其の慈愛は如何ばかりぞ。

無量の奇特に、周山が、袖に印を結んだ時、ばらりと鳴つた、宛如財寶の溢れた音して、女の兒は、緋鹿子の帯のうしろ向きにばらりと出た。

不思議に思つた。

和尚がづかゝと進んで覗くと、銀貨まじりに、銅貨だの紙幣だのが、土に散亂して居たらうではないか。



何うも此は、金銀の蓮華に擬へたり、八功德の池に生ずる龜の子や、金魚に見立てては居られぬ。

然も小走りに行く娘の手には、饅頭の欠片を握つたやうな眞赤な墓口の端が見える。

「あ、あ、あの兒。」と壇を早や下り掛けて、

「温泉場の姉さまや。」

和尚は我ながら言様が變だと思つて、

「銀山閣の嬢ちゃん、これの。」

一寸留つて振向いたが、いま開いた牡丹の如く、パツと臉を赤くして、小さく石段を下り掛る。

「これの、これ、お使ひ姫、お使ひ姫。」

和尚は既に知つて居た。——と呼んで横探りに下駄を突掛ける、と松の風がまた颯と鳴つて、

夕靄籠むる石段にひとり寂しく遙々と紀の路の山を行くやうな、孤の影を俯向けに視た。

「辨天様がお呼びぢやぞ。」

三葉子は一文字につと引返した。萌黄濃きリボンの葉に榮えて乙女椿が咲くやうに、靄を拂つ

て顔が明るい。

「お、見えた。」

と御手洗の松に抱くばかり。

「よう飛ぶの……身體が健うて結構ぢや、學校で駆けつこをする小姐ちゃんには、坊主の爺い叶

はんで。は、時に、辨天様からおことづけぢやが、それのこのやうな、まあ、お寶を此處へ落い

て、何で、打棄つて行かつしやるのぢや、何か急に思出して、遊び事にでも驅出したかの。勿體

ない。——お、墓口を持つて。」

「空ッぽよ。」

と一寸傾く、色は自然と備つて、紅猪口翳した嬌態がある。

「何ぢや、空ッぽ。……は、は、は。」

と、その空ッぽのやうな口を開けて、老僧は笑ひながら、

「それ、見さつしやい、空ッぽぢや。さ拾うて中へ入れさつしやい。どれく手傳うて進ぜうの。」

「あれ、和尚さん、いゝんですよ。」

「何、いゝ事があるものぢや、おう、銀山閣でも御夫婦が可うさつしやる。……これ、此のやう

に澤山あるぞ。」

「和尚さん御免なさい。」

「はて、何を詫びさつしやる。」



「私、慾張りなんですもの。」

「分らぬの。……落したお寶を打棄つて逃げたものが、何として慾張りぢやの。」

「あの、私、和尚さん。」と可憐しく、墓口を捻つて、

「慾張りなんですの……あの、辨天様のお賽錢に、銀貨をお賽錢箱に入れようと思ひましたの。」

あの……それで私慾張りですわ、銅貨にしたのよ。」と、聲が細く成つて、

「お拜みをする時、こゝん處へ（襟を指しつゝ）挟んだのですけれど、落ちました。お金も、みんな溢れました。澤山あげませうと思つて、ぼつちりにして、私慾張りですわ、辨天様がお叱りに成つたんですもの、あの——亡くなつた姉さんにも叱られますわ。私ねえ和尚さん。吃驚して氣がついて——それでもつて、驅出したんです。」

もう……それは拾はないで、和尚さん、神様にあやまつて頂戴な、堪忍して下さいな。」

と肩が震へて涙ぐんだ。

甘く紅く美しい、不思議な木の葉を視るやうに、墓口持つ手に、手を添へ、和尚の目にも涙があつた。

「私よりもりするお姫様は、そんな兒が大おすきぢや……さ、改めて辨天様が小遣ひを下さるぞ。」

(一ツ星みつけた)

と里の童の唄ふ聲。

大なるものを抱へるやうに、腕を張つた掌に墓口を据ゑながら、壇下にこぼれた小金を箕で計る如くに拾ふ、和尚の状をうっかりと見て居た三葉が忍辱の袖を急に取つて、

「和尚さん、私、三葉が、三葉が、あの、お願いがあつてよ。」

と顔を覗いて、熱と視た。

二

三四日経つての事。——銀山閣の玄關に、出家が一人、墨染で顯れた。

水打つた石疊に、緋、桃色、薄紫、躑躅の植込の影が映つて常盤樹は縁を籠めつゝ、空は長閑に陽の當る、二時下りの、客も帳場も、もの閑な時であつた。

「はい、御免。」

「入らつしやいまし。」

と春高の若衆が、疊んだやうに腰を折つて、式臺のスリツパを一寸向直しながら叩頭をした。盛場の旅館の目で視れば悪くすると乞僧に間違へて、其の待遇をすべき處を、主人たち不斷の申しつけが良いと見えて、慇懃さ。



「これは。……客ではありませぬて。」  
と氣の毒らしい顔をして、

「御近所の仙光院でありますぢや——御存じもあるまいが。」

「え、え、存じて居ります、お上人様。」と、番頭の谷内も立つて出た。

「まことに唐突に參つて失禮ながら、御主人御在宅ならば一寸お目にかゝりたいと存じますが。」  
主人が謙造で、訪ねたのが周山和尚である。すぐに應接室、と言ふのも仔細らしいが、帳場の裏に、餘り驕らない氈を敷いて、簡単な卓子、椅子が二三臺据ゑてある——其處で、對向つた。

はじめ、取次を聞くと、何か東京の親類へ不沙汰見舞の手紙を書き掛けて居て、御新造が時候見舞の言託の書添へを頼むのを、おいしく、などと軽く捌いて居たのが、和尚の音訪と聞いて、出家客だ、茶一つ念入りに進するにしても、と奥へ通さうとして男衆に其のよしを申含めて立たせると、玄關前で和尚の言種が恚うであつた。

「いや、御佛事またお志の日のほかは、坊主、行者、山伏などは餘り奥まで立入らせなさらぬ方が可い……私も端近が勝手であります——一寸お帳場を拜借。」

と言つた。……其のかはり、其の所謂お帳場までは、のこくと上つて、よい天氣でござるな、と最う坐つた。趣を……男衆が打返すと、主人が巻き掛けて居た巻紙を、一寸頂いて起つたから、

少なからぬ敬意を表したに相違ない。

其處で應接室と成つたのである。

「これは……満更お見知り申さぬではないが、お知己でもありませんに、突然に御意を得ます——尤も坊主、が人見知りをして居たのでは、寺院の番人は勤りませぬ。」  
と微笑みつ、

「其處で鐵面皮に罷出ました。ぢやが、實は御主人……其の申す處の鐵面皮ならば、鼻でも耳でも、また掴まへ處はありますのぢやが……此の、のつべらぼうと俗に申す、ばけものではなければ、薄とぼけて居て、些と寝ぼけたと申す形でありましてな、御挨拶によつては、顔を洗うて出直さねば相濟まんやうな事柄にも成りますぢや。」

「はは、あ。」と謙造が應答はしたが、何故か煙に巻かれると言ふ處を、老僧の人品が人品であるから、祕密の霽に包まれたやうで、平手で二つばかり目を撫でた。

「は、あ。」

「さて、話の引繼では、私が許のお姫様に勿體ないやうにも存ぜられます、當仙光院に辨財天おいでなさる……御存じないかも知れませぬがな。」

「飛んでもない、家業かまけに御不沙汰はして居りますが、お寺の辨財天様、此の邊に誰も知ら



ぬものはありません。あの、琵琶をお持ち遊ばした。あゝ、時に。」と煙草盆を引寄せて、  
「同じ天女でおいでなすつて、琵琶をお持ち遊ばさぬのと、御神體に、何か、其處におかはりが  
あるのですございますか。」

謙造はたちの可い鮭のラカンのやうな、乾びた能辯を頬張つて、「はゝあ。」の他に何も無い、我  
ながら間の伸びたのを年配だけ、此處で一寸しめたのである。

和尚は謙遜した態度で、

「密教では樂器をお持ちなさるのを三摩耶形と申す……深い意味は、お恥かしいが存せぬけれど  
も、天女は計り知られぬ美しい、水の女神として、玉の御胸の乳房から、財寶、豐樂、榮華を灌  
いで、遍く人間を育て、智慧を授け、生命を與へらるゝとしてあります。其の一端の智慧の中に  
は、藝能が含まれます。藝の中には辯舌、修辭、從つて聲があります。聲について、音曲がある  
に因つて、音樂の神ともなさせらるゝやに承る。處で、唯今申した三摩耶形と稱へて、琵琶の  
形のみを描いて、天女を、標識、象現いたす曼荼羅の圖式もありますのぢや……が、琵琶と言  
て、其處らにべろんぢやらんと引掻き廻す、彼ではありませぬ。あの琵琶を見て、天女とも思  
はうなら、それこそ方圖もない間違ひで、團子を嚙つて月を舐めたと思ふと同じ事に成りますぢ  
や。」

「は、如何にも。」

と、此は成程、然う感ぜずには居られなかつた。

「然やうな譯ぢやに依つて、——此は東京の學校の先生が、生徒づれで見學に見えて、天女の  
前で謹んで講義をなされたのを、私が聴取傍聞に過ぎませぬが、われらの辨財天は西洋の、かの……  
……えゝと、希臘かな……希臘のアテナ女神、羅馬の、ミネルヴ女神と、一列の位においでなさる、  
最高致美、文藝の天女と承つたのであります。」

「何うも此は。」

と、恭屈の額を壓へて、

「唯今にもすぐに參詣がしたく成りました。」

「お賽錢には及びませぬぢや。」

雙方笑つた。

周山和尚が更めて、

「時に御主人——こゝが、それ、寢惚けたやうぢやと申す次第であります——昨夜……私かな  
……ふと思ひがけない夢を見ましたぢや。」

「はあ、お夢を。」



「然れば……月は天に皎々と冴えましたが、草樹に霜を置く光のほか何もない。山又山の凄まじい眞夜中と思ふのに、私一人巖影の如くに立ちました。さて、何をしに参つたか、鐵砲のやうでもあり、山刀のやうでもあり、何か得物を持つて居ましたが、まさか今の此の體で、獵や殺生でもありませんまい。それとも、お恥しい、若い時の淺ましい心が妄想に顯れましたか、若い時と申せば、不思議な事には、髻がな。」  
と皺のほか何もない、寒さうな頤を握つて、  
「此がそれ、眞白に長々と、胸から帶の下まで垂れて居た事を、目が覺めてからも判然と覺えて居ります、此がをかしい。」  
「はてな。」

「まだ、をかした事は、何に怯えて震へるともなしに、立つて居る足許がゆらくして、月も一所に動きまゝるので、確と見ると、いや何うも千仞の崖の下に、水銀のやうな谿河の水が青く走つて、私が立つて居るのは中空にも擬ふ處の棧橋でありました。」

「へい、はてな。」  
「然るに、其の橋に、何か、恚う見覺えがありますのぢやで、よく見ると、其處の、それ赤川に架けた、あの釣橋……」

カラ／＼カラ／＼と高らかに響く眞日中の河鹿の聲。謙造は思はず背後を見た、遠い湯殿の雫が走る。

「見馴れた桑畑の桑が一つ／＼金銀の鎧を着た、三國志の武者のやうに、月明に見えて、何となく身の毛が彌立つ。……急いで歸らうと思ふと、背後に橋がありませぬ。向うへ渡らうとすると、前に橋がありませぬぢや、おのれが立つた處ばかり霧のやうな橋板が少し續く。……で立すくまつて、御先祖を拜んで居ますと、おのれが沈むのか、川が湧上るのか、兩方へ水晶を砕いた流が走る。……茫然と成つて、……其時どちらを向いて居たか存せぬが、向つた、向うの崖下の水岸へ雪よりも白いお振袖、金欄の帶で、すつとお立ちなされた女性があります。」

「……」  
「お姿は其であります、氣高く、美しいお顔は、恐多いが朝夕お見上げ申す、寺のお姫様と窺はれました時、(和尚さん)はつと私はな、奈落も水も谷も忘れて跪いた——(雪松の三葉子から小鼓を借りて下さい。——)と一手一寸遊ばすやうに肩へお手の指が白く撓ひました。何とも人間のやうなお聲ぢやが、其の微妙な事、甘露は口に甘いと申す、今以て耳が甘い。」  
と言つて謙造の顔を見た。



「三葉ちゃん、三葉ちゃんや。」

謙造は横手の襖を開けながら奥を呼んだ——こゝに横廊下を隔てたのが居間で……續いてそれに連つた處に、吉田屋——と云つて、最う御存じであらう……其の、夕霧の座敷がある。

誰も略想像する如く、和尚の申出でを聽いて、謙造が此を否む理由は更にない。寧ろ敬虔、湯仰、法悦をしたに相違ないと同時に、一應、鼓の來歴を和尚にも語つて、……もの語りつゝ、其の鼓は、嘗て遠い山の方から出て來て往つた處は知れないと言ふ旅の順禮が六部が、三葉子の姉に通りがかりに授けたものだと言ふに到つて、或は、鼓は一度、御寺の辨財天の袖にあつた什物ではなかつたであらうかとさへ奇蹟を感じて言つたのであるが、和尚は仙光院を預つて、もうこれ二十年に成るが、覺えてから寺に見掛けた事は決してないと言ふ。尙ほ是ばかりではなく、和尚は不思議な夢の裡の其の白衣の貴女の言葉が、「和尚さん。」だの「雪松の三葉子。」だのと眞に通俗なものではあつたけれど、言葉通りに直譯が出來たのではないさうで……

自分に「さん」づけさへ恐多いやうで、其の心を計り兼ねた處へ、次の、「ゆきまつのみはこ」に到つては意譯も翻譯も殆ど出來ない。祕密の眞言かと考へて、此には知識のないのを少なからず考へたのでは「ゆきまつのみはこ」を理解するには、一月水を浴びても分るまい……などと言つた。

——謙造が、三葉子を呼ぶ順と成つたのである。——

「旦那、三葉さん、まだ學校から。」

惟ふに、それとなく聽問もして居たであらう、帳場から若い衆が伸上つて聲を掛けた。

殆ど同時であつた。

通廊下の方から、すら／＼と走つて來たのは、肉づきもよし、脊も高し、内の薫で、

「まだ三葉ちゃんは歸らないことよ。」と應接室を覗いて、うさんらしく、和尚を横目で見ながら言つた。

「此は御令嬢で。」

「入らつしやい。」

「おゝ、えらい御容色よし。」



「いや……然うか、はてな、平日もお前の方が時間があとなのではないかな。」  
「え、それが今日は一所だつたんです。然うすると、銀行の横まで来ると、あの、そら、内へよく来る車屋の爺さんね。」

「お、平八か。」

「え、汚ない。」

謙造は一寸苦笑して、

「其の平八に逢つたのかな。」

「……何だか、二人で話をして居たから、先へずん／＼歸つて来たんだわ。」

「ぢやあ、此方からの歸りでせう。」と帳場から若衆が言つたのである。

「来たのかい、何うしたか多日見えなかつたんだが。」

「疝氣で寝て居たんでございますつて、腰が痛くつて——久しぶりだと言つて、お湯を頂いて出て行つたんです。」

「薫は、待つて遣れば可いのに。」

と謙造が見返つて、

「一寸駈出して見て来なよ。」

「可厭だわ。」

「何だ、可厭だと。」

「七百貫目の借銭負うて、夜晝稼ぐ伊左衛門。」

「馬……鹿。」

「こんな時寝ねば成らぬ。」

とつんと突袖の、素足で袴を蹴つて、すた／＼行く

四

「はて、面白い、當時流行の演劇ぢやな。」

「勘當ものでございますよ。」

「……さりながら何も、身すぎ、あのやうなよい衆に、蹴られても損は行かぬ。慾を知らねば身が立たぬ。慾若に御萬歳や。年立かへる足駄にて、誠にめでたう侍蹴る。町人も蹴る。伊左衛門も蹴る、蹴る／＼蹴ると蹴散らかし……」

と向うで薫が高調子である。

何か急ぎの用と見えて、女中が一人、ばた／＼と廊下を駈抜けた時であつた。



「あ、旦那三葉ちゃんがお歸りです。」  
と、さすがに番頭は目が早い、筆を銜へて、算盤を弾きながら、別に顔も上げないで、植込を透した表通を、唯見附けたのである。

「あ、歸つたか。」  
若衆が立ち状に、

「おや、平八爺が背負して來ましたぜ。」

「怪我をしやあしなないか、何、背負だ。」

と怪我をさきへ言つて、謙造はついと立つた。和尚の膝も動いたが、向うの襖を颯と開けて、今朝あたり結日ででもあつたらしい、水々しい圓鬘で、嬬に差覗いたのは御新造で、袖も裾も、氣もはら／＼した風情が見え透く。

「お使姫様お歸りだと。……やつと、まかせの、いや、どつこいしよ。」

と玄關へ、い、加減娘造つた三葉子の袴はいた姿をとんと下す……最う其の聲では大丈夫と、謙造も、早く落着いたが、「三葉ちゃんや。」と應接室へ呼込むと、手に酸模草を一束持つた三葉が、威勢よく飛込む處を、抱いて抱寄せて、

「何うしたんだよ、爺さんに背負をして。」

「えへッへッへッ。」と世辭笑はしたが面は眞面目で。今日は稼業に出たのではないから足駄穿で、最う帳場まで躡上つて例のくり抜の大火鉢へ、團栗の落ちたやうな、小ぼけな煙管を捻くりながら、其の言ふ處によると、——親仁は今度は持病が些と念入で、伊達驛寄の小屋で、寢込むと言ふ程でもないが、半月あまりも抄取らぬ其の日に困るよりは、負けない氣の我性もの、強腹から何うやら疝氣の蟲に勝つて漸とこの二三日、立歩行きは出来るやうに成つたが、まだ車を挽くなどは思ひも寄らない。——處、思着いた飯坂へ行つて、お使姫をえいと背負つて、其の利益で腰を切つて立上らう。……禁厭に使ふやうで濟まぬが、お使姫は人助けに成る事、此方は背負つて立てば癒る、と頭から極めたので、湯なんかは何うでも可い、其の三葉子を背負ふために、わざわざ、のそ／＼と出て來たのださうである。

學校の歸途を日南で待つて、吃驚して泣出しはしまいかと危みながら、譯を言つて、揉手をし頼むと、一度は怪訝な顔をしたが、莞爾して頷いた。そりや言はぬことではない。ふはりと掛る柔な胸よりも、腰の方が覺えのないまで軽く上つてしやんと成つた。有難い。此の勢で足ならしに一廻り何處か廻らして貰うたら、明日から家業に出られると言ふと、優しい事は、朋輩の通りかゝる小兒たちが、やあい怪我人だ、病人だと囃すなかで、肩へ突俯しながらも、よう聞分け、「そんなら釣橋の處へ。」と三葉子が言つたので、あれまで出掛けて一廻りして、どん／＼と歸



途にはお馬のやうだと、恚う平八が言つたのである。

痴氣も、禁厭も思附も事實だが、しかし事實の中に——三葉子が溪河の其の釣橋へ行かうと言つて、「お爺ちゃん姉妹は顔が肖て居るので？」と背中聞いて、「そりや肖をとるともよ。」と手輕に答へると、「私の髪を撫でた小父さんが、釣橋の處で逢つた女の兒は私に肖て居るんだつてね。」と忘れずに——折があると、平八が大橋宗吉……即ち毛利先生が、其處で酸模草を銜へた女の兒に逢つた事を、時々話したのを覚えて居て——「連れてつて頂戴、死んだ姉ちゃんに逢へるかも知れないわ。」と言つたので、日南で眩しかつた平八の目の涙が、ねば／＼と脂のやうに成つたのだつたが。——それだけは抜きにして饒舌らなかつたものである。

「大した御利益だ。有難い有難い。」

と、此まで話して、いきなり煙管を投げて、手を合せて拜むのが、和尚どのの方を向いたので、周山老師も合掌した。

謙造も首垂れざまに顔を視て、

「三葉ちゃんや。」

此處で、諄々として和尚の夢の話をして聞かせると、「ゆきまつのみはこ」まで夢を視るやうな恍惚した目をしかし清く睜つて、熟と周山の顔を凝視めて居たのが、辨財天の聲だと言ふ、「鼓を

借りよう。」とまで聞澄すと、何にも言はず、ばた／＼と駆込むと、

「唯今。——」と此の時、お芳に歸家を告げた美しい聲のまだ響くばかりの間に、紅い緒を綾取つて宙を舞ふやうに小鼓を捧げて出た。

「一寸……三葉ちゃん。」

と御新造お芳が呼ぶ聲に、一度茶の間へ隠れたのは、お芳が最中へ身を引いてゐたのであつたが、箏箏をカタリと開けた音が響くと、松葉菱に雪輪の紋の藤紫の袱紗を添へて、三葉に持たせて、背に引添うてお芳が出た。

「お上人様。」

「これは御新造——寺はじまつての奇特にも存せられます。しかし、御二方をはじめ、御家來衆、いづれも、此の一儀は平に世上へは内々に願ひますぢや……。どんな事で、寺の松風流の月、ふと鼓の音が響かんでも計られませぬが、猶更御内々に願ひたい……。智識には成れませいでも、山師坊主とは言はれたくありませんな。」

……三葉は伶俐であつた。……周山が心を籠めて、説法したのも、みな三葉の意に對して、秘密の其の頼みに應じたのである。恚うして、蹴つて蹴つて蹴散らかす薰の足を我が身にうけても、次第に守り切れなさうな、姉の記念は、辨財天の袖に包まれたのである。



周山が應接室を離れたのを視て、坊主は嫌ひらしい薫が、すねたやうにツツと入つて來た。

「いゝえ、……別の新しいのを調へますから。」

お芳は然う言つて、薫を宥めて、謙造とひとしく、玄關へ周山を送つて出る。

「あら……酸模草ね。」

矢張り小女で、卓子の上に三葉が置いた、酸模草を視ると、もう氣が移つて、

「頂戴な。」

「はい。」と、此も小女で、薫が含んだのを視て、ともに三葉子が吸はうとすると、

「あゝ、不可ましねえ。食べちやあ成んねえ。酸模草を食つて嬢ちゃんが消えては大變だ。」と平

八が慌てたやうに手を振つて留めて言つた。

時に、袱紗の裏が透いて、調の緒の燃え立つやうな、つゝじの中を、蒼く澄んで、瘦法師が、

片手に高々と捧げながら、腰を極め縛るゝ如く敷石を出て行く形を、わつと笑はうとした、番頭、

若衆、折から立かゝつた女中まで、その時敷臺に、圓鬚の品よく慎ましやかに、低く坐つて、し

やんと手をついた御新造の姿のために、ト目を見合つて靜まつた。

## 祭の獅子

一

話がわかる、――

金澤―加賀―には、春秋の二季に氏神の祭禮がある。町と場所によつて、順々に日取は違ふけれども、春は四月中旬から、五月へ掛け、秋は九月のはじめから十月の末に到るまで、町々の軒に行燈が掛連る。祭禮は宵祭、本祭、裏祭と三日間に渡つて、太平の人たちが此の間の遊びと娯樂の小兒ばかりでない事は、何處も餘かはりなからう。家構によつて、金屏風、緋の毛氈、流儀の活花と言ふ、町内の表道具は都も鄙も略おなじ事と思ふが、行燈を掛ける軒飾が、此の地方のは趣が少し異つて居る。櫻の花に短冊と言ふのではなくて、生のまゝの青々とした松の枝に、金銀の折鶴を吊したのを一様に葺くのである。

されば縦横に長い町は、濃き淺き緑の中に、きら／＼と鶴が舞つて、彩色の繪行燈。花に、もみぢに、春秋の風情も然る事ではあるが、名にしおふ雪國の、降りかゝる積る雪の中に、此の景色を見たらば、どんなであらうと想はれる。



けれども、松の折枝で、軒を打つのは、或は此の土地には限らないかも知れない。たゞ金澤の町の特有として他國に類のないのは、祭の日に練出す巨なる獅子である。

一體、土地々々の宮社に舞ふ獅子は、其のはじめは鹿踊である。いまの獅子は、いつしか角のなく成つた鹿の頭ださうであるが、それは、いま其として置く。

獅子頭は、初春に舞ふ獅子、——祭禮の時、都會の所謂御造酒所に、注連で飾ると、勇猛忿威の除魔の形相に、さしてかはりはないが、最う二三倍すと大い。……重量も此に合ふ。——其を、多くの氏子中に、何人と數ふるほどよらない、力自慢の強いのが獅子の口の凄じい牙に、カッシと幌の端を左右に噛ませ、噛めに渦を疊んで、下睨みに、赫と金色、或は銀色、又丹の如く血走つた臉を睜つた頭を、両手で一人して捧げて立つ。

十疊の蚊帳を二つばかり合せたほどの、大幌は、地白または地赤なるに、立つ浪、群る雲を染めて、いづれも車輪の如き牡丹花を一面に描いたのを、竹の太い輪を半月に張つて、其のわがねた竹の兩端を男が二人で幌へ入つて兩端で支へるのである。が、竹の輪は、三組四組ぐらゐる要るであらう。此が獅子の胴である。町が狭いと、脇が支へて入らない。高さはいつも平屋の廂に並ぶくらゐに見える。其處で尾だが、太竹の先へ麻の苧を緋に染めて瀧の如く振亂して結んだのを、幌の尻へ支つて、突立てる。が、ぐしやりと萎えたのでは勢がなし、其の癖前へ引かれるから、

突上げた竹で釣合を取つて背中で幌の尻へ膨らみ加減に凭掛るので……自然と身體が仰向けに成つて足が浮くの、胴の輪を支ふる力に引摺られるやうにして、よたくとつて行く——此の役は餘り儲からない。些と智慧がなさ過ぎる。おなじ雇はれる人足でも、昔だと辻番の親仁と言つたのが押着けられるのであるから、龍頭蛇尾と言ふが、此の體で、草臥れた處へ、途中雨にでも降られると、獅子の頭、鼠の尻尾に成る事が往々あるのは止むを得ぬ。

町々の此の獅子は、來歴と傳統とを誇とする。今出來のものより古いのを尊んで、幌も牡丹も尾の紅も皆錆びて居る。しかし却つて此の方が、百獸の頭目の蒼然として巷を行く傳來の威力を偲ばせる。

晴れたる空には、白き陽の下に牡丹花の汗を帯び、雲低き黄昏には、幌の影が星を呼ぶ。其處にも一頭、彼處にも一頭、屋根に聳え、地に蟠り、大路の果に背を顯し、辻の柳に尾を亂し、山の根に牙の口を張る。

遠く見れば、大人まじりに小兒たちは其の周圍に豆の如く集ひつゝ、人どよみに紅塵を低く浮かせて、獅子は雪に駕る觀がある。

瞳によつて名をなせる、金の獅子、銀の獅子、彫刻の繪の具の青獅子、赤獅子、漆の色の黒いは黒獅子。



時に練出す獅子の中へは、いづれも皆囃子が入る。大太鼓、——しめ太鼓、臺に乗せて兎手が附く。——小鼓、三味線、笛、ちやんぎり、胡弓を添へるのもあつて、唄は唱はない、唱歌なしに、巧に彈奏の手を合すのであるが、大方は土地の藝者の姉さんが三味線を勤め、ちやんぎり、小鼓、笛などは舞妓たち——皆友染の媚かしい袂を端折つて、淺葱、緋の脚絆、手甲、足駄穿きで練るのである。

「ハオ。」

「イヤ。」

「ハオ。ハオ。」

「イヤ。」

囃子が風に吹取られる時も、太鼓の此の掛聲が、美しく、細く、弱々と然も透つて、遠くへ響く。「ハオ。」

「イヤ。」

恠く囃しつゝ、大獅子の搖ぎすゝむ音楽の、フト靜寂間には、捧げ持つ力の手の凝りに、獅子は自然と牙を上下に嚙んで齒がカチ／＼と鳴り、頭の髪がぶる／＼と震へて、目の光が、強く、また鋭い。……

二

向つて進む處は、氏神の社である。都會で御輿の渡ると異りはないが、往復の途中、祭の町の重立つたる家——些と立入るやうだけれど、樽代肴料を發奮む——前で、此の獅子が留つて、其處で(舞)がある。

しかし此處のは(狂)と言はう。それも獅子其のものが自ら舞ひ且つ狂ふのではない。對者として、勇士、劍客が顯れる。楮熊の毛を頭に被り、着込、鎖帷子、裁着、義經袴、武者鞋の扮装で、劍、太刀、刀、長刀、棒、鎖鎌など、このみの得ものを取つて、豫て左右について居るのが、此處で一人々々正面に立顯れ、見物の輪の中で、手練の術を奮ふのである。一人だちの時もある。刀と刀と合せるのもある。長刀と鎖鎌と合すのもある。目覺しく棒を使ふのもあれば、拳で劍と相搏つのもある。一つとして、化粧劍術はないのださうで、一刀流も神影流も、入身の小太刀、念流も、長刀の靜流も、吃と法に叶ふまで、不斷稽古をはげむのだと言ふ——尤も額に薄化粧した幼いものの、黄金づくりの太刀も交れば、何うかすると、緋縮緬の袴で、娘が長刀を使ふ事もある。が、それは装束の美しい、桶屋臺の瀧夜叉姫、大宅光國のひそみに過ぎない。こゝに、素肌、稽古着一枚、尻切半纏に三尺帯を誇とする、屈竟のつかひてが出て、布をた



たんでうしろ顛卷すはだして、腕を較べ、術を競ふに及んでは、刀を打つて火花を散し、拳を合せて血を流す事が少くない。

此が見ものなのである。

渠等は獅子を撃つ討手だと言ふ。すると、猛獸に咫尺して、何が故に討手と討手が相戦ひ、相傷く、と言ふのに、蓋し味方同士が、戰場に於て一番槍、一番首を争ふと同様に、獅子を撃つのに、先を駈ける、即先陣争をするのださうである。

其處で——得ものを取つて、一人が向ひ來る時は素より、二人或は三人、相争ひ、相搏つ間の、獅子頭を預るものは、我を殺さんとする敵に對する猛獸の威を示して、或は怒り、或は唸り、或は苦み、或は叫ぶ氣構を以て角を立て、毛を亂し、巨口を張り、舌を廻し、牙を鳴して、頭を高く空にかゝげ、鬃を低く地すりに取り、横にわなゝき、縦に奮つて應ずるのである。

「えい。」

「や。」

「うむ。」

と、呼吸を揃へて、討手の勇士が、ひた／＼と寄つて、仕済したる劍法の身構に倣ふを合圖に、がくりと横に鬃を返して、獅子頭を地に落すのが、一曲、一場所の終に成る。

また兩三度繰返す事もある。

「揚げた。」

と、後見が羽織袴で、揃つて扇子で揺上げるのを合圖に、獅子頭が幌を嚙んで凜と反る。

「ハオ。」

「イヤ。」

牡丹の叢は、雲、浪とともに、白き陽、青き空に搖出す。

で、前段に言つたやうに、來歴傳統を誇る町々自慢の獅子が數あつて、出れば雨が降ると言ふのがあり、血を見ないと納まらぬと言ふのがあり、必ず火沙汰が起るなどと言ふ、物騒千萬なのさへある。

さて、此のものの語のはじまるのは、土地の小立野と言ふ處に秘藏する、雨獅子と稱ふる名作の頭が出た、……近頃の事である。

三日ある祭の、本祭の日の眞日中であつた。……此の小立野と言ふのは、……近ごろは東西から汽車が貫通したから、北限のあの土地も、諸國の旅客が頻繁で、多くの人を知つて居る。……金澤と言へばつきものの公園の、其の地つゞきの奥に成る——場末の町で、町内も僅だし、祭禮も寂しいが、逸物の獅子は名が高い。



素木彫で彩色がない。瞳も木地のまゝで、黒毛を颯と亂して植ゑてある。白面の獅子だが、時代を遠く経た、錆びた色は、赤くも黒くも成らず、古い能の面のやうで、然も小造なる獅子の面が薄青い。

遠くから見ると、何となく壇の浦の新中納言知盛の幽霊のやうだと言ふ。此に限つて、幌も白布を用ゐる、牡丹も浪もともに墨繪で……此の繪も名工の筆ださうである。尾もまた人魚の黒髪

のやうに丈に餘つて黒い。

寂しく凄いけれども、雌獅子で角がなくて、面も柔和に見ゆる。  
雨獅子は通稱で、人は怨靈の獅子とも言ふ、火事も、血も、喧嘩も、第一儀の雨も、此ばかりは一つでおはぐろの口に含むごと、聞えた名彫であるだけに、ソソ小立野の獅子と言ふと、術者も、劍客も、氏子には限らない。膽の据り、腕のすぐれたのが、八方から馳參する。見物も、所から故らに推掛ける。幌の雌獅子にも手の冴えたのが擧つて入る。

——此の時も皆揃つて居た。

三

獅子が通る——獅子が通る——

「ハオ。」

「イヤ。」

雨獅子が通る——怨靈の獅子が通る。

「ハオ、ハオ。」

「イヤ——」

小立野は——彼の源平盛衰記に——

(平家は礪並山を落されて、加賀國宮腰佐良嶽の濱に陣を取、旗を上よとて、佐良嶽山に赤旗少々指上げたり。谷々に被討残たる兵共、五騎六騎十騎二十騎馳集り、盛俊も軍兵引率して參たれば、程なく大勢に成にけり。源氏も左右なく追懸す。押違へて陸地に懸りて、加賀國平丘野の、小立林に陣を取つて白旗を擧げたり。源平兩陣に白旗赤旗立たれ共、霞を阻て遙也) とももの語る……木立に林、平丘野が、いまそれに當ると傳へて、其の平氏も、此の木曾勢も、後にあはれを留めた戦場に、昔ながらの森が残る……

霜月の中旬、秋の末の事なれば、丘に連る山々は、紅に霜も鏤め、薄霧かゝる被衣の下に青地錦の色を染め、遠き國境の峻嶺は、巔に雪を彫んで居る。町ながら、高臺の崖を滴る森の底の水の音の冷かな小立野を、大川一つ隔てたる對岸の山と脊を並べて、白雲靜な青空の下を、風は吹



かぬが蕭殺たる金氣を領して、笛、三味線も嚴かに、ソレ其處を獅子が通る。

また不思議に好天氣で！

屹と降る雨獅子が、本祭の今日——午後三時頃、某——と言ふ土地の名族の別荘が一構、屋敷町の半を占めた、其の門前に來て、例の狂と、劍戟の競技をはじめた——時に、をかした事の起つたのは、水でもなく火でもない。

勇士が組をかへて、交るゝ進退して、各自、秘術をつくしても、あ、うむの最後の一撃に、獅子が其の頭を落して、顛を仰向けに倒れなかつた事である。

其處で、討手のあらゆる劍客が新手を入かへて打つて出た。が、頭は依然として耳を奮ひ、毛を捌き、牙を噛み、肩を落し狀に胴震をして、眼を据ゑつゝ、更に來り迫る討手を待つた。

見物は面白がつた。——向顛卷、大肌脱で、此の時、幌の頸の縫目から朱の如き半身を顯して、獅子頭を使つたものは、相撲は取らぬが、好きに好く狂で、「晴天十日だ——お天氣お天氣。」と、雨にも雪にもお天氣を口癖にする、……渾名を（お天氣定。）と言ふ——中年を過ぎた親仁だけれど、血氣の逞しい、酒吹ひの、しゃがれ聲の、狸々が噓をしたやうな緒ら顔の魚屋で、像て獅子頭を振らせては名物の男であるから、見物は先づ渾名の（お天氣）を慶祝して、且つ其の獅子の落ちないのは、お天氣定が酒の酔に氣を競つてひるまないからである……そして、こゝに上手を舉

つた劍術拳法のつかひ手が、一處で、あらゆる秘術をつくすのを、勞せずして見らるゝ便宜を嬉しがつて居た。

また、定も、劍士たちも競つても可かつた。——祭のために、本邸から來て居る別荘の美しい令夫人と、令嬢たちが、花やかな親族の誰彼、男女を交へて、群集を曲尺に一方を開いて、門内端近な處に集つて居たのであるから。

劍士は更に交るゝ争ひ搏つた。

獅子の狂は三時間に餘つた。

山々は、はや薄暗く成つたのである。

「討取れ、討取れ。」

と、いとゞしゃがれ聲で、後には叫び出したお天氣定が、やがて、

「留だ、——留を刺せ、刺さねえか。」

と聲を絞つて、結末を促した。それでも獅子は躍つて止まない。青い口を張開く、齒たゝきをする、額が暗く、毛が逆立ち、眼が光つた。

お天氣定も顔の色が變つて、浴びたやうに汗を流し、ひつつる腕に、ぶるゝと頭を揮つて、

「殺せ、——殺せ——殺せ——」



と唸る。

我を殺せと言ふ如く、苦しげに、其の呻く時分には、劍士、拳法とりの名だたる面々は、前刻からの殆ど衝動的の悪戦に、素面素小手の方々に、すり疵ながら、手を負つて、血を流さないのは一人もない。

血を嘗め、指を噛み、腕を萎して、選ばれた手だけが三十餘人、たゞ茫然として、一かたまりに立つたのである。

見物の顔も暗く成つた。

「魔が魅した。」

「天狗の業ぢやな。」

渠等は相顧みて、口から口へ陰々とひそめき傳へた。——恚うした時に、一切を、天狗の業に歸するのは、土地一般の習慣である。

「殺してくれ——うゝむ、殺せ。……切ないわい。」

獅子と定と、青い顔が宙に二つ、ぐわちくと震へたが、最後の勢に、うむと呻いて、其の獅子頭を目の上に捧げた時である。人の形に突張つて、大なる膨みを持つた幌の尻から、黒いものかたまりが、ぼんと抜けて出て路端の森へ飛んだ。——世に悪ものの離れると言ふのは恚うした

事を言ふのであらう。……同時に、突立てた尾がぐしやりと挫けて落ちると、幌の全形は丸潰れに地へのめつた、輪を支へた人足が、はずみで残らず轉んだのである。

けた、ましい女たちの聲がして、獅子の腸は美しい。……友染も、紅も、白脛も、島田鬚も、簪も溢れて出た。——此のあとのものは、しかし、獅子が犠牲に屠つた餌を反吐に吐いた趣がある。

女持の煙管に煙を立てたま、這出した年増もあるが、中には手首、頬などを、怪我して血を染めた女も少くない。尤も口紅を散らしたほどで。……

獅子はと見ると、お天氣定が頭を昇上げたまゝ、ドカと大地へ大胡坐に腰を抜いたから、尾を伏せ、胴をなぞへに、背を立てて面を上げた。恰も這個巨獣が高き丘の上のしりと横はつた、スフィンクスの形して、不思議に、嘯いた面は、森に沈む夕日の餘波に、ほつと薄紅く頬を染めて、黄昏の霞の這ふ裡に、ニタリと微笑んだやうに見えた。

四

心得た若いものが、別荘から、手桶に水を提げて、駈けて出て、此も諸肌脱で、馬に餌ふやうに、柄杓からお天氣定に水を飲ませる。



獅子頭は臺に据ゑた。が、二三人が然うするのに逡巡した。いまにも頭から噛みさうに見えたから。……

で、お天氣定を介抱しながら、其の狂態を、且つ慰め、且つ詰つて問ふと——尻尾を見てくれ。……俺の方は最う止さう、頭を寝かさうと思つたのだが、尾を振る勢の激しさに、氣も魂も奪はれたやうに成つて、はずみと言はうか、競合と言はうか、何うする事も出来なんだ。頭を下げようとする毎に、ぐいぐいと後から、可憐い勢で引立てられて、しまひには投落さうにも手が附着いて離れなかつた、——と言つて、大溜息を吐いて居る。

成程、……然う聞けば、いつもは、有つても無くつても、唯つけたりの獅子の尾を、先刻から素破らしい勢で振つて居た。——氣をつけて見たもの目には、小立林のむかしのまゝ、を面影に残したと聞く、別荘の森を背景に、其の尾の揺いだ状は、嘗て魔法つかひが此のあたりに來て、源平の戦を東雲の横雲に顯したと言ふ、旗の手の虚空に入亂るゝにも似たほどで凄かつたと、例の天狗の歸依者だらう、が言ふのである。

處が——此の時、智慧のない役を勤めて、尾を背負つて居たものは、俳優である。地俳優と稱へて、土地に専屬した俳優で……俳優だが、お人よしの、ぐうたら霜げた親仁で、舞臺では何の役も勤まらない。唯武勇傳の山賊退治の、しんまいの小盗人、合戦場の名もなき雑兵、仇討も

の討たれる方の小侍、義士の討入の場なぞへは、襦袢一つで顯れる。いつも仕種が極つて居る。やあ／＼うぬら返討だ、觀念しろなどと稱へて、震へながら蚊脛を踏張り、くわたりと見得を切ると、抜いた刀の刃の方を、肩に振かついで、一つ極つて、ズル／＼と引きおろすとともに、自分で自分の咽喉もとから胸を袈裟がけにきり割きつゝ、たら／＼と血を流して、ダアと悶えながら仰向けに落入るばかりで——他には申上げますとか言ふものをはじめ、せりふの一言もない役さへ着いたためしはない。

が、見物は待つて居る——都會から大名題が乗込んだ時でも、立廻りの場には、此の地俳優が出ないと納まらない。で、例の刀を振かたげて、自分で切つて、ダアと成るをきつかけに、「桶の輪屋ア」と讚めるのである。たがや——などと言ふ威勢の好いのぢやない。

「桶の輪い——桶の輪い——」と、其が本業で、芝居のない時は町から町を廻つて歩行く——此の桶屋が、尾を承つて居たのであるが。……とすると、誰が考へても、何う間違つても、頭を狂はせて怪我人を出すほど、魔に成らう筈はない。

されば獅子の尾から飛出して、森の茂——狭い崖道の下が谷に成つて、岩を滴る水が幾筋も細い瀧を掛けて水の音は絶えず響く、鶴間谷と稱ふる晝も眞暗な場所——へ消えた、黒いものは、桶屋が天狗に攫はれたのであつたらうか。



獅子は、胴を疊んで、其のまゝ据置きの納屋へ引返した。清めの鹽を打つて、御幣、造酒を備へて暴威を鎮めた。

日が暮かけた。が、まだ晴天である。

獅子夥間が、彼方此方へ一先づ散らばつた中に、一組、公園寄りの裏町の酒屋で、件の桶屋を見つけたではないか。

近頃は、大なり、小なり、何處にでも酒場はあるのに、克明に造酒屋の軒下の土間で、（立酒居酒お断り申候。）と言ふ札のかゝつた下で、それでも祭中は特別に料賣をしてくれる。……縁臺に腰を掛けて、升酒を呷ると言ふと勇俠だけれど、山賊の手下も、端でしんまいのだらしなさに、桶屋は升を持ちながら、うとりくく坐睡をして居たのであつた。

通りがかりに見つけた夥間は、や、此奴、と狐憑の背中を打撲すほどに「つどやいて、

「何うした。」

「親方。」

「桶の輪屋。」

「えへ、へ、へ。」

と桶屋は意氣地なくニタ／＼して居る。

「笑事ぢやない。」

「何うしたんだ。」

「えへ、へ、へ——不意にな、お前さん、獅子の尾が威勢が悪い。かはつて遣らうとおつじやつた方がございましたな、——立派なお方で、えへ、へ、へ、其でございませうもんだからね、お前さん……」

「魔ものだ。」

「うむ、すぼりと入かはつたのが誰の目にも入らなかつたと言ふものはな。」

小さな聲で、

「魔障の業だ。」

「いんえ、もし、えへ、へ、へ。お前さん方もお聞及びで御存じでございませうて……それ、あの、油車で、小兒衆の川へ流れた處をお助けなされた。——それ、新聞にも出ましたよ。少い士官さんでございませうがな。」

と唇をなめ／＼言つた。

騎兵少尉、雪松謙吉は渠である。

奥州信夫郡、飯坂温泉に銀山閣と言ふ名望家の旅館の息子で、士官學校出身である。言ふまで



もなく、仙臺の師團附であつたが、何某師團長の此地に轉任したのについて、志願で隨屬して来たのは一昨年であつた。

五

別に仔細はない——乗馬の始末に悪いから、下宿で済む處を、馬卒と二人荒屋敷にごろ／＼して居る。

謙吉は、此日秋ばれの氣の爽かさに、緋の袴に兵兒帶して、野を一つ越えて麻野川の上流、水の清きあたりへ馬のすそを出たのである、歸途は上手にまかせて、鶴間谷の惡所を易々と乗上つて来たが、夏は眞晝も螢火の雨を降らすと言ふ場所……鬱然たる樹立の縁に、巖を走る細瀧の玉の簾に對して、我は銀の如く、駒は烏金の如きに、ひづめを留めて見惚る／＼うち、梢に聞えて、雲に奏づる雨獅子の囀子を聞くと、待て、此の駒、暫時して、實に琅玕に成らうと思ふ……一種の靈氣を感じて、故と幹につないで、一人其の暫時の間を、小立野へ森を分けて、天高く出たのである。

獅子の尾は遊戯であつた。

飽きた處で、衝と抜けて、森へ沈んだ、崖を傳つて下りた。そして鬘を撫でた時、渠は惡魔に

は似なかつた。が、嘶きむかへた乗馬は、さながら龍の化した装であつた。

油車

一

……梅雨の頃……

油車——城の用水が市街の低地に捌けて町中を流るゝのを鬼川と言ふ。——川上の方に、油を搾る水車小屋のある處を稱ふるのであるが、こゝにかけた板橋は、何時もごろ／＼と車音が響くから、俗に呼んで雷橋……名は大きい、たゞ假橋に過ぎない。

やがて小學校のひげようと言ふ三時頃であつた。

此處の片側は崖路の下——其の水車小屋で、一方は、低い古い土堀つゞきの屋敷町で、東京だと一寸本郷の西片町の趣がある。あゝした高臺ではないが、樹林も多い、……高等學校、師範、中學などの教授連が邸をしめた學者町と言つた處で、

幼稚園を濟した五歳六歳くらゐなのが、長じけのつゞいた中の、珍しい天氣に、家々の庭は廣いに、蜻蛉のやうに此の川縁を飛廻つて居た。



「そら、蝸牛だ。……大きいよ！」

と洋服扮立だが、帽子は打棄つて着て居ない男の兒が、片手に三ツ四ツ小さいのを握つて居ながら、川縁へ片手を伸ばして水に垂れて茂つて居る——花はもうこぼれたが——空木の枝の蝸牛を取らうとした。頑是なく、乗つたはずみに、小膝がのめると、空木の中に這つたが、帯も袂もないのだから、小枝には支へられず、一堪りもなく、もんどりを打つて落ちた。——此の頃の雨に、水はどうくとして嵩増して渦を亂して岸を洗ふ、不斷から、こゝは別して深いのである。

恰も其時、雷橋を渡りかけた、襟の青い、すつきりとした、若い、乗馬の士官があつた。

丁ど眞中の處で、ハツと見る間に、小兒が落ちると、身構も氣組も何もなく、見上げるばかり高かつた、逸物の鞍の上から直刀と拍車の銀と、氷がとける雫のやうに、其のまゝ唯ぼとりと垂直に川へ入つた。

欄干はない。

餘りの迅速さに、こんな筈はないと思つて居たらしい。濁流の方が吃驚して、颯と分れて、人間一人、底を踏んで遮るものなく立たせたやうに見えた。——忽ち、其の本能に威を返して、帽の上に渦を噛みつゝ、騎兵の頭をがぶりと呑んだ。

と思ふと、身の丈二つばかり拔手を切るや、さきへ沈みせもす水の上を轉けて行く、護謨鞆の

やうな幼兒の片足を掴んで、斜に引きざま、兩脇に抱上げると、岸の淺瀬に、胸の上に浮上つて、悠然と陸に戻した。

岸へ立たせて手を離れたのだが、小兒は其のまゝ、俯向に倒れた。しかし、落ちてからそれまでに、ものの三分とは経たない。助かるのは言ふまでもなからう。

ざつくと、再び身の丈二つばかり岸づたひに遡ると、其處へ——ぬしを慕つて橋から首を下げた馬の轡に片手が掛ると、ひらりと橋の上へ飛ぶと齊しく、拍車の音も立てずに早や高い鞍上の騎士と成つた、全身の雫はたゞ一筋と成つて、長き銀色の直刀に輝いて流れつゝ、單に其ばかりは重さうに見えた。河伯の公子が少將軍に現じた風采がある。

水車小屋の森の根に、濃く咲いた紫陽花が、漲る水の香とともに、青い影を投げて、其の胸を飾つた。

若い騎兵は腕を返して、帽の下に額の雫を拂つたのみで、手巾も使はずに、軽くひづめを鳴しだと思ふと、忽ち渡つた。——時に、此の四脚に橋を堰かれて、手を挙げ口を張つた水車小屋の人たちは、どつと走つて倒れた幼兒を取卷いた。

取卷いて、呼吸も吐かずに、顔も頭も一様に舉げつゝ、騎兵士官のせむやうを、ト待心で仰くと、近寄つて見ようともしなかつた。騎兵士官は、駒の尾とともに人々に背を向けて、トットツ



と乗つて行く。……狭い道である。あがきをつけて乗戻るかと思ふ間に、衝と塀の角の槐を曲つて了つたのである。

通りがかりの人数が増して、其時はじめて、ワツと一齊に聲を揚げた。

此の響が傳はつた時、……水に溺れようとした幼児の、母——母とも言ふまい、某の博士夫人は、東向の縁の藤椅子に豊艶なる身を柔々とかゝつて、スリツパの色も燃ゆるやうに踏みしだいた蹴出しの友染と、花壇なる紅薔薇——寒い國だから大きくも咲くまいが——其の薔薇とを見較べながら、恍惚と成つて、歌を案じて居たから偉い。

二

すぐに、翌日の新聞の歌壇には(水上の天使)とか題して、救つた騎兵より、救はれた我兒の方が價值のあるやうな、宇宙を斷層面で見せるとか言ふ、閃光的感傷の歌が十首ばかり、夫人の名に於て載つたのだから、また偉い。

此の博士夫人の偉い事は、なか／＼其のくらなるものではない。自分では着ても見ない衣服の新案から、糖味噌に蟲は湧いても構はぬ臺所の改築、室内の換氣法、細く言ふと温度の調節、庭園の趣味、美術、音楽、舞踏、演劇……ま、ま、少し待つて貰はう、傳説によれば、一厘の錢で

七種のぶつ品を、照手姫に買はせようとした大磯の長者さへ殘忍非道だとしてある。然るに……誰が何處から金を貸したら、そんな事が出来るだらうかと思はれる意見を、體のいゝ小姑のやうに、新聞、雑誌にべら／＼と饒舌る……狭い土地は土地だけの新婦人で——容貌、風采、黛、頬紅、白粉も白では濟まぬ、黄に、紫に、藍に咲いた社交界の花である。

が、歌は詠んだ。——少い士官が油車に溺れんとする兒を救つた——しかし、救はれたのが我兒である事は、當日のうちに夫人が社交術の冴で、八方へ手を廻して、新聞の記事は固より、博士の友人たちの口も見事に塞いた。——いくら才女でも、閨秀でも、兒を溺れさせようとした不用意、不行届を、書生女中にばかり責を負はせては、夫に濟なかつたからである。

「奥さん——」  
……夫の前は、小兒の發熱を風邪の分——お醫者様は二つ返事の——にして、小兒の介抱につききりの二三日は、交る交る使を馳せ、やがては言ふまでもなく自身で出向いた。夫人が謙吉の寓を訪ふことが再三に及んで、「戀をさへ感ずる」と社交なかまの打あけた婦の友には、内證で囁いたくらの情に激して、謙吉に對して、其の涙を落した時であつた。……

「奥さん……」  
奥州の飯坂では若旦那の、此の旅籠屋の息子は言つた。



「買被つては不可ません。——奥さん、……眞實の事を申し上げませう。」

「……………」

「僕は、貴女の坊ちゃんをお救ひ申したのではないのです。僕は馬から落ちたのでした。」

學校鍛の筋骨に似ず、産が旅籠屋だから、軍隊の他では、ものいひの丁寧な男ださうで……

「い、え、其が功に誇らない、謙讓の徳だなどとおつしやるから間違ふのです。——僕を坊ちゃん

の生命の親として、貴女が待遇に御苦心なさいますのがお氣の毒だ、打明けて申します。

あの流の筋は、上流には唯今頃、自然に杜若、菖蒲などが咲いて居る優しい水ですが、雷橋の

架つた彼處は一寸寂しくつて凄いやうな處です。——僕は此の土地へは、昨今、來たのですが、

軍隊に居ます上、強い脚が四本あります、半人半獣ですから、地の理はよく知つて居るのですが、

上流に菖蒲杜若の咲いたあたりは、遠い故郷の奥州の、僕の飯坂の町の水に似て居て、遙に細く

流れて居ます。

其の故郷の温泉の町を思ひ、水上の方を、馬の上で視めながら、傍見をしいくあの橋へ

かゝりました。……

水車小屋の暗い處に、紫陽花が二三輪咲いて居ました。凄いやうに綺麗です。一體、此の土地は陰氣な上に、水が清い所爲ですか、何處の紫陽花も、一寸類のない程よく咲いて、香も、あの

人の心を淵の底へ誘ひます、濡れた麝香のやうな深い香が芬と高いのです。が、水車小屋のは、色もまた特別でした——濃い藤色……藍とも浅葱とも、青いとも何とも言へない、いゝ色で……

其がです——

めつたに外出をしないで、奥深い處に居る、或婦の圓鬚の手絡にそつくりなんです。」

「はあ……」

と夫人は息を引いた。

「——奥さん、僕には遠い處に、戀人が……思ふ婦人があるのです。然も其の女性の半襟の色まで、ちらくくと目に映つたのです。」

其が、下倫の戀なんです、不道德、非人道——不埒極まるものなんです。實に……」

「いゝえ、それほど戀を遊ばす、其の強い、深い、お心があればこそ、あのやうな冒険がお出

來なさいまして、小さいのですが人間の生命一つ……神様のやうなお力です。」

と、ぼつと色を染めながら、細く襟を合せつゝ、夫人が言つた。  
——此が内々の話でないと、筆者は、此の時の夫人の、微妙な表情と艶媚な嬌態を細叙してお

目に懸けたいくらである。  
「お話をするのも憚ります。が、それについて、小兒の時、祖母から聞かされた、何か御經の中



のでせう、説教があるのです。——幼い時に、僕は母をなくしました。今は年紀の少い繼母ですが——往昔、天竺に、父には先だたれたが、母の寵愛を一身に集めた、幸福な少年があつて、花にも鳥にも何の不足もないのに、フト煩ひついて次第に枕が上らなくなつたのです。看護に身をつくし心をつくした結果、病氣の原因は、世にも端正な、其の母を戀ふるのだと分りました。——聖者、哲人、高僧の、教化も訓戒も更に驗がありません。——既に生命も風前の燈と見え、した時、ともに無限の罪業を覺悟して、しかし母は恥かしさに、其の兒を馬にたすけのせて、十里四方人影のない曠野の中へ出て行きました。……其の刹那に、足許の大地が裂けて、子の少年は、また、くまに吸込まれました。……無間地獄へ落ちたのです。母の手が髪にかゝると、一束ぬけて、白い指に残つたばかりで、少年を呑んだ地獄の口は見る／＼大磐石に鎖された、と言ふのです。

「詩ですわね、まあ……何うも歌の極致ですこと。」  
と肩も胸も刻んで應ずると……

「何か知りません。……が、紫陽花を見て、油車、鬼川、雷橋、地獄の光景を思ひますとともに……手絡、襟の色ばかりではありません。覺悟の身の、青いほどの顔、白い膚が見えました。あゝ、地獄！……」

僕は、嬉しさと痛快さに、足を踏んで墮ちたのです。」

「雪松さん。」

「……奥さん、貴女が、たゞ貴婦人、令嬢、まだしも博士の令室として、御訪問に成るのは……或は構はないかも知れません。しかし、坊ちゃんの親として、兒の母として……然う言ふ僕にお近づきに成るのは危険です。僕も我ながら危険なのです。」

「いゝえ、私は、私は、あの兒の母として、貴方のためには生命も……」  
と感激のあらはしに、袂も亂れて摺寄ると、……

「いや、何も貴女は、僕にお擔ひに成る恩はありません。——僕は地獄の快感を試みたばかりです。其處へ、目の前に、坊ちゃんが浮いたのです。——木の實が落ちたのだと思つて拾ひました。」

「まあ、木の實。」  
と莞爾して、

「ほゝ、皆さんが似て居る似て居るつて、あの坊やの事は——不斷から桃太郎だとおつしやいますのよ。」

「はあ、桃にしては黄色くふくれて居たですな。」  
と灰に卷草を突込んで、乾びたビスケットを頬張つて、



「僕は、すもゝ、巴旦杏……いやもつと大きい——眞桑瓜か、河童を祭る胡瓜かと思ひました。」  
——あとでは歌を詠んだであらうが、博士夫人の此の時の嬌嗔の如何を思へ。……油車の邸へ  
歸ると、肥立つたばかりで、よちよち帯腰に搦む……其の幼児の頭の捻向きざまに平手で撲つた。

菖蒲

一

油車は夏の事、獅子は秋で。——翌年、太陽の光の北國の青葉に漲る、五月初旬の話に成るが……年々の此の月の招魂祭と、開市何百年かに當る祝賀を兼ねた大祭があつた。  
一國の祭禮の集點は、例の公園と、其の地續きの小立野の練兵場とで、競馬、演武をはじめ、あらゆる演技のある中に、公園の大櫻に足代を組んで、筵がこひにして、何をするか、祭の日まで其の趣向を秘したものがあつた。大工も仕事師も、景氣よく、初手から蟻螂の踊るやうに、上りつ下りつ働いて居た。が、當日の午過ぎに成つて一度に四方の圍を取拂つたのを見ると、近山の嶺を越して、高く聳えた巨大なる獅子である。  
幹も梢も、左右へ二十丈に渡るのを、盡く毛布で包んで、毛の色々をあしらつて、頭は張子で

あらうが、巧に目を驚かすやうな青獅子が顯れた。  
胴中を横に開いて、うつろに、緋毛氈、青竹の欄干。廂には常盤樹の松の折枝、金銀の折鶴、五色の短冊、紅提灯を掛連ねて、花道をさへ拵へた。——此の舞臺で、七場所の藝妓の選ばれたのが踊を踊る趣向なのである。  
ふたが取れると、直に太鼓入の囃子が聞えて、世話人は紋着、袴で立廻る。……踊の番組が張出されて、手順よく整つた。  
前に、日露戦争の祝勝の時だつたか、一度おなじ事を、おなじ樹で、其時は大象を顯した。支那の年代記には、唐の代に凄しい電が降つて、其の形、或は獅子、或は象、或は豹、とあるさうであるが、此處では櫻の樹が象になり、獅子に成つた——目にもものを見たのは櫻で、何しろ鬱陶しい事だつたらうと思ふが、名木の迷惑や、また同じやうな趣向を、又か、と言ふものは一人もない。  
群集は、恰も凱旋將軍の鋼像の除幕式に臨むが如く、蟻に七彩のあるばかり、着飾つた男女は犇々と群つて、聲を擧げた。  
勿論、野天、——無銭で見せる。  
時に——此の獅子と、廣場を隔てて向合つた、木戸錢を取る見世物小屋が一つある。他にも多



いが、最も近く眞向うに一つある。

世界的諸藝大博覽會と、庵を上げて、黒川菖蒲嬢、特別出演と、高々と名告つた。

看板の見事さ、曲馬もあれば、輕業もあり、西洋奇術、印度魔法、猛獸も嘯けば大蛇も氣を吐く。いづれにも、洋装、和服、また半裸體の艶婦、美女を配して、極彩色に顯して、一座の鳴りものは轟き渡り、木戸番は二人左右で喚く。

「入らはい、入らはい、入らはいッ。」

「さあ。三國一ぢや、富士山ぢや。世界的ぢや——」

振袖の肌脱で、襷かけの小女が、看板下で拍子木を横ちよに敲いて、

「どっこい、どっこい、どっこいなア。」

「入らはい、入らはい、入らはいッ。」

「さあ、三國一ぢや、富士山ぢや、世界的ぢやあ。」

「どっこい、どっこい、どっこいなあ。」

二

其の朝よりして、群集は大櫻を取巻いて、唯そればかりに氣を喚られて、誰も見世物へは入ら

なかつたのである。

もう、圍がとれて獅子が顯れ、藝妓の踊がはじまつてからと言ふものは、看板を見ようとするものもない。其の癖、揉合ひ押かゝる人の背は、木戸を壓して、爪も立たない。が、皆向うむきであつた。

木戸番が、此の中で、土瓶の茶を呑んで、木戸の上で、晝飯の辨當を使つたのだから、其の閑なる事想ふべしで、まるで小兒一人入らない。

午後二時三時に成ると、じりりと初夏の煮えるやうな陽で、廣場一杯、凝つて動かない群集だけれど、數萬のいきれと、おのづからの埃に、朱い靄が一面に立迷ふ。

木戸番は、顔は蒼いが、あぶら汗を流して、危険性を帯びたか、言語も穩かでない。

「地震だ、火事だ、雷だあ。」

「親仁だ、むすこだ、錢なしたあ。」

小女は、それでも金切聲を振絞つて、

「どっこい、どっこい、どっこいなあ。」

「地震だ、火事だ、雷だあ。」

あゝ、自棄に成るな。——君たちにもよくない事がある。——いつか、殆ど此とおなじほどな、



仰々しい看板十二枚續きで、十二支に見たてて、子は鼠の曲藝、午は小原女の所作事などを、庵にかゝげて、相當な木戸錢を取つた見せものがあつた。

見物は押掛けた。が、中へ入ると、濕りくさい土間ばかりで、以上見渡しても、がらんとした河にもない。薄暗い片隅に古筵を一枚敷いた上に、尾頭のない鮫鱈のやうな皮袋が一つ。腐つた水でも装つたらう、ぶくり、だぶりとして据ゑてある、近づくものは、むかツとつきもどすほど血腥い、傍に古盥があつて、其の前に白湯巻の薄汚れたのを膝までまくつて、澁色の脚を出した、氣味の悪い婆々が一人。炬燵櫓に腰を掛けて、うとりくと坐睡をしながら、時々凄い目をあけて、じろりくと見物を睨め廻す……其のほかには、小屋がけの時の藁屑が散つたばかりである。イヤ、これは何うだ、と不氣味ながら婆々に聞くと、汚い指で、件の海鼠にも似た皮袋を指して、「血塊ぢやわいの——これを生んだ婦はの、血を噴いて、泡を噴いて、のたうち廻つて死んだわいの。」と言つて、又うとりくとする。取揚婆のつもりである。此では、瓢箪に金紙で目を貼つた河太郎、八木節を唄つて聞かせる小夜中山の夜泣石より性が悪い。土地でも、一分別あつて、聊かむづかしい親仁が、餘りの事に談判に出向いた。此の看板は何事だと、きめると、ものは形容でござりまして、とけろりとして居る。うんだものなら十月だらう、十二の干支は何うした理窟だ、と捏ねると、其處が難産で十二ヶ月めに産れましたで、出た時はアノもし血塊がね、手足で

駈出しましたよ。えへ、と冷ら笑つたさうである。

今度の小屋ぬしは、此を知らなかつたに相違ない。

まるで入らぬ。

「地震だ、火事だ、雷だ。」

「親仁だ、むすこだ、錢なしだあ。」

「どっこい、どっこい、どっこいなあ。」

獅子の屋臺は、遠音ながら、却つて景氣の眞盛を思はせる、三味の調べ、常盤津と、長唄のかけあひで、さながらの櫻の幹へ、墨染の精が、緞子張の中へ、薄萌黄に、ほんのりと顯れた。

群集は大波の崩る、ばかりの喝采。

「勝手にしやがれ、願が干上る。」

木戸番が聲を合せた。

「畜生、恚うなりや人殺した。」

「もう、殺せ、殺してくれ。人殺しい。」

「どっこい、どっこい、どっこいなア。」

小女は最う聲もすがれて、身體を横ねぢりに捻向いて、白い目で、群集の頭を見据ゑながら、



疲れ果てたか片足を舉げて、倒れさうで、拍子木もしどろに成つて、

「どっこい、どっこい、どっこいなあ。」

「澤山よ……」

と幕を絞つて、すつと、看板下へ顯れた婦がある。白粉も紅も濃い、肉づきの豊かな、しかし撫肩で姿がいゝ。高島田に突通し、籠甲の櫛笄は、花嫁づくりかと思つて、燃立つやうな緋縮緬の長襦袢に、帯もしめず、ふはりと肩に掛けた抜衣紋に其の紅を迂らして、紫鹿子に金の切箔を扱つた幅廣の半襟を掛けた、お召縮緬瀧縞の袷は、おいらんの部屋着姿とか言ふのに其の儘である。けばくしく媚めいた態で、出た時、やり放しに白脛をさへ見せた。

緋縮緬の股へ、其の小女を、肩を抱いて、ぐいと抱へ込んで、

「くたびれたらう、——可哀相に……」

小女は、其の婦の乳の下へ、おかに額を附着けて、拍子木を持つたまゝ泣出した。

「弱蟲。」

と二つばかり背を軽く叩きながら、こゝみかゝつて居た腰を、小女の肩を力に、ついと伸びて、むかうに霞んだ獅子を視ながら、波打つ群集を、瞳を大きく、ちつと見た。

目を伏せて、

「おいで。」

と裾を捌いて、ひよいと、緋の片膝でしやがむと、忽ち幕に消えた。

小女はベソを搔きつゝあとから潛つたのである。

すぐに、右の木戸口へ来て、其の婦が細く立つた。最う襟裏を返して、其處も瀧縞に成つて居る。白粉あとが此の方に稍目立つた。

籠甲の照のまゝ、そして、目ばかりで外を見た。其の鼻筋にいきれればかり、群集の尻は、向うむきに押詰るばかり居るのである。

いまの間に、頤ぢうの髻ものびたやうに、汚い面に成つた、木戸番が、

「……太夫。」

と言つた。

「……」

「菖蒲さん。」

「……獅子にや敵はないかね。」

「魔が魅しましたぜ。」

「どツちが魔なんだか、ふん。」



と言ふと、白い顔で、軽くしやくるやうにした時、鬢が片一方深く入つて、半面を暗く、些と大きな朱の唇でニッコリ笑つて、衝と小屋を深く、穴のやうに入つて行く。

### 十一二騎

五分もおかず——菖蒲——此の女は、小屋の裏木戸の筵を撥ねて、公園の池のふちへ一人で衝と出た。

其の縞のきものに、朱緞子の帯をお太鼓にしめて居る。それに、笄を抜いて、島田に突通し一本、裾長に長襦袢を揃いて紅色のスリッパを素足に突掛けた、判断のつかない態で。——其處まで立餘つた夥多しい——群集をよけつゝ、なりたけ池のへりを、今にも落ちさうに摺つて通つて、公園の裏手に當る樹立へ入つた。

こゝは晝も目を遮る木下闇の、例の木立林のつゞきに成る。つゞいておなじ茂の中に、幅の廣い坂がある、小立野の裾が町へ擴がる處で、妙な名だが、尻垂坂と言ふのである。一寸峻い。見通す町は、蔓を組み、塔を築いて、其處に、市役所、縣廳、高等學校、師範、外國語學校などが建つ。片側には目貫の商店が棟を並べる。一般に縣廳前、廣坂通りと稱ふる廣小路で、霞

が三筋、電線が千本の場所。市の文明の淵源地で、坂の上から望むと夜が明けたやうで、下から坂を覗くと日が暮れたやうである。譬喩は穩當でないかも知れないが、これは、公園に取つては青樓の裏階子で、表座敷が賑かなほど、うそ寂しい。……

廣坂と言ふ、表階子のなだらかな坂が並んで別にある。人々は押合つて其處を通るので、尻垂坂の方には、さすがに今日の事で、人通はないではないが、ちらほらと疎である。それでも時といひ、場所といひ、祭の興はたけなはに、あれ／＼あの花火の音、太鼓の音、一人も下りて歸るものがない、坂の上の梢から、緋縮緬の裾を魔の火の如く枝にからめて下りて来る。……

片手を投遣りの懷手に、片手を袂を横に引いてつゞ込んで、お手玉か、手鞠か、無邪氣に大事にしたやうな風情で、其の癖、島田で正面を切つた處は、いゝかげん中年増なのが、裾も爪さきも忘れたやうに、ふら／＼と小田原提灯のぶら下つた状態で下りて来た。

此の女が、坂の下に、廣小路の取着の辻に立つと、忽ち黒山の如く人が集つて取巻いた。妖艶な女は一人ばかりではないから、其のためではない。立停まると齊しく、——袂から大な蛇を出して、ずりと首に掛けたからである。

蛇は鼠色に、黄味を帯びて、どんよりと光つた。

「餘り附着いちやあ不可ませんよ——毒蛇ですから。」



菖蒲は皓齒で、紅い唇を翻して言った。

「廣告ですから木戸銭は要りません。其のやはり口上なしですよ。尤もおあとで投銭は澤山に願ひます。口上なし……可ござんすか、はッ。」

と言ふと、蛇は掌に鱗を疊んで、圓くとぐるを巻いて居る。胴のうねりは外へ溢れさうに、ずるりと重い。

「早蕨。」

と聲を掛けると、其のまゝ首を伸して、一尺ばかり巻きほぐれてぬるりと立つた。

「一本竹。」

と掌の蛇に瞳を据ゑて、扇子を取りたさうに帯を片手で探つた、が、其はない、唯、袂を取つて軽く煽いだ。

「はッ。」

中指に尾の尖ばかり僅に残して、腕を立てて、眞すぐに立つた。

胴中を、一寸握つて、右の手の甲へ取つて引懸けると、尾と鎌首がするくと下る處を、

「綾取。」

と幾つもく、両手にかけて自由に結んだ。

忽ち一握の團にして、

「道成寺怨の鐘入——。下座が欲しいね…… TENTツ、ン、TENTツ、ン。」

と地へも落さず宙でついで、トンくと撓はせながら莞爾すると、

「お手玉。」

すぐに二三尺、空へ投げて、口と瞳で空を撓めて、

「お一—お二—お三—お四……お五—お六、お七つざくら、さくら、さくら……」

町の果の、柳の地平線へ、一脈の煙が低く立つた。ぱつと軒に、合歡の花の咲いたやうな前立した帽が揃つて、騎兵が凡そ十二騎、一列に駒を揃へて、靜に、しかし見るまにトトトと近く寄る。

群集の肩にたてがみを浮かせて、龍の泳ぐが如く打つて過ぐる處を、故意か、いたづらか、發機か——實は後でこの婦の言つたのでは、一行の揚々たるに對して、むらくと反抗的の衝動で——蛇は菖蒲の拳を離れて、空中に高く、陽を浴びながら逆に白晝の流星の如く牙えて黒く飛んだ。

落ちかゝる……線が伸びて、ぶるくと腕を縦に打つたが、一度、雁がね結びの輪に成つた、首の尖つたのがするりとまた横に伸びつゝ、火花から出たやうに、しかし矢の如く垂下するのが、



「きみをか——ね。」  
「さあ、一思ひに殺して頂戴よ。」

「何うすれば可いのですか。」  
「一思ひに……殺して行つておくんない。」  
「いゝえ、離しません。どうせ生命の綱が切れたのですから。」  
「放したまへ。……何うも仕方がない。」

「ほう。」と驚いて隠居は退つた。  
謙吉がまつすぐに、右手を伸すと、何か合圖と見える。……馬をのり鎮めて居た十騎ばかりは坂へ靜に乗立つた。

「あ……怪我どころですか、此方が生命がけです。」  
と片膝を土について、島田を馬の頸の下へ、はらりと坐つた。

「あ、これ〜お女中。」  
「……」  
「たへつゞきの、綱を切つて、何うするのよ。」  
杖を搔込むが如くについて、袖の紋つきの上に、袖なしの肩衣を着た、耳に淨土數珠を掛けた禪門のお爺様が、皺手を片一方大きく開いて、遮るやうに、些と胸を反して腰で寄つた。  
「あ、これ〜お女中。」

むかしのお土らしい口吻で、

「女中や、これ、……尻垂下の此の辻は、むかしから馬に觸のある場所ぢやぞ。……魔の魅す

處ぢや。これ、私が覚えてからも、馬が二度倒れて、女中が三人蹴られたわい。さ、さ、さ、怪

我せまい、此方へござれ。女中と言ふに。」

「あい……怪我どころですか、此方が生命がけです。」

と片膝を土について、島田を馬の頸の下へ、はらりと坐つた。

「ほう。」と驚いて隠居は退つた。

謙吉がまつすぐに、右手を伸すと、何か合圖と見える。……馬をのり鎮めて居た十騎ばかりは坂へ靜に乗立つた。

「放したまへ。……何うも仕方がない。」

「いゝえ、離しません。どうせ生命の綱が切れたのですから。」

「何うすれば可いのですか。」

「一思ひに……殺して行つておくんない。」

「きみをか——ね。」

「さあ、一思ひに殺して頂戴よ。」

狙が巧いに、列が一寸續くから必ず誰の騎士かの首肩を嫌ふまい。……ソレ恰も一騎の眞上と見

る時、一員の士官の手が直刀に掛るや否や、屋根より高く空を掬切に、胴中から颯と斬つた。

菖蒲が、スリツパを投げて、白いすあしで、する〜と出る。群集は固より蛇の軀の遠く別れ

たほど飛んで雪崩を打つたのである。

曲馬も成らう。恐氣もなく、菖蒲が馬の前にすつくと立つて、もの凄くニヤリとした時、騎兵

は鞍上にきらりと白刃を翳して、切尖を長く、秀でた眉に刃を撓めてぢつと視て居た。

渠は雪松謙吉であつた。

よこれも見えず、膏ものらぬのか、拭も掛けず、びたりと鞆に、ガチリと拍車を鳴した時、女

は袖を翻して轡頭を丁と取つた。

「士官さん。」

「……」

「たへつゞきの、綱を切つて、何うするのよ。」  
杖を搔込むが如くについて、袖の紋つきの上に、袖なしの肩衣を着た、耳に淨土數珠を掛けた

禪門のお爺様が、皺手を片一方大きく開いて、遮るやうに、些と胸を反して腰で寄つた。

「あ、これ〜お女中。」

「……」



「分かりました。人を殺すのは……」

と、軽く馬上に頷いた。

「踏殺しませうか、蹴殺しませうか。」

「え。」

「踏殺すのは、此のまゝで前脚を上げれば宜いのです。しかし甚だ引立たない。何うせ僕も一人殺すのです。花々しく蹴殺しませうか。」

「は、何うぞ。」

「では、お立ちなさい。」

「はい。」

同時に、後背狀に馬を引いた。をがみを見せて一町餘、輪乗を掛けつゝ、颯と返すと、埃も立せず、苦笑した面を爽かに澄しながら、八間ばかり距離を置いて、四尺の菖蒲を軒越に、馬を躍らせ、島田鬘の上を驪然と飛んだ。

眞一もじに、坂を攀づる。……丁ど上り口だったので其十騎とともに、人なきあたりを二列に組んで、龜甲形の波紋に寄つて、木下闇へどつと入ると、ひづめの音が遠く響いた。

「まあ、生意氣だ——嬉しいこと……」

と、おくれ毛を風に拂つて立つた時、小女が来て、其の裾、袖のほこりを拂つて居た。

其の晩から、菖蒲の一座は大入であつた。

まことに此の一座は、底に怪しく麗はしい蛇性を潜めた古沼の浮草である。その、もの凄く艶に咲く——藻の花は、たゞ水のまゝに流るゝばかりでない、風にまかせて大空を諸國へ飛ぶ。

幾度か、東京へも出沒して来て、その時々根を這はして漾ふのであつた。

### 郊外の寮

一

半込神樂坂の藝妓家に親類——色情的の語彙ではない、——親類を持つ男、が堀の内の妙法寺の在方に居る。親類だけに、餘計念いりに掃除もすれば、親類だから、その手で茶も喫むし猪口も持つ。婦どもは少からず恐怖をなすさうである。が、民衆の意義に對して不心得な次第である。彼は角四郎と言ふのだが、汚穢角とも掃除角とも言はれないから、陰では田子角、田子角と言ふ。……藝妓屋へ内端へ出入をする處から、土地第一の色師で、裏田圃の夜歩行には、やつし身の羽織なしで、羽二重の絞の帯を幅廣に胸高に占めて、袂にキレー水を心得ようと云ふ青年である。



——近頃、湯屋、床屋などで、専ら風説するのは、目の覚めるやうな綺麗な女が、東京から入つて来て、時々妙法寺お祖師様の裏路から、薄の中へスツと消えて、行方知れなく成ると言ふ。いつ頃から言ひ出した事かは分らぬが、此の怪談じみた沙汰は、自然の景色が調つて、あの邊は誰が歩行いても、二三問さきは影も形も隠れるほど薄の脊が高く茂るのであるから、秋の末頃に成ると、夜は長く話が發奮むのであつた。

誰も跡を尾けて見たものはない。其の消えるのは三叉の暗がり坂を細く蜿つて大藪の下を潛つて、奥の方へ、ぼつと煙のやうな薄原へ、スツと消際に、裾がほんのりと女郎花桔梗に成つたり、袖が幻の黄菊白菊に見えたり……秋の草花が化るのでない、姿が花に紛ふのだと言ふ。

三日前だつた——お會式の、あの夥多しい群集の裡を、何と、洪水の渦を澄して、鴛鴦が泳ぐやうに、年紀の少い美しいのが、二人、例のお化が一人、然も三人連で、すつ／＼すつ／＼と萬燈の中を縫つて、いつもの方角へ、眞暗に成つて星の化身の如く消失せた——尤も此は語り繼ぐ筆者が少々修飾した——土地の風説では化身などとは言はない。狐だらう、いや、獺だらうと言つたのである。

「一人は女優だよ。」

「すんなら、少い……もう一人はよ？」

「お茶の水か何處かへ通つて居る。こりやな女優の姉妹だ。」

如法の賑のあとだから、この四五日は分けて寂しい、堀内村の用水べりの暗がり、馴れた足で、二人づれで歩行しながら、此の説明をするのは田子角さんである。

「的等、何でも手の届かねえ、目の及ばねえもんだと言ふと化ものにしたがるだ。是即、高い山の櫻を見て、霞と言ふやうなものです。はあ、其處へ掛けちやあな。」

神樂坂の藝妓屋に親類のある田子角だ。

「籬染子——可いか、その女優の名まで知つとるだ。おまけに雑誌の口繪から切抜いた寫眞まで持つとるが何うだてば。」

「見せなよ、よ、見せなよ。」

「暗闇だ、何が見えるだい、お前も矢張り、いゝ加減化もの扱にするでねえかよ。」

「マッチがあるでな。」

「馬鹿を言へ、此から内證で行かうと言ふのだに、面の前でマッチを摺つて何うするだ。いまに正のものを見せべいよ。」

お斷り申すが在郷軍人や青年團に恚う言ふのは、決してない。此はたゞ色身な村の若衆に過ぎぬ。



で、尙ほ田子角が、足許にさら／＼流る、水の音をあしらつて、密々と云ふのを聞くと、時々見かけて凄いと云ふ綺麗なお化は、博士で子爵たる宇多川氏の夫人で、邸は麴町邊にある。其の子爵は兩三年、洋行中ださうで、夫人は派手しやの交際すき。此の處、女優が最負で、後援者と言ふ位置に居る、と言ふのが、四谷須賀町に或將官の未亡人で、生か飯坂だと言ふ。(註、此の將官は雪松の息、謙吉に別に關係はない。)茶の湯活花を教へて、靜に世に處する賢女がある、女優たちには親戚で、其處に一所に居て、保護され監督されて居る。……と子爵夫人は、宗遍流と池の坊の弟子と言ふ縁さへある。

子爵家の別荘は、立派なのが湘南に別にある——堀内村のは、たとへば新鮮な野菜ものを得るのと、四季の草花を培ふためばかりの意味で、「玉菜苑」と稱して、故と田舎家づくりの茅葺の簡單な寮に過ぎない。其の癖、地處は密林の丘を控へ、大藪を抱き、水田に展けて居て、通りがかりに見たのでは何處に家があるか分らない。かこひ内に入つてさへ、一町ばかり自動車處か、畦を傳さへ通らないのだから、或場所まで堀内の要所を來ると、あとはおひろひで、そして薄に消えるのであつた。

お會式の夜、はじめて、女優と、其の姉妹の娘を、此の寮へ連れて來た。

處が、女優に一方ならず氣に入つた。眞に人里を離れて居る、閑靜で可い。某劇場に上演する、

今度の劇の持役の臺辭を覺えるのと、出の工夫をするのに、尤も初日も迫つて居る、舞臺稽古も明日と言ふ今夜、周圍も、人氣も、交際は小さなお會式ぐるる激しい中から、靜に下稽古を練りたいと言ふので、玉菜苑に、確に來て居る。

此處まで、突留めて來た田子角が、一つ穴の友を誘つて、此から覗きに行かうとする途中なのであつた。

二

「大丈夫だよ。」

「然うか。大丈夫か。」

「唯の娘を覗くと違ふだ。——酷く喚かれて捉つた處でよ……演劇の稽古事を透視きに來たと言へば事は濟むだ、先方も人氣家業だで、穩に濟すだな。」

「お、其だ、其だ……前度おれが、お寺前の源氏節芝居を見に行つたと思へ。——便所の勝手を間違へて、筵を敷いた土間の横手さ板戸を打開けると、鼻の尖に、浴上の女が立つてるだ。胸が打つかりさうでねえか、お前ら。俺あヒヤツと思ふと、御免遊ばせ、と言ふのだ。其の婦がよ。……成程……藝人だなあ。喚かねえで反對に挨拶するだ。はあ、此の道理だ。其時は、俺あじい



りじいりと視ただがな、花形のそれが巳根八だあよ。」

「や、われ、巳根八の膚を視たか、うめえ事を遣つたな。何か、平人間にかはりはねえんだか。女役者でもよ。尾でもはえて居ねえだかな。」

「う、幅の廣え、眞赤な尻尾がちらつと見えた。」

「畜生め。」

「今夜のは何うだらう。」

「馬鹿を吐け、源氏節が町人なら、女優と來ては大諸侯だ。」

「それがよ、矢張り裸體で居べいか。」

「馬鹿を吐け——今時行水でもあんめえし。」

「だつてよ、稽古事だら、衣服さ脱ぎもすべい……着もすべいや。」

「當前だ。」

「ほう、堪らねえ。」

「や、落ちめえ、足許は川だ。」

「角さん、此の道は、——これは、はあ、何處まで行きても、田圃だぜな。」

「直き其處に、一本橋が渡してある。」

「お、板一枚ばかりのや。」

「ほんの串戯に、奥さまたちが褻を取つて、ちろりと渡る假橋だ。向うに水門とまではねえだが、此の春、底を浚つて綺麗にして、玉川砂利を入れて、菖蒲河骨などを植ゑつけよ。切込の段がある。……其處に、一枚戸の竹の木戸があつてよ、跨いでも入られるだ。」

「よう、探つたな。」

「赤穂の義士だぞ、矢頭右衛門七、繪圖面取だ、——そらく、そつと、そら、水の音がひたひたと違つて聞える、石段を打つのだ……待てよ、橋が。」

と心得たもので、踏外した時の用心に、尻を、七のづまでぐいと端打つた。

舞臺面にしても、こゝで、向うに遙にも描割の灯が見えると張合があるが、三千坪の内でも、一番寮の構に遠いから雜樹ばかりで何も見えない。

鳥の翼のやうに、波を軽く、すつと打ち、すつと、打ち打ち、流るゝ水の、水あかりに橋を透して、田子角は、ぎよつとしたやうに畦へ退つた。

「何……だ。」

「叱……」

一本橋の上に、泥を束ねたやうに、黒く伸びて、平だけれど蟠まつたものが見える……



「犬か。」

ひそめた聲で、

「犬でねえ。」

「どれ見せろ。」と同じく高端折を遣つた友の男が、草履の先で、そつと觸つて、

「衣、衣もののやうだ。」と、後もどりして耳に囁く。

「人間か、はてな、行倒れにしても、水の上へ橋になると云ふ理窟はあんめえ、洗濯ものでも引掛つづらえ、待て、密としろよ。」

と入交ると、棒切れを探す算段もなく、ものの汚さ氣味悪さなどの差別はないから、四這に摺出して、手の尖で當つて見た。

「わあ、冷い足だ。」

「死骸か。」

「お、よ。」

「まさかにな。」

とびつたりと二人くつついて、無言で一息吐いたと思へ。帆柱の如く棒立ちにヌツと橋の上に突立つた。

いや叫んだ處か。遁げた處か。あとで此二人が言ふのを聞くと、大入道の丈は凡そ一丈餘り。

比較して、あの渺々たる水田の中に遠く立つた、高壓線の蓄電機ぐらゐの丈があつたと言ふ。……

が、時に、田子角等、二人の形が、暗夜に飛んで胡麻ほどに小さく成つた時、丈は凡そ一丈餘りと言ふ、其の大入道が、水の上で、

「ふ、ん。」と笑つた。

三

「媼さん、——一寸見廻つて來るで、——大事な嬢様方ござらつしやるでの。」

と、寮の臺所口、最う閉つて居た——外から聲を掛けたのは、大庭嘉傳次と云ふ親仁で。此は

子爵家で新に造つたぼんぶ仕掛の井の見事なのを、横手へ離れた小屋に住む、もと此の地所の持

ぬしたが、以前競馬の盛つた頃、ふとした心得違ひから目黒の競馬で大損をした。家も地面も恠

る體に成果てたが、寮守と言ふのではない、些とばかり賣残した片隅にお螻の巢を造つて居る。

忤一人は兵隊さん、一人は東京の工場へ出て内には居ない、嫁もない。——寮に取つては、眞に

重寶な親仁である。

をかしたことはない、また此の親仁が、博士で子爵たる寮ぬしの用を足すのを、大なる名譽と心



得て、それ、夫人おいで。お出迎へ。お茶が入つた。お相伴と言ふ度に、衣ものはどんつくでも必ずともに嘉平治平のよれくの袴を穿く……何處で聞いたか、家扶、家令、三太夫などと言ふお邸言を覚えて、而して自ら任ずるのである。

——實は今夜は、來る時は夫人が一所だつた。が、翌早朝親類に法事ごとがあるため、他事とは違ふ、且つ、出入りに乗ものの利かない處であるから、泊つては朝の間に合ないので、此の夫人が居ると、西洋種の現代劇などは、原書に合せて後見して、臺辭廻、仕種などは、年紀少女優の苦心慘愴よりは、習ふに早く、教へるに安しだつたが、遺憾ながら、晩飯の御馳走を懇に濟したあとで、あとを深く注意して歸邸した。あ、又此の夫人さへ居たら、世馴れた經驗によつても、備はる權威によつても、別に何事も起らなかつたであらうのに——

嘉傳次はくらやみ坂の藪の外まで、即ち袴一着で、提灯をつけて、夫人を送つて歸つたので……一旦脱いだ袴を此の時、此處でまた穿いて、横木瓜の提灯をつけて、片手に弓の折とも言ふ處を、うまれながら農家ゆゑ、鋤を持つて小屋から出た。

間は離れたが、小川べりの怪しい人聲を探究するためなのである。

處で、此處に、お媼さんと言つたのは……彼の老女房も同棲して居るが其ではない。別に寮に使はる、婆やなのである。

讀者も、略御理解と思ふ、女優、籬染子は銀山閣の薫である。お茶の水とかへ通ふ其の姉妹と言はれたのは、言ふまでもなく三葉子である。——飯坂の物語から、こゝに移つて五年経つ、薫は十九。三葉は十七の今日今夜、宇多川夫人の此の寮にいま居るのであつた。

夜は暗し、靜寂。

コッソソと鋤をついて、六十七まで、生れてから住通すわが地面の見當は晝の如くに分る……變な聲は、近頃出來た水門口と、遠くから聞かすまして、流を引いた池について、萩のトンネルのあとを潛つて、牡丹島、秋草の畦、菊、ダリヤの園、桑の木で仕切つた背戸道を縫つて、やがて流は近い、蜜相晶の前を通ると、被つた古もの中山高帽に、眞黒な雲が掛つて提灯がパツと消えた。

途端にきらめいたのは短刀の光である。嘉傳次は聲が出なかつた。

「人を殺すことは、俺は汝たちの掘る芋だ。聲を立てるな。……脱げ。」

ごそりと剥いで、兇賊は裕々と其の布子を着て、袴を穿いた。引剥がれた嘉傳次の、肌襦袢一重で震へて拜むのでもなく、めりやすの襯衣一枚でぼかんとして居るのが、をかしくない、可哀相であつた。



うつくしい犠牲

一

もとの地主の、此の兇行に對して殆ど無抵抗であつた事は、次の事實で猶よく分る。——賊は嘉傳次を引剥いで、袴と布子で身拵へをしたあとで、

「大口を開くんだ。……あんと言へ。」

「あん。」

藁を束ねて、猿轡とか云ふ古風なものを啖はした。蜜柑の霜除に使つた繩をかなぐつて手と足をちよきんと結んだ——其のめりやすの古襦衣一枚の親爺を——朽木倒しに轉して、且つ霜除の筵をすつぽりと被せた。裡で身悶えをすると、臍から納豆の絲を曳きさうな形になるまで、頭の中山高帽を振落しもしなかつたのであるから。

流の水はさらさらと響く。

「ふ、ん、田螺の蓋をもぎるやうだ。」

と齒を見せて嘲笑つて、其の帽子を取つて目深に被つた。其から——はじめつい其處の一本橋

に俯向けに寝て居て、突然蟲乎と立つて、偉なる魔ものの如く田子角等を驚かした時は、何を着て居たか知れないが——袂から燐寸を出して提灯に灯を點けた。頬被をして居る。目の鋭い、色の青白い奴で、た、み目を上へ引上げる提灯の紋の横木瓜に、ふつと暗く映つて、最う見えぬ。起上つたのである。

其處で鋤を拾つた。

コツ／＼とついて、嘉平次平の袴の縞を映しながら、梨畠へ影を浮かせて、コツ／＼と母屋の方へ行く形が、嘉傳次に其のまゝであつた。

苞の田螺よ、嘉傳次よ。いまは子爵家に賣渡したとは雖も、此だけの大地所の持主ではなかつたか。三千坪のぬしと言へば、此が、墓でも、蟻でも、蚯蚓ほどの小蛇でも、黙つて恚うされるのを視ては居まい。

這個兇漢が襲ひ行く……田舎づくりの、寮の中には、若い美しい娘が二人、對に巢籠つて居るものを……

頃刻すると、洒落れた茅屋の軒下に、ひた／＼と露を踏む二つ三つ潜めた蹙音をさしたが、がたんと音を立てて、賊は憚らず水口の戸を開けた。土間を廣く取つて、半圓形に土竈が築いてあつて、鐵蔓の大きな鍋と、光つた釜が並んで据つて、竈口に燃えさしの火が薄赤い。まだ臺所が片



づかないらしい。此の注意からであらう。……寒いのに、框の障子が一枚半ば開いて、其處から寮守の媼さんの、丁ど押入から孔雀を抱下す風情に、羽二重綴の夜の調度を抱出して居る、着膨れた半纏の背中が見えた。

「姉様——お先へ……」

三葉子が、ぱつと、時雨に明い錦木のやうな緋の麻の葉絞の長襦袢で、水の流の遠い聲を唱歌のやうな合方に、電燈の火の沈んだ静寂に、いま閉めようとする襖から覗いて言った。

雪松薫の、女優染子は、脇掛窓の小机に電燈を引寄せて、此は飛模様の盛装で、小型のノートを控へて、凭かゝるやうにして、書拔きの臺辭を、ペンで、緑と紅のインキを使つて、うけ渡しの區別をつけつ、細字に寫取つて居るのである。恚うして覺えながら、仕種の工夫をするのだと言ふ。

此の時の、西洋種の劇の題と、染子の役は分らない。略分つては居るが預つて置く。……容色と言ひ、實家の後楯と言ひ相應の地位を占めたには相違ないけれども、未だ某劇團が、此の一枚がなくては、幕を明けられないほどの事ではない。勿論、女優の一代の記録に残すほどのものはなかつた。

しかし、演劇は一人では出来ない。持役に對手がある。だが内だけの下稽古だから、お茶の水

がよひして、一向芝居氣のない三葉子に、對手の臺辭をつけさせて、もう些と前まで遣取りをして居た。尤も新しい劇であるから、女優の役は女と極つて居る。で、あの伊左衛門の時などは違つて、對手に成つた三葉子に男の假聲も使はせて、一寸弱らせなどもしたし、叱りも、焦れもしたのだつたさうである。

あとは仕種を考へながら臺辭を語記するには、却つて一人の方が、氣が澄み、身が緊つて可いと言ふので、三葉子はさきへ——此のものの數寄に、故と窓も低く眺へた——六疊の小座敷の次の室なる、玉菜苑夫人、即ち子爵の室の化粧部屋で小袖を脱ぎ、帯を解くことになつたのである。が軽い羽蒲團でも、力業の上下しには呼吸の發奮む蒲柳の質でありながら人を使ふのは嫌な娘で、昔ものの媼さんが見て居て「お、お能役者の土用干でござりますの。」と言つたくらる。華やかな蒲團を、自分で抱いたり抱へたり、で、化粧部屋へ床を取ると、大分夜風が浸みて來たと言つて、小搔卷を女優の肩に被らせた上で、いま其處の襖際で、おやすみなさい——を告げたのであつた。

「明朝は起してね——私は朝寢だから。」

と女優が言つた。

「はあ、そのかはり用がありましたら、起して頂戴、私は横になると、直き寝ますから。」



薫は黙つて、机に凭れたまゝ、珠入の櫛を兎乎と頷いた。

「お先へ……おやすみ。」

と軽くつく膝、頸の白い後姿が、六尺の大姿見に映つたと思ふと素足をちらちらと襖の陰へ、吸はれるやうにスツと隠れた。

薫は又黙つて黙首いた。

——此は言ふまでもなく、水口を窺つた兎漢の目には入らない。——寮はすべてで、四室あつて、化粧室に並んだ其の六疊と、中に横廊下を一寸隔てた茶間の其處に媼さんが控へるのだが、三葉子のもう聞へ入つたのに誘はれて、女優の方の寢床を設けた上で、臺所を見廻つて、それでお先へ御免と言ふ腹なのであつた。

處を——兎漢は、中山高帽を故と後へ引きつゝ、横木瓜の提灯をぐいと舉げて、土間の上へ突出した。

無論、媼さんの目に黒胡蝶の如く、其の紋が入つた。

「おや大庭さん。」

と不斷見馴れた嘉傳次の、其の袴に聲を掛けると、蜜柑畑から黒い影を曳いて來た魔性の嘉傳次は、其の影に角が生えたやうな指を伸して、おいでくと、仕方、慥う、さしまねく。

唯、抱へた小夜具をトンと置いたなりで、見透す狀に、ひよこくして、七歩までは數へない。すぐ框へ來て覗く處を、五歩ばかり提灯があとへ退つて……又招いた。

誘はれたやうに、媼さんも、妙に押黙つて水口を扉へ出た。其時は提灯が、地境のポンプ井戸の處に立つて、もの置の陰をうけた暗い中で、手が又朦朧として招く。

「お茶かの、茶の子かの。」

と、くひしばるやうな低聲で言つた。小屋の老夫婦は、几帳面に返辯をしたがる癖に、妙に遠慮しつゝ、一寸々々時借をする事がある。今夜今頃、向うの畠の尼寺の尼さんでも夜話に見えた臨時の用途だらうと、然う合點した媼さんは、今しがた同じ親爺が、裏田圃の方へ、可怪な人聲の見廻りに、故々聲を懸けて行つた事などは、空の星の澄んだのと、流の音の靜さに、もう氣にもしなかつたのである。

で、何時の間にか、嘉傳次の形に並んで、小股ですたくと地境を通過して、生垣の切戸から、一所に小屋の戸を二人で入つた。

「爺さんかの。」

と内から呼んだ。

忽ち寂然としても音も聞えない。此で大抵想像はつかうと思ふ。……あとでは、五十九と、



六十二の婆々が二人、堀内在の小家の隅に、干鱈を合せたやうに押重つて、目ばかり動いて煤の中に喘いで居た。

魔ものの嘉傳次の舉動を見よ。やがて灯なしに、切戸の外へ顯れると、寮を睨んで、身ぶるひする如く肩を縮めながらスツクと立つた。中山高帽は黒い毒蛇の宛如の口である。

二

「憚りですこと——媼やさん。」

薫の染子は、此の時も振向きもしないで、一寸聲を掛けた。襖が無造作に開いて、背後で寢床を敷設けるのを、若い女優は、媼やがする事と思つたのである。肩に掛つた友禪の小搔卷は、片落ちて紅羽二重の裏が翻つて、香の濃い室咲の色を誘ふ。此がふつくりとして滑かに白い襟脚に映る状は、白鳥の翼に眞紅の冬椿を縫留めた風情がある。——女優も、閑靜で此の上もない修練處だと言つて、此の寮を望んだ一つは、恚うするの、持主の玉菜苑夫人の意を迎へて、眞眞を彌が上に強うする……底意は知れても害のない、悪くは取られないほどの——一種の方便でもあつたのだが、時刻も、場合も、もう此處へ來ては、語記をするのに專念で、肩へは、其の搔卷が迂り、額へは、前髪の亂るゝのも知らないで、机に乗掛つて居たのであつた。

ふと脊筋を襲ふ楚音に氣が潮して、ペンを持つたまゝ、軽く振向くと、袴の腰を居合づきについて、一寸凭掛つたら脇息ぐらゐの高さのある二枚かさねた羽蒲團を、布子の脇で、大輪にづいと伸して居る大庭の嘉傳次。然も何と言ふ事だらう。小枕淺葱の塗枕を片手で驚掴みにして居た。

「あら、大變。……」

襟脚を縮めるとともに、ぞつとしたやうに、圓い白い手を肩越に、搔卷を引しめた。が、別に驚いたのでも、怖れたのでもなかつた。見知越の小屋の親爺で、其の袴を穿いた處は今夜宵にも見て知つて居る。此の自ら任じた三太夫の薄惚けた事は、現にソレ帽子を被つたまゝで床を取つて居るのでも分る。……とした處で、親爺が入つて、若い娘の床を取るの、希有と言へば希有だけれど、女優の實家は旅館である。男衆の、時に床番に廻るのは怪まない。大方、媼さんの何か手扶けに來たのであらうと思つたが、ぞつとするまで弱つたのは——薄汚い……あの枕は、あのまゝでは不氣味で寝られぬ。枕紙を取替へよう、面倒だから、あとで、寢て居たら三葉さんを起して頼まう。……

「——夜は更けました……あゝ、目は暗い、しかし心臓は紅い——」と澄し返つて、書拔きの臺辭を寫した……か、寫さないかに、其の赤いインキが、パチ／＼と眞赤な魔に成つて撥ねると見つ、もの凄く衝驚した。



「お床が取れました。」

三

「お嬢さん、お休みなさい。」

「あ。」

「師匠かね……横になんよ。」

と言つた。

女優は既に兇漢の膝に、背後抱きに、脇の下から抱倒されたが、キヤツと云ふ聲は、途端に、鳩尾へ切先の氷の如くキラリと向いた短刀のために突留められて、アとも、あれとも口へ出ない。殆ど本能的に、其の短刀の手を片手で壓へたばかりである。片手は袖ぐるみ絞られたまゝ、ぐたりと無意識に垂れた。戦くのは膝である。崩るゝのは棲である。その棲も蔽ひあへず、死んだやうになりながら、高く躍つて、乳の波打つ、乳の波打つ胸の響きで、兇漢の膝と我身を隔てた搔卷の、するゝと摺れて行くのが、小袖さへ帯さへありながら、背の生皮を肉ながらめりゝと引剥がるゝ心地がして、亂れ姿に、散り、搖ぎ、溢れ、こぼるゝ、扱帯の、棲の、紅は、血の滴るやうである。

「堪忍して、……堪忍して……」

「何。」

「堪忍して、……堪忍して……」

兇漢は鼻の下で、ドス赤いやうな、厚い、濡れた唇で嘲笑つた。

「馬鹿な事を。——しかし感心だね。よく覺悟をして野暮な聲を出さないね。キヤアで一寸、アアで三寸、危い處でございました、なあ。」

と短刀の尖を柔に垂れたが、

「理解が可いね……第一、身ぐるみ脱ぐとも、有金残らずとも言はないで(堪忍して)は嬉しいよ。」

——成らねえ!

と鋭く唸つて、

「堪忍ならねえ。しかし嬉しいよ。……お嬢さん、二十ださうだね。からまだ初心だらうが、さすがに客商賣……と言つちやあ、御氣にも入るまい。御身分にもかゝるだらうが、理解の疾い處は、さすがだよ。——其の氣で——可いかね、こんな時、じたばたするのは、姫御前のあられない膝小僧を突出して、電車を迫掛けるのも同一だ。……舞臺でもいゝ役處ではありますまい。さ、柔順に此方へおいでなさい。抱上げませうかね。あゝ、肥えちや居るが、柄だけだ、矢張り



軽いや。」

「堪忍して……どんな事でも背きますから。」

「まだ言ふね、銭金が欲くつて、こんな處へ来るものか。……尤も、御祝儀の濟んだ上で、金剛右の指環でも、記念に下さらうツて事なら、それは遠慮しないで頂戴するがね。」

「私は……何にも知りません、全く、そんな事は知りません。」

火のやうだつた耳朶が碧玉の飾をしたやうに青ざめた。

「其處を此方が狙つたんだ——だが、金銭づくなり、腕づくなりで、女に不自由をして居るやうな、けちな野郎だと思ひなさんな。兜を脱いで顔を見せりやあ、随分、其の魚のやうな冷たい目、とろりと鳩のやうに優しくさせる男振かも知れないのだ。翌日にも、ソレ花輪に金貨を縫着けて、自動車で劇場へ出向くと云ふ、寸法も心得て居る、紳士も大諸侯だ。分つたかね。」

「放して、……苦しい。」

「あゝ、切ないかね、得心をすりや放して上げる。……さあ、一度、褌をよく合せて、ちやんと婚禮の威儀を調べて、位を取つて、二足ばかりお練りなさい。此方もお袴で以て整正とする。」と兇漢は、胸を引いて、ぴたりと、枕許に居直つた。

ハツと立つて、染子は憑ものしたやうに、ふらふらと遁げ狀に踏出すと、宙を泳いでのめら

うとした。——着崩れのした裾は、いつの間にか、白刃でグサと疊に縫はれて居たのであつた。

可恐さに、友禪の唯膝で、横に倒れて疊に伏した。

「御免なさい、御免なさい。」

「阿魔、しぶといと手足を縛るぜ。」

今は慍うと、涙で龜裂の入つたやうな目を睜つた。そして震へる手で、化粧の室を指した。

「知つてる。大諸侯の御婚禮に、誰に遠慮があるものか。」

「否、否……私より、私より若い、美しい、」

「何を？」

「若い……美しい、あの娘を、あの娘を。」

「ふうん、いや、こんな時でなくつちやあ、神佛にも言はないだらう、自分より美しいと。うゝ、美しい若いあの娘か。身代りにしろと言ふんだね。」

「然うです。然うです。然うだわ。」

とおどろししながら、薄紙一重の隙を得たか、

「……私は男を、一生男を持ちません。此の身は、身體は、演藝に捧げましたから。」

「洒落臭え事を言ひなさんな。其の演藝に捧げた身體は、俺に抱かれても生きてるだらう。演藝



とかに捧げたと言つた處で、身體を持つちやあ行かないからね。其處へ行くと、此の三太夫侯爵は、捧げないでも持つて行くんだ。が、持つて行かれても、お嬢さん、貴女は死なないよ——悪い夢とも、嬉しい夢とも、あとで斷念はつくんだ。しかし彼室の娘は、あれは死ぬよ。人相を視て知つて居る。お前より若い美しい娘を、何見のがして置くものか。だが、恥しいと口惜しいとで、死なれちやあ事壞した。俺は殺すほど無慈悲ぢやあない——然うかつて慈悲も情も持合せちやあ居らんけれどね、……執念が深いんだ。しつっこいのよ。あくどいのよ。一度見込んだら一生涯つきまとふんだ。それにしちやあ、たつた一度の無理のために、生命を棄てさうな、あの娘は御免だ。」

「染子の目は明くなつた。」

「ですから、私が承知をさせます。」

「承知をさせる、何?……あの娘に……」

「え、それだけの恩を被せてあるんですから。」

「年紀は若い、俺は養生家だ。食傷はしたくない。どつちか一人で辛抱して遣る。だが、納得をさせなけりや不可いんだぜ。お嬢さんにや外科を用るが、あの娘に荒療治は利かないんだ、分つたかね。」

「分つてよ——……三葉ちゃん。」

と、呼ぶ呼吸がはずんで、胸が屈んだ。

「不可え、とに角、聲を立てるのは嚴禁だ。第一、あの娘は、呼ぶまでもない。最う起きて居る。」

——立ちねえ。」

「あれ。」

疊にとぢた短刀を抜くと、染子の手首を掴み狀に引立てた、其の鋭い切尖を、引手に掛けて、キリ／＼と襖を開けた。

「それ見ろ。」

と言つた。三葉子の雪の頸脚が、長く、艶かな麻の葉絞の其の撫肩よりも低くうなだれて、背向に見えたのは、大姿見に眞紅に映つた影である。清らかに美しい二つ姿の、前とうしろにある如く、褥に膝をしめて起上つて居る。

面は白蠟の如く血を冷うして澄切つて、長襦袢の袖口を銜へ狀に、半面を蔽うた唇に、すぐにも舌を噛みさうに引占つて居た。

じろりと視ながら、

「やあ、緋の絞の脊筋の姿見に映るのを見ながら……胸を抱くか。ふん、女優も映るな。一時に



顔が四つ、胴が四つ、眞白な手足が八つ、袖が八枚、帯が四筋、扱帯が七筋、紐が十組……俺は大諸侯だ。」

と言ひながら、染子の膝を、むずりと中山高帽の頭に敷いて、兎漢は三葉子の袴に兩足を踏伸ばした。

「大諸侯だ。」

わっわッ、おッおッと言ふ人聲が、折から、萩に乗り、薄を傳ふやうに、裏田圃の水田に響く。……提灯まじりに、七八人、田子角等が若衆なかまを狩催して、橋の許まで來は來つ、臆病風に誘はれて、どツと遁げ、また密と寄りするのである。

これに驚かされたものであらう。ざッ、はた／＼と庭なる池に、一羽二羽水鳥の羽音がする。

けれども、其の人聲は、垣を越して、廂に訪る、事は素より、蜜柑畑の苞の親爺の蠢くのをさへ發見しさうな性質のものではない。わッと又響いたが、兎漢は落着拂つた。

「ふん。旦那様の御婚禮に、皆祝言を唱へて居る——おい女優の待女郎、手取早く花嫁に納得させろい。」

### その黒髪

「ねえ……三葉さん——あの……ねえ。」

兎賊の所謂、裏田圃の祝言の聲を遠くあしらつて、こゝで染子が三葉に對して言つた事を、未來あるべき女優のために、筆者は、此の年少き藝術家が、嘗て何かの演劇で見たか、或は研究した臺本の中の一齣を、其のまゝ使つた事にして置きたい。

雖然、年經ち、月を経るとともに、染子の名も位置も、ともに高く成つて後、此の沙汰が世に傳へらるゝ様になつた時分には、天晴れ恠くてこそと、却つて自我の見識を、女優のために讚歎する多くの同情家を得たのであるが、——却説、此時、三葉に向つて説いたのは、自分は大都の女優である。汚れたる薔薇は、夜會の裝飾には成らぬ。しかし蝕みたる姫百合は人の胸に縋るの故障はない。……意味は、私は女優だし、貴女はいづれ人妻と成るだけだらう、と言ふのであつた。天の明星のおつるのは、小さく言つても一劇團の破滅を象徴する。流星の消ゆるのは、野へ落ちて、海へ沈んでも、殆ど人の目には留らないと言ふのであつた。此が第一である。第二



は言ふまでもない、雪松家が、幼少の頃から三葉に加へた恩義であつた。  
「私を助けて頂戴、身代りに成つて頂戴、後生です——あとの事はいつまでも、屹とわるくはしなくつてよ。」

最う恚う成つては、略第三者の位置を贏ち得たのであるから、分けて我儘で通つた娘の、聲に抑揚もつけられるれば、表情も、仕種も出來た。

且つ其の冷靜さを思へ。

「私の最眞客に、女醫もあつてよ。」

と、對手を憐むやうに言つた。

三葉は黙つて居る。

「ねえ、三葉さん……飯坂のお父さんも、母さんも——恚うやつて、貴女にお願ひするから。」  
と言つて、手を支いた。圓い指さきも白いが、言ふことも白々しい。

三葉は横を向いて顔を背けた。が、飯坂の兩親が此の場合に身代を頼むと言ふのを否定した様子もあるし、窓の方に見向つたので、最後の遁路を求めたやうでもある。此の窓は、寢しなに雨戸さへ閉してあつた。

三葉子は、長襦袢のふつくりした胸に、深く兩手を組んで、窓を見た目を其のまゝに、膝を支

いて、伸上るやうにして、低い天井を、然も遙なものやうに、瞳をうつとりと見据ゑて仰いだ。高くないのりを捧げたやうでもあり、また、目に見えない何ものかに、別離を告げたやうでもある。其時、風の誘ふ如く、霜を浴びた如く、緋の色が肉身に颯と白すんで、かへつて姿見の裡の影の紅が燦と冴えた。半ば魂が脱けたのかも知れない。

あゝ、俗に、夜中の姿見は、蔽を掛けて置かないと魔が魅すと言ふのである。三葉子も心得ては居たらうが、此の寮の夫人は、夜半の寢覺に、しどけない姿をうつして、それにさへ色をたしなむ癖があつたので、蓋も、蔽ふものの用意は手近には見當らなかつたものである。近頃此の風は、染子も我住居で學んで居た。

三葉子は、閨にスツと立つた。柔な蒲團の上である。身を絞つた姿は、脊丈も伸びたやうに細りと、尙ほ美しい。覺悟をした面は、神々しいばかりに引締つた。此の天井にせめて三枚の木の葉があつたら、唯一つ、星の影さへ透いて見えたら、三葉のあの亡くなつた姉さんの幽霊が顯れたであらうし、然らずば、犠牲は翼を得て天へ飛んだであらう。が、節穴も見えぬ、板ばかりである。

其のまゝ、手を伸べて、三葉子は衣桁に掛けて置いた衣服を取つた。羽織が辻つて、藤紫に緋を翻してするりと落ちると、小袖は、褌がスツと流れて、兩の袖がふるへながらに、持ぬしの膚



の恥を蔽ひたさうに縋りついた。

二

もし、其を着て居たら、剥いで取りもしようものを、兇賊は——澄して居る。むかし人身御供の、色白き娘は怪しき獸に屠らるゝために、膚を潔め、髪を梳り、紅白粉をさへ躰んだと言ふから、花嫁の身拵をするのを却つて娛んで待つのであらう。——兇賊は、唯た今、待女郎に花嫁の義務の催促をした時、おのれは袴を脱いで起直つて、青白い膝をむき出しの遺違に、手を其の膝頭に組んで仰向いて反つて待つのであつたが、人間とも鬼とも見えぬ、狼が前脚を突立てて肩を怒らしたやうである。

三葉子が、着るのかと思へば、然うでない、背後向に、袖で抱き、裾で巻くやうにして、大姿見の面を蔽うて掛けた。其の小袖は、色も香も年の十七其のまゝに艶に、かよわく、ふつくりと掛つた。影の三葉子は消えた——と同時に、本の姿も、ふつと消えるやうに見えた。

兇賊は目を突出しさうに帽子を振つたが、姿見の影にも恥ぢた娘心を透視たらしい。……頭のあたりに残忍な笑の影を漾はせて、足を伸して、爪に掛けて、其の小袖を姿見から、ぐいと引落した。矢張り、紅の影の震へるのを視めながら同じ胸の血を嚙まうとするのであらう。押伏せて

帯を奪ふよりは、此は無慙である。

花の散る風情に三葉は坐つた。

「おい……おい。」

と落着いた粘つた聲で、

「生れるにも死ぬるにも人間は潮時だ。可いか、往生しろ、潮時だ。」

「あなた。」

聲が判明して、三葉の眉は凜とした。

「……………」

兇賊は氣を打たれた。

「其の短刀は切れるの。」

侮切つて、油断をして、疊に翳の撥ねたやうに忘れて居た短刀を、急いで捲り手に、ぎらりと取つて、

「此のお嬢さんの、腕か、首を、一寸落して見せようかね。」

と峰を返して、染子の肩をトンと打つ。

「イ、イ。」と染子は、唇まで青ざめる。



「いゝえ。」

と言つて、三葉は靜に手を伸べて、

「其の短刀を、貸して下さいな。」

「短刀を。」

「何うぞ。……」

「短刀を——おい、年下のお嬢さん。不可え。……お前さんが死んだつて、此方の姉さんを見遁しやあしねえんだと言ふによ。」

「姉さんの身代りに成るんです。私は死にません、短刀を貸して下さい。」

とすると……得ものを借りて、抵抗はうとするとより考へられない。兇賊は部屋の四隅へ目を配つた。可し、それも可からう……此のうら若い、かわいい娘が、抵抗をしようとして、貸せと言ふ短刀を貸さないのは、悪人の恥辱だと思ふらしい。

「うむ、貸す。」

と、短刀を膝に敷くと、齊く、何と思つたか、染子の胸をトンと衝いた。

「あ、——仰向けに倒れる處を、

「跳くな。」と落散つた紅い紐で、ばたくと煽る白い兩脚をぐるぐると巻いて占めた。染子は胸

も乳も亂れたが、それも動かなく成つて、姿見に消ゆる踵は、蛾が落ちて沈んだやうである。

「とに角、刃ものを持たすのだからな、一寸恚うして置かないと、素手であしらふ間に一人は庭へ飛出して騒ぎ兼ねねえ。——靜として居ろ。——さあ、おい年紀下のお嬢さん。」

と言つて短刀を柄から渡した。

三葉子が取つた。

手さきと指と觸れさうに成つたけれど、取つて引寄せようともしないので、兇賊は、衝と肩を引いて身構へた。

「さあ、抗つて來ねえ、——其の苔のやうな口の、白齒の絲切齒で來られるよりは、些とは手應があるだらう。が火箸も持たねえ、身體で受ける。それ、突いて來い。切つて掛れ。一ヶ所ぐる帯代に怪我をして遣る。血が出りや赤切符だ。お嬢さんは白過ぎる。が、俺の血は青くはねえから、矢張り赤切符だ。負けてくれ。ふゝん。」

と傲然としてまた笑つた。

が、三葉子は、せつかくの此の倨傲の標語——とに角怪我はするつもりらしい——標語を、耳に入れた様子もないが、恐怖と絶望のために、失心したのらしくはない。——靜な態度で、手で束髪のピンを探つて、二ところばかり抜いて取ると、其の時、肩が冷たさうに頭を振つた。早や、



おくれ毛がはらくと、……短刀は平で膝の上に置いて居る。そして片手に櫛を抜いて持った。此の時は、珊瑚の撫子が露に眞珠を含んだ毛留であつた——讀者は飯坂の在、湯原村の菖蒲の伸びた細流に臨んで、此の娘が七歳の時、毛利先生が、そつろに涙ぐむまで此の黒髪を撫で愛んだ時の、三葉子を覚えて居て下さるであらうか。

あはれに、いたいけに、且つ藤丈けた……今其とおなじ様子をした。

時に、決然とした氣が籠つて、項を白く滑かさの艶に出るまで衝と俯向いて、ぐらくと振ると、然らぬだにたゞ一筋も別れじとて、打そよぎ縫るまで、おくれ毛の誘つて居た黒髪は、颯と靡いて、肩に亂れた。髻を取る手に、襦袢の袖が鮮紅に翻つて、片手を疾く、逆に短刀を閃然と當てた。電が漆を射たやうである。

「何をするんだ、待て、何をするんだ。」

と兇賊の留める拳は疾かつたが、すつくりと立つて、上から壓へながらじろりと見た目は冷かに落着いたものである。暴ぶる悪魔が、弱い犠牲を取扱ふ餘裕を示す時の態度であらう。

「お嬢さん、何をなさる。」

此は留めるに適當した、穩な、よき言であつた。

「旅の立派な小父さんが、私の七歳の時でした、此の髪を撫でて、（い、髪です、うつくしい）と

言つて下さつたんです。（髪を大事におし）然う言つて、なくなつた姉さんも遺言をしたんです。

——貴方は、私に酷いことをなさいます。飯坂のお父さん、お母さんの御恩がありますから、身代りに覺悟をしました。身體は酷いことをなされませ。此の髪だけは、そんな目には合されません、——小父さんが撫でて可愛がつて下さつた、い、うつくしい……」

と柳を分けた月のやうに、黒髪の裡に、顔の半を振上げて、爽かに言ふうちに、涙がはらくと溢れたが。

恚う言掛けて、俯ぶせに伏して泣いた。膚に凍る血、黒髪に通ふ涙は、清水の湧くばかり濡色の艶を増しつゝ、友染の褥に揺れて靡いたのである。

其の黒髪に、また一枚のきらめく櫛に似て、俯伏した額に短刀の尖の鋭く洩れたのを、兇賊はトんと、軽くたゝいて取つた。

「あつたらものだ、——島田も見だし、圓鬚はどんなだらう、櫛巻が堪るめえ。——お嬢さん、時節の來るまで預けて置くぜ。……」

じろく〜と見て、傾いてニヤリとした。

「煩ひなさんな。——然やうなら。」

血の地獄が闇夜になる。カチンと電燈を消して暗くした。



あの、裏田圃の人聲を、雲から押伏せるやうに、大な聲で梟が鳴いた。  
 天人が下りたやうに、三葉子の、立姿に白芙蓉を粧つた電燈がつくと、此には羽織も掛けなかつたが、兇賊の目は悪事に馴れて、猫の如く暗中にものが見えるらしい。……仰向けに倒れた染子の縛られた脚の上へ、袴を掛けて、胸には嘉傳次の布子を着せて、顔をよけて、勝曼華をも挿むべき女優鬘に、すつぱりと茶の中山高帽を被せてあつた。——意義ある劇には、こんな馬鹿な扮装はない筈であるのに。

——三葉は、やがて病氣して飯坂に歸つた。

彫工

一

こゝに年少き一人の彫刻家がある、鶴樹雛吉、一雛と言ふのである。

その半生は——靜に穩なものであつた。静岡の寺でお新發意で育つて、中學を出てから上京して、幼い時よりの望の如く、美術學校に彫刻を學ぶ身と成つた。我が學問のほか餘念はない。又よく出来る。しかし餘所目には寂しい生活をして居た。青年として、春の花に血を咲かすやう

ではない。うら若い出家が緋葉を視めるやうな風情である。色は冴えても冷かつた。

人情としては、どちらが自然だか、急に判断は出来ないけれども、顔も容子も其のまゝに肖て居ると言はれる、毛利先生を師として、學校で仰いで居れば、餘計に進んでも近づき親むべきでもあらうのに、學友たちが數々先生の住居へ出入るのに誘はれても、肖て居ると言はれるだけ、尙ほはにかむのであらう。まだ其の門に候しないほどである。

で、鶴樹寺だの、お新發意だのと言ふほかに、「あゝ、一刀三拜子か。」と言つて、學友たちは別ものにして置いた。朝夕の霜はかゝつても、黄菊白菊、日も月も晴れて續いたのに、忽ち晴天に旋風が捲起つて、此の黒檀の船に、木蓮花の苦かけて、深き淵に晝の月を凝視るやうな、雛の藝術家を、足も頭も引攪つた。

黒雲から婦の手が出たのである。

怒る旋風は、柱を脱き家を崩すとともに、濛々たる砂煙の裡には、捻切られた木の葉も薫り、吹折られつゝ花も輝く、凄じい色も香も、火のやうにまじつて飛ぶものである。

眞黒な雲を分けて、こゝで其のあとを少し尋ねよう。

昨年の丁度——九段に招魂祭のあつた晩である。

鶴樹の宿は牛込の赤城下に木蓮館と云ふ——新發意だの、鶴樹寺だのと呼ぶ、男に、故とらし



いが、然うではない。表の塀に紫の花の咲く、大な木蓮の樹があつて、眞晝の霞靄として、薄色櫻盛の頃は、赤城の見霧から早稲田を通してさながら花の浪に紫の帆がほんのり浮く。——其處が下宿である。……鶴樹は、番町邊の友だちを尋ねて、珍しく夜を更した、十一時前後に、九段を通ると、何となく祭の燈に誘はれて、本殿に一拜をした後、競馬場の燈の海に一つの影を漾はす身と成つた。

二三日雨續きで、其日は朝から霧つたのであるが、あの群集で捏返した道は、飛々に拾はねば成らぬ。また一面の靄であつた。

時に、鶴樹が誘はれた幾萬の燈は、さながら不知火の趣があつた。何故だと言ふのに、近づくと従つて、次第々々に疎に成つて消えて行く。——時間が来て、見世物小屋が順に電燈を消すのである。

雪崩るゝ、夥多しい人足も、濁つた空氣の中を大溝の流るゝやうに段々に捌けて薄く成る。アセチリンの臭がもんと籠つて、赤黒く染つた濃い深い靄の裡に、幕を放して、片づけ際の見世物の光景が茫と浮く。——悪魔が啖ふ血を装つた白磁製の白鳥を穴藏に積んだ如く、白々と影を映してふツと消えたのは、裸體の婦の懐妊の腹を解いた人形の小屋である。出刃を銜へた白髪の婆々の青い顔が、ぶるゝと障子の棧を覗いて引込む。——足を空さまに上げて、赤い蹴出しの

中で、ものを縫ふ婦の看板が横倒しに成つて居る。兩頭の猫、六足の狗、角の生えた鴉、怪しき鳥、不思議な獸が、むらゝと暗夜の欄間に群がつて、其の間を、曲馬の馬は人を乗せて、鬼に追はるゝやうに駈廻る。

不思議に、一世紀の終局のものが、新しき世に一線を劃して、あはや亡びんとする瞬間を、大なる穴に通籠つたやうである。

鶴樹は頭が疼く成つた。息苦しい。

二

其の間を人に揉まるゝ。

地は沼のやうな泥で、ちよろゝと這つて残る露店のかんてらは、血であへるに似て、青く消える影は、燐火に齊しい。

ふらゝと鶴樹は辿つた。

何故か、あの宙を飛ぶ看板の馬の頭に縛められ、可恐き鬼に一鞭くらふとともに、九段の空を、外神田まで投出されさうな氣がした。

身はたゞ芥に成つて、人脚と泥の瀬に柵むと思ふ一構の小屋の口に、嬉しや救はるゝ、故郷の